

自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児における象徴遊び
の発達と発話表現の高次化に関する縦断的検討

東京学芸大学大学院
連合学校教育学研究科
学校教育学専攻 発達支援講座
東京学芸大学
R183002
溝江 唯

目次

第1章 序論	
第1節 定型発達幼児と自閉スペクトラム症幼児の象徴遊びの発達過程について	1
第2節 象徴遊びと言語発達との関連および自閉スペクトラム症幼児の言語発達の特徴	6
第3節 博士論文の目的	10
第2章 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児における象徴遊びのレパートリーや連鎖に関する縦断的検討	11
第3章 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の獲得語彙及び物語り発話に関する検討	
第1節 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の獲得語彙について	36
第2節 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の「お話し作り」課題における語連鎖及び物語り発話に関する縦断的検討	40
第4章 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の象徴遊びの発達と言語発達との関連について	
第1節 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の象徴遊び行動と獲得語彙の関連について	56
第2節 自閉スペクトラム症幼児および定型発達幼児における象徴遊び行動の連鎖と物語り発話との関連	64
第3節 象徴遊び場面における自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の自発的発話に関する事例的検討	78
第5章 総合考察	90
引用文献	95

1 章 序 論

第 1 節 定型発達幼児と自閉スペクトラム症幼児の象徴遊びの発達過程について

1. 3つの観点から捉えた象徴遊びの発達過程

象徴遊び (symbolic play) は、ある事物を別の物であるかのように表現する遊びである。これは認知の中でも表象機能の発達を反映すると考えられている (Leslie, 1987 ; Lillard, 2017)。一方、象徴遊びは社会性や言語の発達との関連性も指摘されており (e.g. Harris, 2000 ; McCune, 2008 ; Westby, 2000) , 発達に遅れのある幼児の支援の場において、子どもの発達水準を大まかに捉える際の観点のひとつにもなっている。象徴遊びはふり遊び (pretend play) と称されることもあるが、本研究においては「象徴遊び」と表記する。生後 8~11 か月ごろの乳児は、コップを取り自分の口につける、櫛を持ち自分の髪にあてるといったように物を慣習的に扱うようになる (McCune, 2008)。これは物の実際的使用を模倣しているに過ぎないと考えられており、このような遊びを McCune (2008) は「前象徴遊び」、Bates, Camaioni, & Volterra (1975) は「動作的命名」と呼んでいる。次の段階になると、幼児は現実の行為と表象的行為とを区別して「ふりをしている」という認識が芽生え、表情、擬音語等を使用して遊んでいる行為と現実的な目的のある行為との違いに気が付いていることを示す (McCune, 2008)。例えば、コップを口に持っていき擬音語を伴い飲むふりをするといった遊びが挙げられる。太田・林 (2000) は、象徴遊びを評価する際に、象徴としての現実的な対象の使用が徐々に減っていく「脱文脈化」、動作主としての自己のふりから他者を対象としたふりへの移行である「脱中心化」、連鎖的に行為を結び付ける能力である「統合化」の 3 軸から評価を行っている。本研究においては太田・林 (2000) を参考に、「物の使用の観点」「物と人との関係性の観点」「連鎖の観点」の 3 つの観点から象徴遊びの発達を捉えていく。

象徴遊びを物の使用の観点から見ると、コップをコップとして、櫛を櫛として使用される初期のふり遊びから、徐々に物を実際の用途を超えて使用するようになる過程がある。Harris & Kavanaugh (1993) は、幼児は 2 歳ごろには、物の見立てを理解していると論じている。また、Trawick-Smith (1990) は、スプーンをカップに入れるといった物を慣習的に使用する段階、ブロックをピザに見立てるといった物の用途を超えた見立てを行う段階、手を使って櫛でとかすふりをするといったように手などの身体部位を物に置き換える 3 つの段階があると述べている。

一方、象徴遊びにおける物と人との関係性の観点からみると、物が自分自身に向けられる初期の遊びから、コップを母親に向け飲ませるふりをするなど、他者が遊びに含まれていく過程がある。前者は「自己に向けたふり」(Belsky & Most, 1981)や「自動象徴シエマ」(McCune, 2008)、後者は「脱中心化遊び」(McCune-Nicolich, 1981)や「受動的他者」(隴田, 1988)と呼ばれている。幼児はさらに、人形にご飯を食べさせるといった遊びから、人形を操作し、人形自身にご飯を食べたり、人形自身が歩いたりするといった人形を行為の主体とした遊びを展開していく。この遊びは「能動的他者」と呼ばれる(隴田, 1988)。Wolf, Rygh, & Altshuler (1984)によると、幼児は2歳過ぎから、人形に欲望や知覚といった単純な心的状態を持たせるようになっていく。他者が含まれてくる遊びは、遊びの参加者や人形に役割を持たせる遊びへとさらに発展していく(Harris, 2000)。

象徴遊びの行為が組織化してく過程である連鎖の観点においては、McCune (2008)やWestby (2002)がその発達過程について述べている(表 1-1)。McCune (2008)は、幼児は13か月から18か月ごろに、「子どもが瓶からのみ、人形に瓶から飲ませる」、「子どもがポットを混ぜ、人形に食べさせる」といったように、ふり行為を結合させるようになり、18か月から24か月ごろには「子どもはおもちゃの食べ物をポットに入れ、かき混ぜ、母親に食べさせる前に“スープ”と言う」、「子どもはボトルを取り、“赤ちゃん”と言って人形に飲ませ布をかける」といった、より計画性のある「階層的なふり」遊びを行うと述べている。また、Westby (2000)は、幼児は2歳頃に人形をお風呂に入れて出すといったつながりのある遊びをするようになり、3歳頃になると食事の準備をして食べて片付けるといったような出来事を順序立てた遊び、4歳頃には誕生日パーティーを順序立てて行うといった計画性のある遊び、6歳頃にはストーリーラインが精緻化された遊びへと発展していくと論じている。また、Orr & Geva (2015)は象徴遊びの連鎖の過程を、「積み木を耳にあてて電話を取るふりをする」といった単一の物で単一の行動を象徴する遊び(single-object play)、「透明な布で顔を覆うふりをして、大人に顔を向け布から顔を出し笑う」といった単一の物で複数の行為を連鎖させる遊び(single-object sequence)、「積み木をお皿に見立て、棒をスプーンに見立てて混ぜる」といった複数の物を使用して単一の行為を表象する遊び(multi-object play)、「積み木を食べ物に見立てて鍋に入れ、スプーンに見立てた棒を使って混ぜてから蓋をする」といったように、複数の物を使用して複数の行為を連鎖させる遊び(multi-object sequence)の4つの段階にて幼児の遊パーティー観察している。

表 1-1 遊びの連鎖の発達過程

McCune (2008)	Westby (2000)	Orr & Geva (2015)
<p>13 から 18 か月 ふり行為の結合</p> <p>18 から 24 か月 階層的なふり</p>	<p>2 歳頃 流れのある遊び</p> <p>3 歳頃 出来事を順序立てた遊び</p> <p>4 歳頃 計画性のある遊び</p> <p>5 歳頃 ストーリーラインが精緻化された遊び</p>	<p>8 か月頃 Single-object play</p> <p>10 か月頃 Single-object sequence</p> <p>12 か月ごろ Multi-object play Multi-object sequence</p>

*McCune(2008), Westby(2000), Orr(2015) を基に作成

象徴遊びは表象機能等の認知発達や社会性の発達との関連について検討されてきている。物の使用の観点においては、表象能力との関連について多くの研究がなされており、Lillard (1993b) は物の見立てとは1つの事物に2つの異なる心的表象を考えることであり、そのペアをいくつも受け入れられることができるには高度な表象能力が必要であると述べている。また、物の見立ては、他者の意図や感情を推測する心の理論との関連についても指摘されている。Lillard (1993a) はこれら両方に必要なスキルとして、同時に1つの物を2つの物として考えるスキル、1つの物を他の物として表象するスキル、心的表象を表象するスキルがあると述べている。杉本 (2004) は3歳～5歳児を対象とした研究において、「丸い積み木を太鼓に見立てた後に、それを車に見立てる」といった見立ての柔軟性が後の誤信念課題の成績を予測することを示した。また、多様性のある見立てが誤信念課題の成績を促進する理由として、(1) 1つの物に2つの異なる表象を考える表象能力、(2) その2つの表象を混同しないで明確に区別する表象能力、(3) その表象のペアをその時々文脈に合わせて使い分ける操作的な表象能力等必要な認知機能が共通していることを挙げている。

心の理論と象徴遊びとの関連については、「物と人との関係性の観点」においても検討されている (Astington & Jenkins, 1995 ; Nielsen & Dissanayake, 2000 ; Youngblade & Dunn, 1995 ; Jenkins & Astington, 2000) 。 Jenkins & Astington, (2000) は、誤信念課題の成績が良い子どもは、後に、遊びの参加者に役割を持たせる遊びにおいて、共同的提案や役割当てを頻繁に行うという結果を示した。

象徴遊びに関連する他の認知能力として「出来事を象徴化する力」が挙げられる。小山 (2012) は初期の能動的他者の設定が含まれる遊びは、親の養育行動を模倣し、日常場面の身近なテーマを扱うことが多く、身近な行為の客観化と象徴化の現れと考えられると述べている。また、象徴遊びは現実の形態や機能から切り離すこと (抑制機能) , 自発的な象徴遊びを開始, 生産すること (生産機能) , 1つの見立てから別の見立てにシフトすること (シフティング) といった実行機能との関連が指摘されている (Harris, 1993) 。また, McCune (2008) は階層的なふりにおいてはワーキングメモリーやプランニングの発達との関連があることを指摘している。また象徴遊びと抑制機能との関連について, 48 か月~89 か月児を対象とし検討を行った Kelly & Hammond (2011) は, 自由遊び場面におけるふり遊びのテスト (Lewis & Boucher, 1997) の成績と, 抑制機能を測る Sun-Moon Stroop Task の成績に関連があることを指摘している。このように象徴遊びは表象機能のみならず, 他の認知機能や社会性の発達との関連が認められている。

2. 自閉スペクトラム症幼児の象徴遊びの発達

象徴遊びは, 他者意識との関連 (小山, 2012) や心の理論との関連 (Jenkins & Astington, 2000) といった社会性の発達との関連についても検討されてきている。これらはいずれも自閉スペクトラム症 (以下 ASD) の子どもに困難があるとされる領域である。そのため, ASD 幼児の象徴遊びについては多くの研究がなされてきている。ASD 幼児は定型発達 (以下 TD) 幼児と比べ, 象徴遊びの発達が遅れることや (Baron-Cohen, 1987 ; Charman, et al, 1997) , 象徴遊びの頻度の少ないこと (Libby, Powel, Messer, & Jordan, 1998) , 実際の物の用途を超えた見立てが少ないこと (Campbell, Leezenbaum, Mahoney, Moore, & Brownell, 2016) が指摘されている。さらに, 象徴遊びを行う ASD 幼児においても, コップで幼児自身が飲むふりをするといった, 物を自分自身に向ける遊びは多いが, 養育者等に向けた遊びや人形を使用した遊びの頻度が少ないこと (Ungerer & Sigman, 1981) , TD 幼児は1つの物でいくつもの物を表象するのに対し, ASD 幼児は人形に何度もご飯をあげ続けるなど遊びの柔軟性において制約があること (Ungerer & Sigman, 1981 ; Williams, Reddy, & Costall, 2001) が報告されている。

これら ASD 幼児を対象とした先行研究における課題のひとつに、対照群である TD 幼児との統制が挙げられる。先行研究では、言語表出年齢 (Libby, et al, 1998) や、獲得語彙の量や Vineland 適応行動尺度のコミュニケーション領域の年齢 (Williams, et al, 2001) で統制が行われている。藤野 (2002) は言語理解の発達が象徴遊びの発達との関連があることを指摘し、両群を統制する際には、言語表出年齢や獲得語彙の量ではなく、言語理解年齢で統制する必要性を述べている。また、これまでの研究では、ASD 群の発達年齢 (以下 DA) や精神年齢 (以下 MA) が TD 群の生活年齢 (以下 CA) と統制はされていたが、ASD 群の CA には大きく幅があり、ASD 群に知的発達の遅れがある児が含まれていることも課題である。

また、先行研究で十分に検討されていない側面に、ASD 幼児における象徴遊びの連鎖がある。先述したように、象徴遊びを物の使用の観点や、物と人との関係性の観点から分析した検討は多くあるが、ASD 幼児を対象とし、象徴遊びの連鎖に着目した検討は少なく、数少ない研究の中でも「連鎖」の定義は一貫していない。Ungerer & Sigman (1981) は「2つ以上の物を使用し、連続して実行された関連する行動」と定義し、知的発達の遅れがある ASD 幼児の象徴遊びの連鎖と言語発達との関連を指摘した。また、遊びの連鎖を遊びの複雑さの尺度として評価した Lewis & Boucher (1995) は、「ひとつの遊びのましまりにおける行動の種類割合」として定義し、知的障害の伴う ASD 児と言語発達水準を統制した学習困難時児、TD 児とでは遊びの複雑さに群間差は認められないことを示した。ただし、Lewis & Boucher (1995) の研究においては、ミニカーを使用した遊びといった象徴遊び以外の遊びも評価に含まれていた。象徴遊びの連鎖が出現するには出来事の一部の表象化だけでなく、出来事全体のつながりも含めて事象を理解し象徴化する機能との関連も考えられる。出来事自体を他者の視点から取り入れ象徴化する必要があり、このようなことが困難と考えられる ASD 幼児は TD 幼児に比べて象徴遊びの連鎖に困難があることが推測されるが、現段階では十分な知見が得られていない。

また、象徴遊びの生起頻度やレパートリーについて ASD 幼児は TD 幼児との比較が行われてきているが、知的発達、言語発達ともに遅れのない ASD を対象に、縦断的に比較を行った検討はない。象徴遊びのレパートリーの増加には幼児の柔軟な表象能力や出来事を客観的に捉え理解する力の発達が支えとなることが推測される。先行研究において、ASD 群は象徴遊びのレパートリーが少ないことが指摘されているが (e. g Libby, et al, 1998 ; Ungarner & Sigman, 1981) , ASD 幼児の特徴が初期の段階から認められるのか、それとも徐々に TD 幼児との差異が顕在化するのかについては明らかにされていない。また、年齢が上がり、順序立てた遊びやストーリーラインのある遊びを展開するよう

になると象徴遊び行動のレパートリーのみでなく、表象する遊びのテーマ（例：「食事」や「公園」など）が多様化していくことが推測されるが、表象するテーマに焦点をあてた検討はなされていない。象徴遊びが発展していく初期の段階から縦断的に ASD 幼児と TD 幼児を比較検討することは、ASD 幼児の象徴遊びの特徴の顕在化の過程を明らかにすると考えられる。

第2節 象徴遊びと言語発達との関連および自閉スペクトラム症幼児の言語発達の特徴

1. 象徴遊びの連鎖と言語発達との関連について

言語は意味を表象する記号の体系であることから、象徴遊びと言語発達との関連についても論じられている。幼児期の言語発達においては、語彙の獲得から語連鎖、文法性を示す格助詞等の獲得を経て、複数の文の連鎖に至る。幼児は3歳ごろになると接続助詞を使用し、一発話内で重文・複文構造を作るようになる（大伴，2000）。McCune（2008）は語彙の獲得から発話の連鎖の出現と象徴遊びの出現時期の関連について論じている。自己に向けた象徴遊びの時期に有意味語が出現し始め（初語期），他者・人形へ向けた象徴遊びが始まる時期が一語発話期にあたると述べている。McCune（2008）によると、他者・人形へ向けた象徴遊びにおいては、シエマを自己から分離し客観視し一般化して捉える力が必要であり、一語文期における語彙増加においては、具体的な状況下における語彙の使用からの脱却し、語彙を使用するようになる過程があると述べている。このように、他者・人形に向けた象徴遊びと一語文期における語彙増加には具体的状況下からの脱却や対象化、客観化という共通の認知的基盤があると論じている。また、McCune（2008）は象徴遊びの連鎖と発話の連鎖との関連について、複数のふり行為の組み合わせが起こる時期が二語発話期、プランのあるふり行為が起こる時期が多語文期にあたると論じている。

幼児は4歳ごろには、接続表現が多様化し（大伴，2000），5歳では事象の連続性や因果関係を表す接続詞、接続助詞を用いて、発話同士を結び付けることが多くなり、まとまりのある発話を連鎖させていく。このような構造面の変化を基盤として、出来事の連続性や因果関係などの論理的な関係性が明示される語り（narrative）へと発達していく。語りには、自分自身のことを語るパーソナルナラティブと、空想の物語を語るフィクショナルナラティブ（以下 FN）がある。FN の発達過程においては、4歳ごろから時間軸に沿って話をするようになり（Pettersen & McCunbe, 1983），CAが高くなると因果関係や登場人物の内的状態について言及したり、プランをもって話をしたりするようになる

（Benson, 1993；小坂，2016）。FNを産出するためには、登場人物や行為を明確にし、

語彙を選択して文法的構造に基づき計画性をもって表現することが求められる。このように、ナラティブは子どもの認知的・言語的能力を反映するため、幼児期のナラティブ産出能力は、学齢期以降の認知能力の発達の基盤となると指摘されている (Feagans & Appelbaum, 1986 ; Fox & Wright, 1997 ; Houston, 1997) 。語りと象徴遊びの関連について、Westby (2000) は、幼児が遊びを連鎖させていくにつれて接続詞を使い、計画性のある語りを発達させていくと述べ、象徴遊びの連鎖と語りの関連性について述べている。小山 (2012) は象徴遊びの場で現実経験と結びついた予測やプランニングといった認知発達が遊びの中で促進され、心の理論や言語発達につながっていることを指摘した。

一方で、Nicolopoulou (2007) は、物語り発話 (story telling) と役割を持ったふり遊びは認知的基盤が異なると指摘している。物語り発話では、一貫性のある物語りのプロットを計画することが必要だが、ふり遊びにおいては、一貫性を持ったプロットを計画する前に幼児はキャラクターを演じ始めると述べている。象徴遊びと言語発達との関連においては、相互の出現時期を指標とした研究はあるが (McCune, 2008; Westby, 2000) , 象徴遊び行動のレパートリーや連続性と発話の連鎖におけるトピックの広がりといった発話内容の相互性を見た研究は少ない。

2. 自閉スペクトラム症幼児の語彙の獲得から談話への発達過程の特徴について

前言語期の ASD におけるコミュニケーションの特徴のひとつとして、共同注意の困難が挙げられている。共同注意は言語発達の基盤となるため、ASD 幼児の初期の言語発達が遅れる要因となることが指摘されている (Mundy, Sigman, & Kasari, 1990) 。また、興味関心の偏りや対人的かかわりの難しさという ASD の特徴も言語発達に影響を与える可能性がある。このような背景から、ASD 幼児の初期の語彙の獲得に焦点を当てた研究が多く行われている。初期の言語発達には、語彙と統語 (文法) の側面がある。語彙面の検討において、Charman, Drew, Baird, & Baird (2003) は語彙の質問紙である MacArthur Communicative Development Inventories (MCDI) (Fenson, et al, 1993) を用いて ASD 幼児と TD 幼児の比較を行った。語彙を普通名詞や述部を表す動詞・形容詞などに分類し両群の獲得語彙数を比較した結果、ASD 幼児は語彙の獲得に遅れを呈するものの、獲得のパターンは TD 幼児と似ていることが示された。また、Rescola & Safy (2013) は語彙の豊富さを統制した ASD 幼児と TD 幼児を対象とし、LDS (Language Development Survey) を用い、「動物」「食べ物」「動作語」「修飾語」といった 13 の意味的カテゴリーにおける獲得語彙の比較を行った。その結果、Charman, et al (2003) と同様に ASD 幼児は TD 幼児と比べて語彙の獲得に遅れはあるが、TD 幼児と獲得パターンは同様

であると報告している。一方で Lazenby, et al (2016) は言語発達を統制した ASD 幼児と TD 幼児の獲得語彙を比較し、特定の語彙において ASD 幼児の方が TD 幼児よりも成績が高かったと報告している。

日本語では、吉岡 (2018) が動作性 IQ において境界域から正常域までの ASD 児を対象とした検討を行い、ASD 児は表出語彙に占める割合に名詞が多いことを指摘し、動詞の割合の増加は語彙理解力が関連していると報告している。また、藤上・大伴 (2009) は、知的な遅れを伴う ASD 児と知的障害児を比較した検討を行い、ASD 児は会話指向的な語彙や対人指向的な語彙が知的障害児よりも少ないことを明らかにした。MCDI は日本語版マッカーサー乳幼児言語発達質問紙 (以下 JCDI) として標準化されている (小椋・綿巻, 2004; 綿巻・小椋, 2004)。JCDI は 8~18 か月児に適用される「語と身振り」版と 18~30 か月児に適用される「語と文法」版がある。「語と文法」版においては、表出語彙は 24 の意味的カテゴリーにわたる全 771 語で構成されている。JCDI における語彙の検討は模倣能力との関連 (小山, 2020) や、物へ関わる行為・認識との関連 (岩崎・畔上, 2018) の側面から行われている。獲得語彙の意味的カテゴリーについて JCDI を使用して検討した研究としては、初語の出現の遅いレイト・トーカー児を対象とした研究が挙げられる (奥村・小林, 2019)。レイト・トーカー児と TD 児の獲得語彙について JCDI の意味的カテゴリーを用いて比較を行った結果、両者は同様の獲得パターンを示すと奥村・小林 (2019) は報告している。このように、語彙の意味的特徴に着目した検討は、発達の遅れや知的障害のある ASD 児、レイト・トーカー児を対象とした検討は行われているが、明らかな発達の遅れのない ASD 幼児と TD 幼児との比較については、十分な知見が得られていない。

FN の産出においても、ASD 児はその特徴が指摘されている。FN の産出には語彙や文法等の記号的側面のみでなく、登場人物の心情について推測することや他者に分かりやすいように話を組み立てる配慮といった語用論的な側面が含まれる。そのため、語用論に困難をもつとされる ASD 児者における FN の特徴について検討した研究は多い (Diehua, Bennetto & Young, 2006; 李・田中, 2013; Losh & Gordon, 2014)。ASD 児の語りには、統語面、構成面、登場人物への言及に関する特徴が指摘されている。統語面の特徴としては、助詞の誤用が多いなどの指摘があるが (夏目・廣瀬, 2017)、言語表出や言語理解の発達水準を統制した場合には、統語面での差は無いという見解もある (Diehua, Bennetto & Young, 2006)。構成面の特徴としては、物語の因果関係について推測したり、因果関係を構築したりすることの難しさ (Losh & Capps, 2003; 李・田中, 2011) やストーリーの内容とは無関係な発話の多さ (夏目・廣瀬, 2017)、要点を整理して一貫

した話しをすることの困難 (Diehua, Bennetto & Young, 2006) が指摘されている。登場人物への言及に関する特徴としては、心的状態への言及の少なさ (李・田中, 2011 ; Tager-Flusberg, 1995) や、登場人物や場所、行動的状況に対する言及の少なさ (李・田中, 2013) が報告されている。ASD 児の語りの特徴に関する背景要因として、他者と話題や出来事を共有することの困難 (Goldman, 2008) , 感情理解の制約 (Losh & Capps, 2003) が挙げられる。

ASD 児のナラティブを対象とした検討は学齢期 (李・田中, 2013 ; Losh & Capps, 2003 ; 夏目・廣瀬, 2017) やそれ以降を対象とした研究 (Cristilli, Capirci, & Graziano, 2010) が中心であり、より早期の文連鎖の出現からナラティブの産出に至るまでの移行期において、ASD 幼児と定型発達 (以下 TD) 幼児との間に何らかの違いがあるのかどうかについては明らかになっていない。また、従来 FN の研究では、人形劇や文字のない配列画を子どもに見せながら話を聞かせた後に話の内容を語り直してもらうナラティブ再生課題 (Losh & Gordon, 2014) や、マンガや紙芝居のような連続絵を子どもに見せて語ってもらう課題 (夏目・廣瀬, 2017 ; 斎藤, 2002) が用いられてきた。しかし、ナラティブ再生課題では一度聞いた話の記憶や配列画等の支えにより、子どもの言語力が過大に評価される可能性がある。また、連続図版の使用では、物語の構築が図版の視覚情報により制限され、FN を支える自由な発想が発現しにくいという制約も生じうる。

先述してきた通り、ASD 幼児は語彙の獲得や FN の特徴について指摘されてきているが、語彙の獲得から FN へ至る過程については十分な知見は得られていない。

ASD 児の象徴遊びの発達と言語発達との関連においては、小山 (2001) が、4 歳～7 歳の自閉症児を対象にした検討において、他者からの人形を用いたはたらきかけを受け止めることができる時期に特に会話が成立し始め言語発達に進展がみられたと述べている。このように象徴遊びの出現時期と言語の出現時期の関連について論じているものの、遊びのレパトリーの広がりや連鎖の発達と獲得語彙及び、物語り発話との関連についての知見は十分に得られていない。初期の象徴遊びは他者との共同注意を基盤とした関わりの中で言語的交渉が生じ、養育者からの言語入力が行われていることが予想される。このような日常場面で起こる幼児の自発的な象徴遊びにおける関わりが、幼児の言語発達に影響を与えていることを考慮すると、象徴遊びの出現時期のみでなく、生起頻度やレパトリー数に焦点をあてた検討も必要であろう。

第3節 博士論文の目的

本論文の目的は知的発達・言語発達ともに遅れない初回評価時2歳半～3歳半のASD幼児とTD幼児を対象とし、以下のことを明らかにすることであった。

- (1) 象徴遊びのレパートリーの広がりや連鎖の発達過程を明らかにすること
- (2) 幼児の語彙の獲得や物語り発話の発達過程を明らかにすること
- (3) 象徴遊び行動のレパートリーや連鎖の発達と、獲得語彙や物語り発話といった言語発達との関連を明らかにすること

第2章ではまず、象徴遊びのレパートリーや連鎖の発達過程についてTD幼児と縦断的に比較を行い、ASD幼児の象徴遊びの発達過程の特徴を明らかにすることを目的とした。第3章では意味的カテゴリー別の獲得語彙について両群の比較すること(第3章1節)、物語り発話における発話内容の広がりや連鎖について両群を比較すること(第3章2節)を通して、ASD幼児における語彙の獲得から発話内容の連鎖に至る発達過程の特徴について明らかにすることを目的とした。第4章では、ASD幼児及びTD幼児の象徴遊びのレパートリーの広がりや獲得語彙との関連について明らかにすること(第4章1節)、象徴遊びの連鎖の発達と物語り発話の発達との関連を明らかにすること(第4章2節)、象徴遊び場面における自発的な幼児の発話の特徴を明らかにすること(第4章3節)目的とした。なお、「ナラティブ」は「出来事を時間的・因果的につなげ、評価を行うことを通して意味付けること」とも定義されている(Fivush, 1994)。本論では、低年齢の幼児を対象としており、物語りの産出に焦点をあてた検討を行うことから、物語りの語りを「物語り発話」と称する。

第2章 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児における象徴遊びのレパートリーや連鎖に関する縦断的検討

1. 問題と目的

序論で述べたように、ASD 幼児の象徴遊びの先行研究においては、象徴遊びの連鎖に着目した検討が少ない。また、象徴遊びのレパートリーが少ないといった ASD 幼児の特徴が顕在化する過程については明らかにされていない。先行研究では、ASD 群の DA や MA が TD 群の CA と統制はされていたが、ASD 群の CA には大きく幅があり、ASD 群に知的発達の遅れがある児が含まれていることも課題である。これらの背景をふまえ、本研究においては、知的発達の遅れが認められない ASD 幼児を対象とし、言語・コミュニケーション発達スケール (LC スケール) の言語表出 LC 年齢、言語理解 LC 年齢、コミュニケーション LC 年齢、総合の LC 年齢を TD 群と統制した上で、象徴遊び行動の生起頻度とレパートリー数、「ミニチュアを使用した象徴遊び」及び具体物をイメージさせないもの (例：積み木) を特定の物に見立てる「見立てを含む象徴遊び」行動の生起頻度、他者の設定が含まれる象徴遊び行動の生起頻度、象徴遊びのテーマの生起頻度とレパートリー数、象徴遊び行動の連鎖に焦点を当て、群間の比較を縦断的に行うことを目的とした。Westby (2000) は、幼児は 2 歳頃につながりのある遊びをするようになり、3 歳頃になると出来事を順序だてた遊びを行うと指摘しているため、象徴遊び行動の連鎖や表象されるテーマが多様化する過程を評価できるよう、初回評価時 2 歳半から 3 歳半の幼児を対象とした。データ収集の間隔は、発達的变化が著しい年齢であることから約 6 か月ごとに設定した。

本研究の仮説は、1) TD 群は生活年齢の上昇に伴い象徴遊び行動のレパートリー数や表象するテーマのレパートリー数が増えるが、柔軟な表象能力や出来事を客観的に捉え理解する機能の発達に制約があると考えられる ASD 群はその変化が乏しい、2) 物の見立ての観点である「ミニチュアを使用した象徴遊び」及び「見立てを含む象徴遊び」行動の生起頻度は、知的発達の遅れのない ASD 幼児を対象とした本研究においては群間に差はない、3) TD 群は生活年齢の上昇に伴い他者の設定を含む象徴遊び行動の生起頻度が増加するが、他者の視点から出来事を取り入れ象徴化することに困難があると考えられる ASD 群はその変化が乏しい、4) TD 群は生活年齢の上昇に伴い象徴遊び行動の連鎖数が増加するが、出来事全体のつながりを含めて理解し表象する機能に困難があると考えられる ASD 群はその変化が乏しいという 4 点とした。

2. 方 法

(1) 研究参加児

医療機関で ASD の診断を受けた CA30～42 か月の男児 10 名（月齢平均：36.7 か月，標準偏差 SD：3.75）を対象とした。ASD 幼児の新版 K 式発達検査 2001 の三領域合計の DA は 29～44 か月（平均 34.3 か月，SD5.31），発達指数（DQ）は 84～110（平均 93.9，SD8.11）であった（表 2-1）。また，個々の ASD の特徴を把握するために，SRS-2（対人応答性尺度第二版）を実施した。SRS-2 は ASD の程度を評価する尺度である。65 項目からなる 4 件法の質問紙であり自閉症と関連した症状を量的に測定するものである。SRS-2 は 2 歳半から成人まで評定できる 4 種類のフォームがあり，社会的コミュニケーション（SCI），興味の限定と反復的行動（RRB），総合の T 得点が算出される。本研究では，幼児版のフォームを使用し，養育者に回答を依頼した。ASD の重症度が総合の T 得点により分類され，60～65 が「軽度の範囲」、66～75 が「中度の範囲」76 以上が「重度の範囲」となる。本研究では幼児版の尺度を使用し，ASD の特性について評価をした。ASD 群では軽度の範囲が 7 名，重度の範囲が 3 名であった（表 2-2）。

表 2-1 ASD 群のプロフィール

対象児	Time 1 CA	Time 1 DA	Time1 LC 年齢 表出	Time1 LC 年齢 理解	Time1 LC 年齢 コミュニケ ーション	Time1 LC 年齢 総合	Time 2 CA	Time3 CA	Time3 LC 年齢 表出	Time3 LC 年齢 理解	Time3 LC 年齢 コミュニケ ーション	Time3 LC 年齢 総合
ASD-A	30	30	28	32	25	28	37	44	48	45	38	44
ASD-B	38	38	34	36	41	37	45	52	46	57	52	52
ASD-C	36	29	32	34	33	34	42	48	46	46	44	45
ASD-D	33	29	29	34	29	31	39	46	40	40	41	40
ASD-E	35	32	29	36	31	32	41	47	41	45	40	42
ASD-F	40	44	35	40	40	38	46	51	56	61	63	59
ASD-G	39	40	29	30	30	30	46	51	40	41	41	40
ASD-H	40	34	32	40	37	36	46	51	42	48	48	46
ASD-I	34	30	26	32	26	28	40	46	41	43	50	44
ASD-J	42	36	41	41	48	42	48	54	50	59	53	54
平均	36.7	34.3	31.5	35.5	34.0	33.6	43.0	49.7	45.0	48.5	47.0	46.6
標準偏差	3.74	5.31	4.35	3.81	7.35	4.62	3.68	3.23	5.25	7.66	7.73	6.35

表 2-2 ASD 幼児の SRS-2 の T 得点 (Time1 で実施)

参加児	Time1 SRS-2 SCI の T 得点	Time1 SRS-2 RRB の T 得点	Time 1 SRS-2 総合の T 得点	ASD の程度
ASD-A	78	74	79	重度
ASD-B	60	57	60	軽度
ASD-C	66	46	62	軽度
ASD-D	65	60	65	軽度
ASD-E	79	69	78	重度
ASD-F	56	71	60	軽度
ASD-G	81	66	80	重度
ASD-H	62	71	65	軽度
ASD-I	58	74	62	軽度
ASD-J	59	60	60	軽度
平均	66.4	64.8	67.1	
標準偏差	9.44	8.97	8.42	

注. SCI : 社会的コミュニケーション, RRB : 興味の限定と反復的行動

TD 群は CA30~41 か月 (平均 36.4 か月, SD3.20) の男児 10 名であった。ASD 幼児は男児のみとなったため, 対照群の TD 幼児も男児のみとした。ASD 群の CA および DA と TD 群の CA に有意差はなかった。ASD 群, TD 群ともに, 3 回にわたりデータ収集を行った (Time1, Time2, Time3)。各データ収集時の間隔は 6±1 か月であった。Time1 と Time3 において両群に LC スケールを実施したところ, LC 年齢 (言語表出・言語理解・コミュニケーション・総合) に群間差は認められなかった (表 2-3)。また, TD 群においても SRS-2 を実施したが, SCI の T 得点の平均値は 50.0 (標準偏差 5.67), RRB は 47.5 (7.56), 総合は 47.3 (6.54) であり, ASD の範囲に該当する児はいなかった。

なお, ASD 群, TD 群ともに, 実験開始前に幼児の養育者に対し口頭と書面で実験の内容について説明し同意を得た。

表 2-3 TD 群のプロフィール

対象児	Time1 CA	Time1	Time1	Time1	Time1	Time2 CA	Time3 CA	Time3	Time3	Time3	Time3
		LC 年齢 表出	LC 年齢 理解	LC 年齢 コミュ ニケー ション	LC 年齢 総合			LC 年齢 表出	LC 年齢 理解	LC 年齢 コミュ ニケー ション	LC 年齢 総合
TD-A1	35	35	39	35	36	41	47	45	51	50	48
TD-B1	38	38	36	40	38	44	51	40	47	44	43
TD-C1	37	40	40	38	39	43	49	52	51	50	51
TD-D1	41	37	38	37	37	47	53	56	69	50	59
TD-E1	39	35	33	33	34	44	51	52	61	50	55
TD-F1	39	30	36	29	32	45	51	42	46	57	46
TD-G1	36	34	39	38	37	42	49	59	59	53	58
TD-H1	33	30	36	29	32	39	44	41	45	48	44
TD-I1	36	30	39	32	35	42	48	41	51	46	46
TD-J1	30	29	29	35	31	36	42	41	45	48	44
平均	36.4	33.8	36.5	34.6	35.1	42.3	48.5	46.9	52.5	49.6	49.4
標準偏差	3.20	3.88	3.37	3.81	2.77	3.13	3.41	7.16	8.02	3.60	6.00

(2) 幼児の遊びの観察

幼児の遊び場面の観察は医療機関に併設されたプレイルームもしくは大学内のプレイルームにおいて同様の設定で行われた。プレイルームには、参加児、母親、観察者の3名が入室した。幼児はフロアマット(3m×2m)の上で遊び、母親はフロアマットを挟み幼児と反対側の角に設置された椅子に座った。観察者は参加児から2m程度離れ、母親も視野に入る位置からビデオカメラで幼児の遊びを5分間録画した。観察時間の設定について、半構造化されたふり遊びテストを活用した先行研究(e.g. 藤野, 2001; Roth & Clark, 1987)では、幼児が遊びに飽きたり、同じような遊びが繰り返されたりした時に観察を終了し、観察は短時間で行われている。また、玩具のセットを3セット用意し、5分ずつ観察を行った先行研究(Libby, et al., 1998)がある。なお、この研究の玩具のセットには、象徴遊びの前の段階であるミニカー等で構成された玩具のセットも含まれる。30分という長時間の観察を行った研究もあるが(Orr & Geva, 2015)、観察は観察者との相互作用の中で行われ、結果として、群間で象徴遊びに従事する時間に群間差があったことが明らかにされている。本研究においては、幼児自身が遊びを主体的に発展させることを前提とし、象徴遊びの連鎖を主眼とした検討を行うため、ASD幼児が逸脱せずに象徴遊びに従事できる時間を設定し、遊びの質的側面をTD幼児と比較できるように観察時間を統制した。使用した玩具はままごとセット(コンロ、鍋、フライパン、フォーク、皿のミニチュ

ア) , 積み木, 磁石の玩具, マップのイラストのあるレジャーシート, 人形 2 体であった (図 2-1) 。幼児には玩具を全て使って良いことを伝えた。

入室後に母親には, 書面と口頭にて幼児に対して遊びの提案や質問はせず, 幼児から働きかけがあった時のみ端的に応じるよう依頼をした。観察中に幼児へ質問をする母が Time1 の TD 群において 1 名いたため, 再び書面を提示しながら止めるように依頼をした。他の参加児の母親で再度依頼する場面はなかった。なお, 幼児は 5 分間の遊びの観察の前に, 母親と積み木・磁石の玩具を使用して遊び, 場に慣れるようにした。



図 2-1 a ままごとセット



図 2-1b 積み木・磁石の玩具

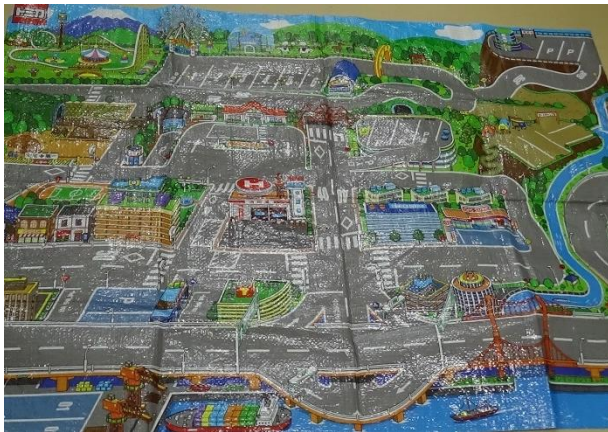


図 2-1c レジャーシート



図 2-1 d 人形

(3) 録画データに基づく行動の継時的記録および象徴遊び行動リストの作成

a) 象徴遊び行動リストの作成

遊び場面のビデオ記録において観察された幼児の遊び行動を5秒間のタイムサンプリング法で記録した。記録された遊び行動は、象徴遊び以外の物の操作（例：積み木を積む、磁石をつけるといった遊び）と象徴遊び行動に分類した。全20名の象徴遊び行動の記録に基づき、吉澤・大瀧（2008）を参考に、象徴遊びを「食事」「移動」「公園」といったテーマに分け、象徴遊び行動リストを作成した（表2-4）。テーマは「食事」「移動」「公園」「その他」とした。象徴遊び行動リストの作成においては、観察可能な行動を対象とし、象徴遊びとしての意図の有無が判断しにくい行動（例：鍋を床に置く）や、感覚遊びとして行っている可能性もある行動（例：ミニチュアのコンロのグリルを引き出しては閉める）は象徴遊び行動リストの対象外とした。また、行為の主体が明記されていない行動は、幼児自身が行為の主体であっても、人形が行為の主体であっても同一の行動とした（例：「幼児自身が食べるふりをする」と「幼児が人形を操作して人形が食べているようにふるまう」行動はどちらも、「積み木や磁石をフォークもしくは手で食べる」の行動に該当すると見なした）。

表 2-4 象徴遊びのテーマ、および、各テーマに含まれる象徴遊び行動のリスト

テーマ	テーマに含まれる行動
食事	<p>調理：ミニチュアの（以下ミニチュアを省略）コンロのつまみを回す；フライパンや鍋を調理のために振る；積み木や磁石をフライパンや鍋、グリルに入れる又は入れるふりをする；調理器具（フライパンや鍋）をグリルに入れる；フォークもしくはスプーンに見立てた物で混ぜる；皿を蓋に見立てて開閉する</p> <p>食べる：積み木や磁石を（もしくは食べ物があるふりをして）フォークもしくは手で食べる；積み木や磁石を（もしくは食べ物があるふりをして）フォークもしくは手で人形や母に食べさせる；積み木や磁石をコップに見立てて飲む；積み木や磁石をコップに見立てて飲ませる</p> <p>準備：皿や鍋や食べ物に見立てた物を母親や人形に手渡す又は目の前に置く；フォークを母親に渡す又は人形に持たせる；フォークを皿に置く又は皿の隣に並べる；人形を操作してフォークを持たせる（人形がフォークを持っているようにふるまう）；皿や鍋に食べ物に見立てた積み木や磁石を置くもしくは手で置くふりをする；積み木や磁石をコップに見立ててコップに飲み物を入れるふりをする；意図を持って（発声を伴うもしくは「こぼしちゃった」等の言葉を言う）鍋をひっくり返しこぼすふりをする</p> <p>片付け：「お片付け」や「ご馳走様」等食事の終わりを示す言葉を言いながら食事に使った皿をその場からどかす；コンロのグリルを食器洗い洗浄機に見立て皿を入れる</p>
移動	<p>人形を持って歩かせる；積み木や磁石を車や生き物に見立てて走らせるもしくは歩かせる；「公園に行こう」「家に帰ろう」等の発話を伴い目的地へ人形や見立てた車を移動させる</p>
公園	<p>人形や人に見立てた積み木を持って積み木で作った滑り台を上らせる；人形や人に見立てた積み木を持って積み木で作った滑り台を滑らせる；人形や人に見立てた積み木を持って積み木で作った滑り台の上を歩かせる</p>
その他	<p>人形を操作して地図に書いてある船に乗せる；地図に書いてある店に行き「〇〇ください」等買い物に関連した発話をして買い物をする；人形を操作して積み木を持たせ積み木を積みさせる；「お家に入ろう」「お邪魔します」などの発話を伴って見立てた建物（お城など）に入る；積み木等見立てた建物の中で人形を操作して寝かせるまたは人形を座らせる；磁石を鳥に見立てて空を飛ばせる</p>

b) 象徴遊び行動の生起頻度とレパトリー数

5秒間ごとの記録をもとに象徴遊び行動リストに含まれる行動の生起頻度およびレパトリー数をカウントした。生起頻度を求める際はタイムサンプリング法を用い、継続時間に関わらず5秒ごとにカウントした。また、積み木を積む、磁石の玩具をつけるといった象徴遊び以外の物の操作についても同様に生起頻度を算出した。

c) 使用する物の観点及び物と人との関係性の観点からの分析

象徴遊び行動を使用する物の観点及び物と人との関係性の観点から分類を行った。使用する物の観点からは、実物を縮小した物（例：ミニチュアのフォーク）を使ってふりをする「ミニチュアを使用した遊び」と、具体物をイメージさせない物（例：積み木）を特定

の物に見立てる「見立てを含む象徴遊び」に分類し、象徴遊び行動リストに含まれる行動を対象に、5秒間のタイムサンプリング法を用いて生起頻度を算出した。使用する物の観点においては、手でコップの形をつくるといった手などの身体部位を物に置き換える象徴遊び行動も含まれるが、本研究においては、ミニチュアの玩具（コンロやフライパン）を使用しており、身体部位を物に置き換える象徴遊び行動は生起しなかったため、分析の対象として含めなかった。

物と人との関係性の観点からは、フォークを持って幼児自身が食べるといった「自己に向けた象徴遊び」、人形又は母親に食べさせるといった「受動的他者を設定する象徴遊び」、人形が食べるといった人形が行為の主体となる「能動的他者を設定する象徴遊び」について、使用する物の観点同様に生起頻度を算出した。

d) 象徴遊びの連鎖を示すダイアグラムの作成

各児の遊び場面について以下の手続きによりダイアグラム（図 2-2）を作成した。①5秒間ごとの行動記録から、行動を時系列に並べる。②ひとつのテーマに属する同一行動の連続は継続回数にかかわらず、単一の行動とみなす（例：「フォークもしくはスプーンに見立てた物で混ぜる」→「フォークもしくはスプーンに見立てた物で混ぜる」→「コンロのつまみを回す」と行動が連続した場合は「フォークもしくはスプーンに見立てた物で混ぜる」→「コンロのつまみを回す」と記録する）。③行動が変化した場合（例：「コンロのつまみを回す」から「フライパンや鍋を調理のために振る」）、行動を線で繋いで行動の連鎖を示す。④テーマが変わった場合（例：「食事」から「移動」）は右下にずらして記入し、テーマの変化を示す。テーマが変化した際には、同じ玩具を連続的に使用している場合（例：ご飯を食べた人形を持って地図の上を歩かせる）および、幼児が言葉で連鎖を表現している場合（例：「ご飯作ったら公園に行く」）、には行動が連鎖しているとみなし、前の行動と線をつないだ。⑤2つの行動の間に何もしない、歩き回ること、30秒以上の間隔が空く場合、もしくは、象徴遊びに含まれない物の操作が入る場合は連鎖と見なさず、一度連鎖を区切る。中断後また新たに連鎖を記録する。

e) テーマの生起頻度とレパートリー数

各児のダイアグラムに基づき、テーマの生起頻度（図 2-2 の場合 4）とレパートリー数（図 2-2 の場合 2）をカウントした。

f) 象徴遊び行動の連鎖数

ダイアグラム（図 2-2）に示した通り，あるテーマの中で，a) ひとつの象徴遊び行動が終了した時点から 30 秒経過する前に次の象徴遊び行動が起こり，かつ，b) 行動と行動の間に象徴遊び以外の物の操作が入らない場合に象徴遊び行動が連鎖していると定義した。なお，連鎖の途中でテーマが変わった場合には，a) と b) に加えて，テーマが変わる前と同じ玩具を連続的に使用している，または，幼児が言葉で連鎖を表現している場合に象徴遊び行動が連鎖しているとした。連鎖する象徴遊び行動同士を線をつないだ上で，つないだ線の数を連鎖数とした。ひとつのまとまりにおける連鎖数の平均である象徴遊び行動の平均連鎖数と，最も連鎖数の多いまとまりにおける最大連鎖数を算出した（図 2-2 の場合，まとまりが 3，平均連鎖数 2，最大連鎖数 5）。

↓時間の経過

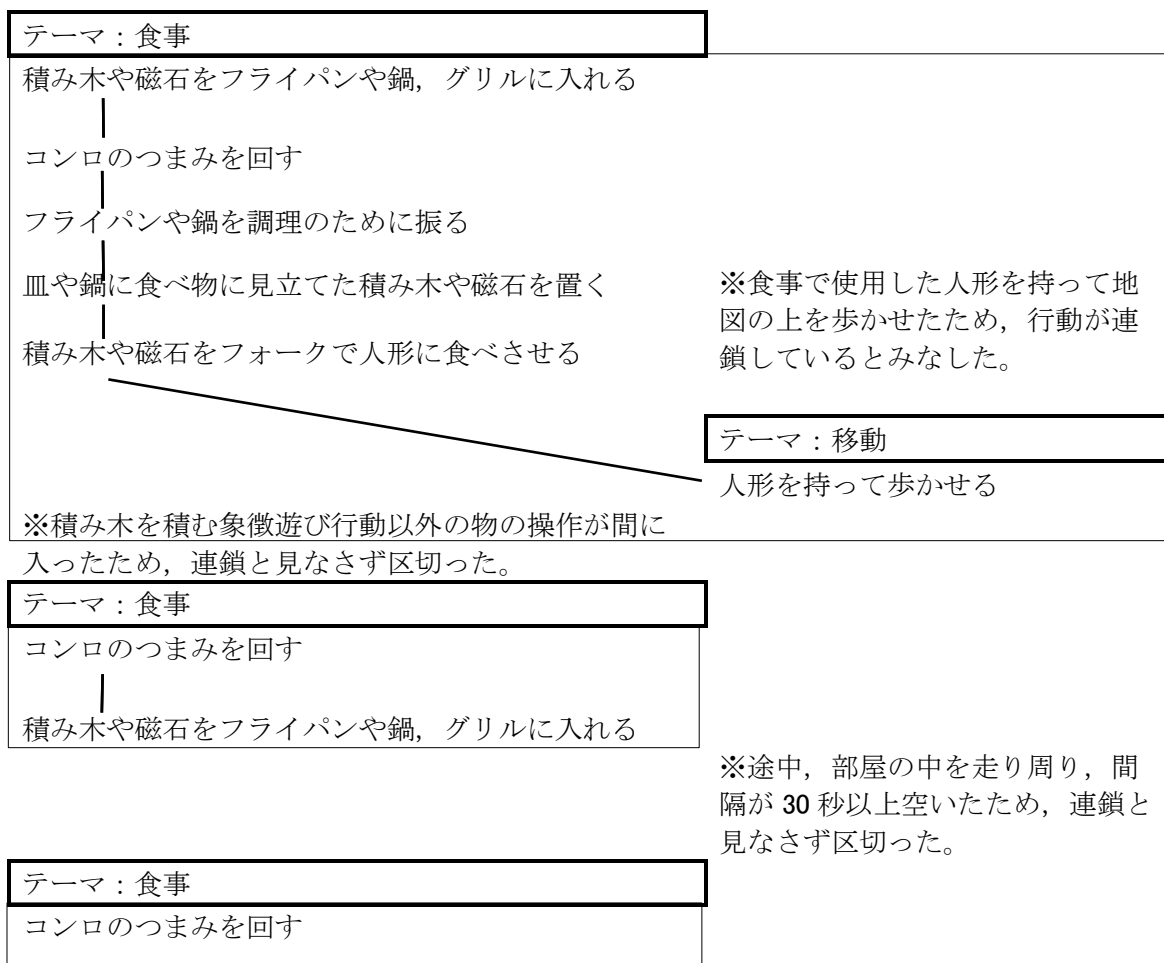


図 2-2 幼児の象徴遊びのダイアグラムの例

(3) 信頼性

Time1, Time2, Time3 の各時点において，各群 2 名ずつ計 12 名（全体の 40%）の録画記録（データセット）をランダムに抽出し，大学生 1 名が以下の項目について別途評価を行い，実験実施者との評価者間信頼性の検討を行った。象徴遊び行動リストからの行動の選定の κ 係数の平均は 0.78（範囲：0.70 - 0.88）であった。物の使用の観点からの分類（「ミニチュアを使用した象徴遊び」，「見立てを含む象徴遊び」）の κ 係数の平均は 0.88（範囲：0.80 - 1.00），人と物との関係性の観点からの分類（「自己に向けた象徴遊び」，「受動的他者を設定する象徴遊び」，「能動的他者を設定する象徴遊び」）の κ 係数の平均 0.89 は（範囲：0.75 - 1.00）であった。不一致箇所は協議によりいずれかに決定した。

また、テーマが移行する際の象徴遊び行動の連続性の判定については、全時点におけるテーマの移行箇所全てについて、大学生1名が連続性の有無について別途評定を行った。その結果、テーマの移行箇所か所の19か所の内、18か所において評定が一致した。一致しなかった箇所は協議によりいずれかに決定した。

(4) データの分析方法

象徴遊び以外の物の操作の生起頻度、象徴遊び行動の生起頻度とレパトリー数、象徴遊び行動の観点別分類における生起頻度、テーマの生起頻度とレパトリー数、象徴遊び行動の平均行動連鎖数、最大行動連鎖数について、各指標を従属変数、群を固定因子、参加者IDを変量因子、全体の平均値(42.65)で中心化した月齢を共変量とし、一般線形混合モデルによる検定を行った。検定ソフトはSPSS ver 27を使用した。

3. 結果

(1) 象徴遊び以外の物の操作及び象徴遊び行動の生起頻度

象徴遊び以外の物の操作の生起頻度、象徴遊び行動の生起頻度の各時点における中央値と四分位範囲を(表2-5)に示す。象徴遊び以外の物の操作の生起頻度の中央値はTime1ではASD群が0.0, TD群が1.0, Time2ではASD群が0.5, TD群が1.0, Time3ではASD群が2.5, TD群が1.0であった。象徴遊び行動の生起頻度の中央値はTime1ではASD群が18.5, TD群が21.5, Time2ではASD群が10.5, TD群が25.0, Time3ではASD群が11.5, TD群が23.0であった。検定の結果、象徴遊び以外の物の操作と象徴遊び行動の生起頻度はASD群とTD群との間に有意差は認められず、群×月齢の交互作用も認められなかった。

表 2-5 象徴遊び以外の物の操作の生起頻度および象徴遊び行動の生起頻度の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

	群	Time1	Time2	Time3
物の操作の 生起頻度	ASD	0.0 (0 - 12 ; 2.25)	0.5 (0 - 27 ; 16.75)	2.5 (0 - 54 ; 23.25)
	TD	1.0 (0 - 21 ; 6.00)	1.0 (0 - 52 ; 25.00)	1.0 (0 - 40 ; 9.25)
象徴遊び行動 の生起頻度	ASD	18.5 (4 - 46 ; 15.50)	10.5 (0 - 32 ; 23.50)	11.5 (0 - 29 ; 18.50)
	TD	21.5 (11 - 33 ; 12.25)	25.0 (0 - 38 ; 21.75)	23.0 (5 - 37 ; 13.00)

（2）象徴遊び行動のレパトリ一数

象徴遊び行動のレパトリ一数の群ごとの継時的変化を図 2-3, 2-4 に示す。象徴遊び行動のレパトリ一数の中央値は Time 1 では ASD 群が 4.5（範囲 2 - 8, 四分位範囲 2.50 ; 以下同様）, TD 群が 5.0 (2 - 10, 1.75) , Time2 では ASD 群が 2.5 (0 - 6, 2.00) , TD 群が 5.0 (0 - 8, 4.75) , Time3 では ASD 群が 3.5 (0 - 8, 5.25) , TD 群が 8.0 (2 - 11, 5.75) であった。検定の結果, 群×月齢の交互作用が認められた ($p=0.007$, $\eta^2=0.117$)。下位検定の結果, ASD 群は月齢の上昇に伴う象徴遊び行動のレパトリ一数の変化へ認められなかった (切片 $b=3.609$, 頑健性 $SE=1.103$, $p=0.006$, $\eta^2=0.336$; 月齢 $b= - 0.520$, 頑健性 $SE=0.101$, $p=0.465$, $\eta^2=0.280$)。一方, TD 群は, 月齢の上昇に伴い象徴遊び行動のレパトリ一数が増大することが認められた (切片 $b=4.145$, 頑健性 $SE=0.715$, $p=0.002$, $\eta^2=0.417$; 月齢 $b=0.222$, 頑健性 $SE=0.084$, $p=0.003$, $\eta^2=0.373$)。

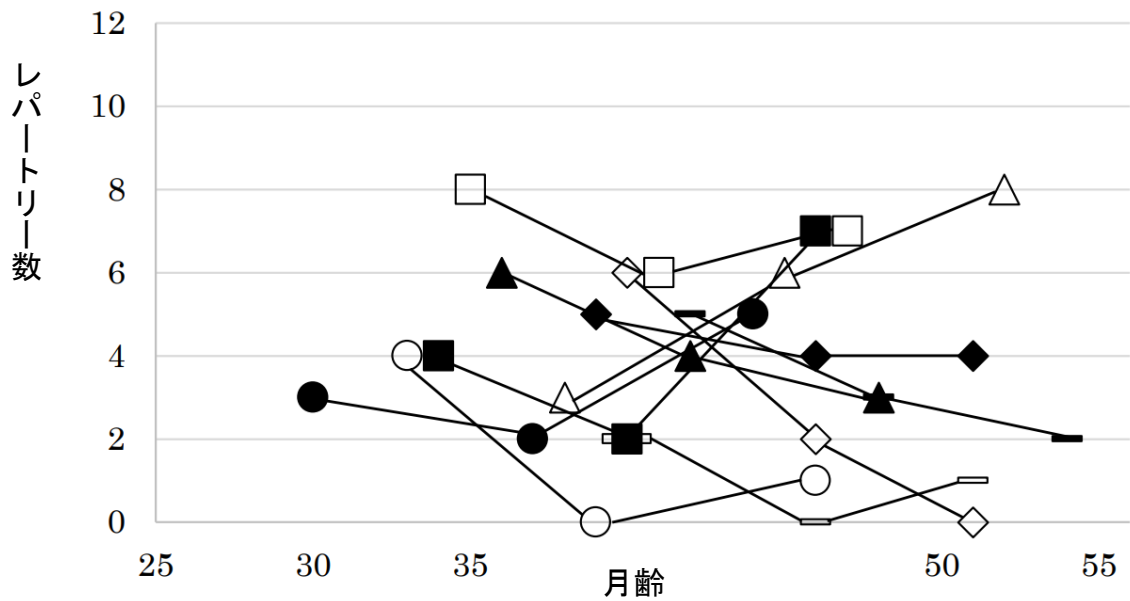


図 2-3 ASD 幼児における象徴遊び行動のレパトリリー数の継時的変化

注. 線は個々の幼児の継時的変化を示す

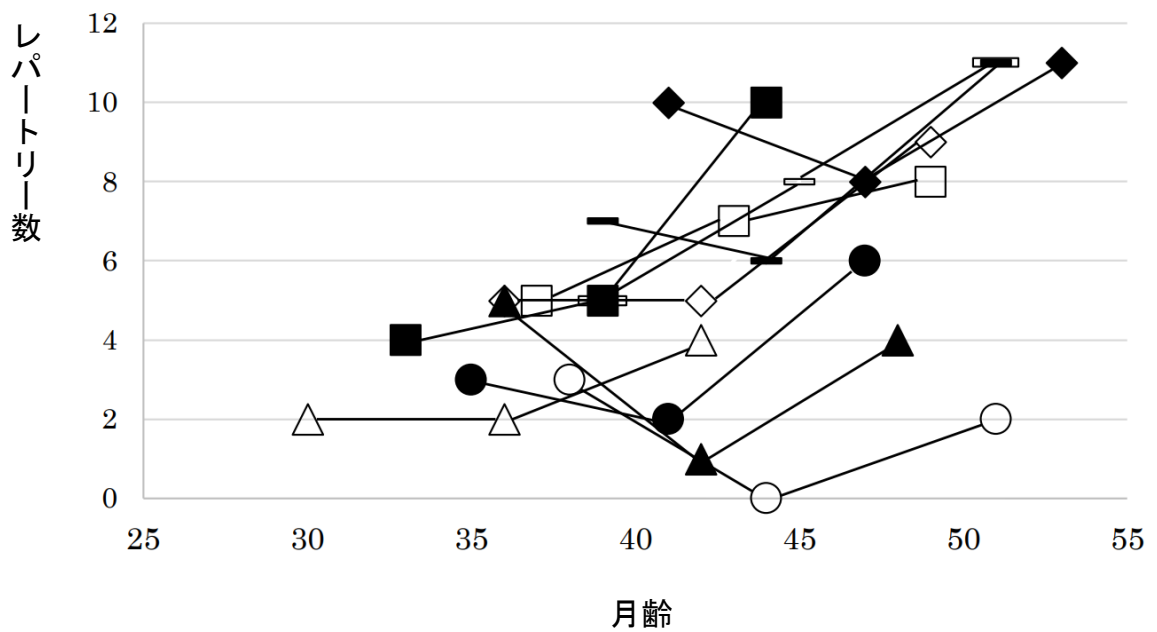


図 2-4 TD 幼児における象徴遊び行動のレパトリリー数の継時的変化

注. 個々の幼児の継時的変化を線で結ぶ

(3) 使用する物の観点及び物と人との関係性の観点からの分析

a) 使用する物の観点からの分析

ミニチュアを使用した象徴遊び行動及び見立てを含む象徴遊び行動の生起頻度の中央値と四分位範囲を表 2-6 に示す。ミニチュアを使用した象徴遊びは Time1 では ASD 群で 10 名、TD 群で 10 名、Time2 では ASD 群で 7 名、TD 群で 8 名、Time3 では ASD 群で 7 名、TD 群で 9 名生起していた。見立てを含む象徴遊びは Time1 では ASD 群で 8 名、TD 群で 6 名、Time2 では ASD 群で 7 名、TD 群で 7 名、Time3 では ASD 群で 10 名、TD 群で 8 名生起していた。これら 2 つの指標においては、群及び月齢の主効果は認められず、群×月齢の交互作用も認められなかった。

b) 物と人との関係性の観点からの分析

自己に向けた象徴遊び、受動的他者を設定する象徴遊び、能動的他者を設定する象徴遊びの生起頻度の中央値及び四分位範囲を表 2-7 に示す。自己に向けた象徴遊びは Time1 では ASD 群で 10 名、TD 群で 10 名、Time2 では ASD 群で 8 名、TD 群で 9 名、Time3 では ASD 群で 10 名、TD 群で 9 名生起していた。受動的他者を設定する象徴遊びは Time1 では ASD 群で 3 名、TD 群で 4 名、Time2 では ASD 群で 3 名、TD 群で 6 名、Time3 では ASD 群で 3 名、TD 群で 6 名生起していた。能動的他者を設定する象徴遊びは Time1 では ASD 群で 3 名、TD 群で 3 名、Time2 では ASD 群で 1 名、TD 群で 1 名、Time3 では ASD 群で 2 名、TD 群で 6 名生起していた。いずれの指標においても、群及び月齢の主効果は認められず、群×月齢の交互作用も認められなかった。

表 2-6 ミニチュアを使用した象徴遊び及び見立てを含む象徴遊び行動の生起頻度の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

タイプ	群	Time1	Time2	Time3
ミニチュアを使用した象徴遊び	ASD	7.5 (1 - 24 ; 5.50)	3.5 (0 - 17 ; 9.50)	2.5 (0 - 13 ; 5.00)
	TD	12.5 (4 - 21 ; 9.50)	8.5 (0 - 30 ; 12.50)	5.0 (0 - 26 ; 4.25)
見立てを含む象徴遊び	ASD	9.5 (0 - 28 ; 15.25)	7.0 (0 - 26 ; 15.25)	9.0 (0 - 22 ; 10.00)
	TD	6.5 (0 - 33 ; 24.00)	14.0 (0 - 30 ; 16.75)	17.5 (0 - 35 ; 17.25)

表 2-7 自己に向けた象徴遊び，受動的他者を設定する象徴遊び，能動的他者を設定する象

徴遊びの生起頻度の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

自己に向けた象徴遊び	ASD	17.0 (3 - 46 ; 15.75)	12.5 (0 - 30 ; 20.50)	12.0 (0 - 25 ; 16.50)
	TD	21.5 (4 - 34 ; 15.50)	22.0 (0 - 34 ; 20.50)	21.5 (0 - 30 ; 9.50)
受動的他者を設定する象徴遊び	ASD	0.0 (0 - 3 ; 0.75)	0.0 (0 - 4 ; 0.75)	0.0 (0 - 3 ; 1.50)
	TD	0.0 (0 - 9 ; 1.75)	1.5 (0 - 5 ; 2.00)	1.5 (0 - 6 ; 3.00)
能動的他者を設定する象徴遊び	ASD	0.0 (0 - 4 ; 0.75)	0.0 (0 - 3 ; 0.00)	0.0 (0 - 2 ; 0.00)
	TD	0.0 (0 - 11 ; 1.50)	0.0 (0 - 1 ; 0.00)	3.0 (0 - 13 ; 10.00)

（４）テーマの生起頻度とレパトリ数

各時点におけるテーマ別の生起人数を表 2-8 に示す。ASD 群はいずれの時点でも最も多いテーマは「食事」であり、「移動」と「その他（例：人形に積み木を積みせる）」に該当する遊びが数名ずつ見られた。TD 群においても最も多いテーマは「食事」であるが、Time1 では「移動」や「その他（例：買い物をする）」をテーマとする児もいた。Time3 においては、「公園」をテーマとする児もいた。

テーマの生起頻度およびテーマのレパトリ数の中央値と四分位範囲を表 2-9 に示す。テーマの生起頻度は、全観察期間を通して、ASD 群は 0 - 3、TD 群は 0 - 4 の範囲であり、テーマのレパトリ数は ASD 群が 0 - 2、TD 群が 0 - 3 の範囲であった。いずれにおいても、群の主効果や交互作用は認められなかった。

表 2-8 各時点において観察されたテーマごとの人数

	群	食事	移動	公園	その他	象徴遊び以外の物の操作のみを行う
Time1	ASD	10	1	0	1	0
	TD	10	6	0	2	0
Time2	ASD	7	2	0	0	2
	TD	8	1	0	0	1
Time3	ASD	8	1	0	0	1
	TD	9	3	2	3	0

注. その他に含まれるテーマ：買い物に行く・船に乗る・家や城の中で遊ぶ・空を飛ぶ (TD 群で生起)，人形が積み木を積む (ASD 群で生起)

表 2-9 テーマの生起頻度とレパトリー数の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

	群	Time1	Time2	Time3
テーマの 生起頻度	ASD	1.5 (1 - 3 ; 1.00)	1.0 (0 - 3 ; 1.00)	1.5 (0 - 3 ; 1.00)
	TD	2.5 (1 - 4 ; 1.00)	1.5 (0 - 3 ; 1.00)	2.5 (1 - 4 ; 2.00)
テーマの レパトリー数	ASD	1.0 (1 - 2 ; 0.00)	1.0 (0 - 2 ; 0.00)	1.0 (0 - 2 ; 0.00)
	TD	2.0 (1 - 3 ; 1.00)	1.0 (0 - 1 ; 0.00)	2.0 (1 - 3 ; 1.00)

(5) 象徴遊び行動の連鎖数

象徴遊びの連鎖の指標は平均行動連鎖数，最大行動連鎖数であった。研究参加児ごとの平均行動連鎖数，最大行動連鎖数を図 2-5，2-6，2-7，2-8 に示す。平均行動連鎖数の中央値は，Time 1 では ASD 群が 4.00 (0.6 - 21, 9.25) ，TD 群が 3.25 (0 - 6, 3.75) ，Time2 では ASD 群が 0.75 (0 - 15, 6.50) ，TD 群が 5.75 (0 - 12, 9.25) ，Time3 では ASD 群が 2.00 (0 - 9.5, 3.50) ，TD 群の中央値は 4.25 (0.3 - 23, 14.85) であった。最大行動連鎖数の中央値は Time 1 では ASD 群が 5.00 (1 - 21, 8.75) ，TD 群が 3.00 (0 - 10, 3.75) ，Time2 では ASD 群が 1.00 (0 - 15, 7.75) ，TD 群が 8.00 (0 - 19, 13.50) ，Time3 では ASD 群が 1.50 (0 - 18, 5.75) ，TD 群は 9.50 (1 - 23, 14.00) であった。検定の結果，象徴遊び行動の平均行動連鎖数は，群×月齢の交互作用が有意であり ($p=0.002$ ， $\eta^2=0.224$)，下位検定の結果，ASD 群は月齢の上昇に伴う平均行動連鎖数の変化は認められなかった (切片 $b=2.574$ ，頑健性 SE=2.390， $p=0.392$ ， $\eta^2=0.390$ ；月齢 $b= - 0.325$ ，頑健性 SE=0.232， $p=0.078$ ， $\eta^2=0.154$)。一方，TD 群は，月齢の上昇に伴い平均行動連鎖数が増大することが認められた (切片 $b=4.462$ ，頑健性 SE=3.744， $p=0.136$ ， $\eta^2=0.113$ ；月齢 $b=0.480$ ，頑健性 SE=0.249， $p=0.010$ ， $\eta^2=0.300$)。最大行動連鎖数においても同様に，群×月齢の交互作用が有意であり ($p=0.002$ ， $\eta^2=0.218$)，下位検定の結果，ASD 群は月齢の上昇に伴う最大行動連鎖数の変化は認められなかった (切片 $b=2.436$ ，頑健性 SE=2.042， $p=0.414$ ， $\eta^2=0.035$ ；月齢 $b= - 0.268$ ，頑健性 SE=0.229， $p=0.139$ ， $\eta^2=0.112$)。一方，TD 群は，月齢の上昇に伴い最大行動連鎖数が増大することが認められた (切片 $b=5.394$ ，頑健性 SE=4.101， $p=0.069$ ， $\eta^2=0.164$ ；月齢 $b=0.510$ ，頑健性 SE=0.225， $p=0.006$ ， $\eta^2=0.337$)。

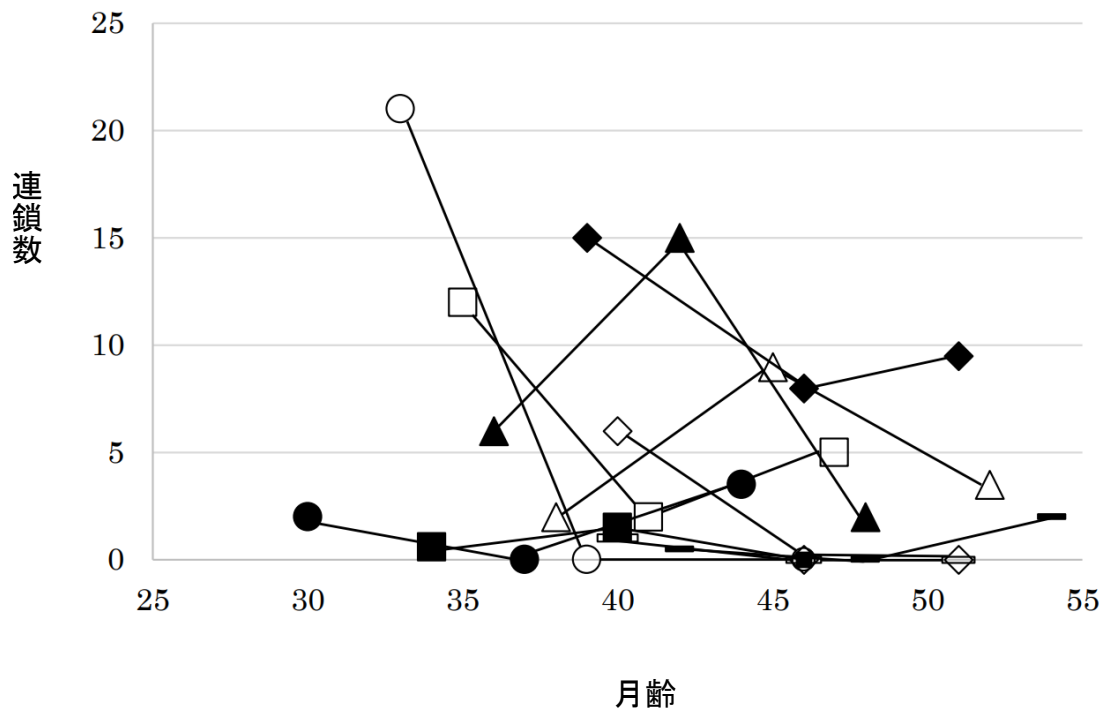


図 2-5 ASD 幼児における平均行動連鎖数の経時的変化

注. 線は個々の幼児の経時的変化を示す

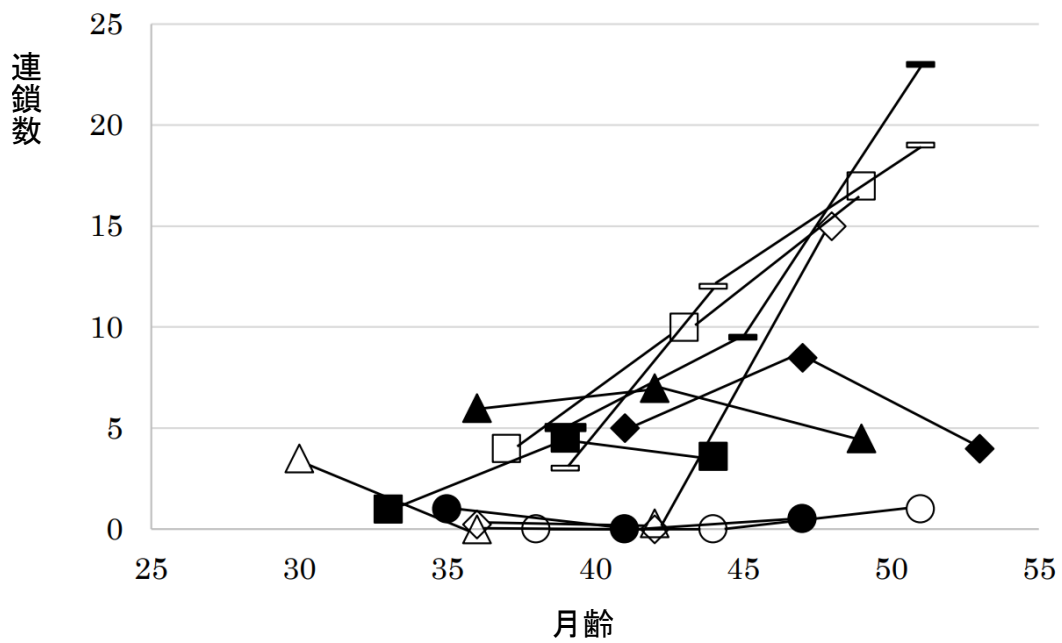


図 2-6 TD 幼児における平均行動連鎖数の経時的変化

注. 線は個々の幼児の経時的変化を示す

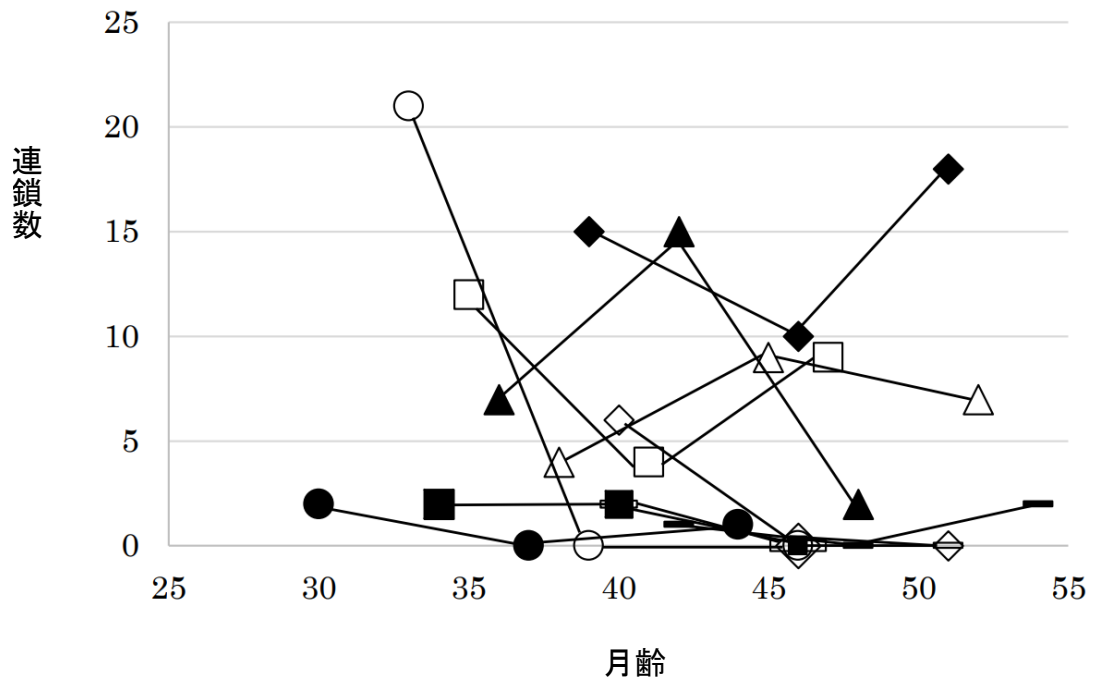


図 2-7 ASD 幼児における最大行動連鎖数の経時的変化

注. 線は個々の幼児の経時的変化を示す

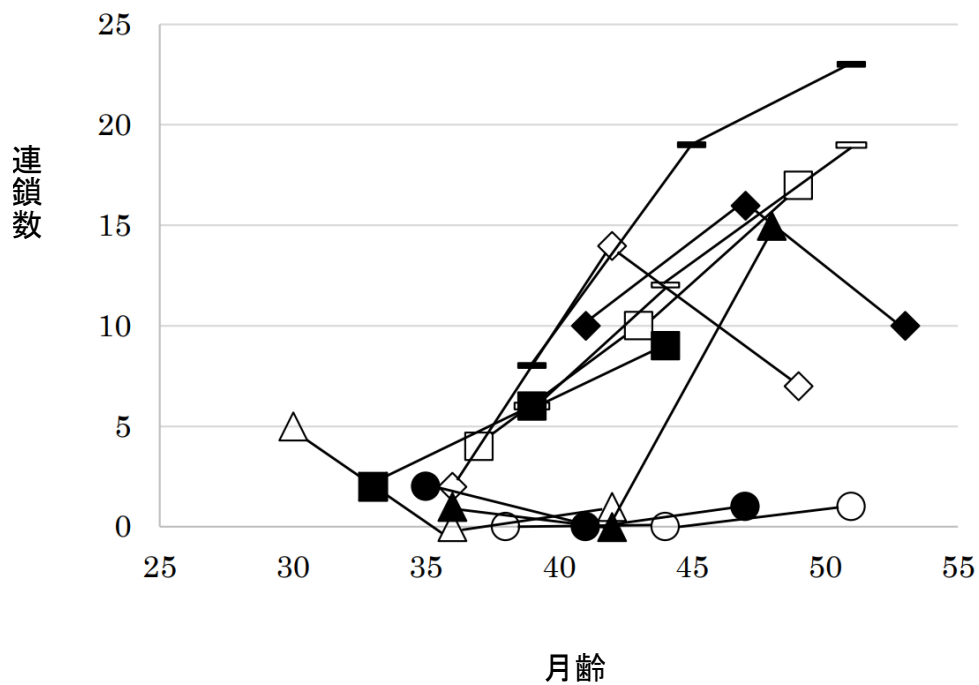


図 2-8 TD 幼児における最大行動連鎖数の経時的変化

注. 線は個々の幼児の経時的変化を示す

4. 考 察

本研究においては、知的発達、言語発達ともに遅れない ASD 幼児と TD 幼児を対象とし、象徴遊び行動の生起頻度やレパートリー数、物の使用及び物と人との関係性の観点から分類した象徴遊び行動の生起頻度、幼児が表象するテーマの生起頻度やレパートリー数、象徴遊び行動の連鎖に焦点を当て、両群を縦断的に比較した。

分析の第一の側面は象徴遊び行動の生起頻度とレパートリー数であった。象徴遊び行動の生起頻度とレパートリー数についてはレパートリー数のみ両群に発達過程の違いが認められた。TD 群においては月齢の上昇に伴い、象徴遊び行動のレパートリー数が有意に増加することが示された。TD 群は日常生活経験の蓄積とともに、日常場面を客観視し、象徴化する機能が発達したことが背景にあると考えられる。これに対し、ASD 群は、月齢が上昇してもレパートリー数に増加が認められなかった。このことから、TD 群は生活年齢の上昇に伴い象徴遊び行動のレパートリー数が増加するが、ASD 群はその変化が乏しいという仮説は支持された。ASD 児においては、Time3 において初回評価時よりも象徴遊び行動のレパートリー数が減少した幼児が 4 名 (ASD-C 児, ASD-E 児, ASD-G 児, ASD-J 児)、Time2, 3 のいずれかにおいて物の操作はあったが、象徴遊びを行わず、レパートリー数が 0 となった児が 3 名 (ASD-D 児, ASD-F 児, ASD-H 児) いた。年齢の増加に伴い象徴遊び行動のレパートリー数が増えた児は 10 名中 3 名であった。ASD 幼児は繰り返しの遊びを行うことが指摘されており (Ungerer & Sigman, 1981)、同じ遊び行動を繰り返し生起させたことから、象徴遊びのレパートリー数に継時的変化が認められなかったと考えられる。また、いずれかの時点において象徴遊び行動のレパートリー数が 0 となった児は 3 名いたが、SRS-2 の自閉症の程度は全員軽度の範囲であった。しかし、その内 2 名は RRB の T 得点が 70 を超える高い値を示していた。このことから、ASD 児の特徴である興味関心の限定や反復的行動が象徴遊び行動のレパートリー数に影響を与えていることが推測される。また、杉本 (2004) は、1 つの物を多様に見立てるといった遊びの多様性が心の理論の発達に関連があることを指摘しており、遊びのレパートリーが増加しなかったことには、ASD 幼児の心の理論の発達の遅れとの関連が推測される。この結果は Williams et al. (2001) の ASD 群は象徴遊びの総量に TD 群と差はないが、多様性が少ないという報告と一致している。本研究からは、知的発達および言語発達の遅れを伴わない ASD 幼児においても、象徴遊び行動の生起頻度自体は TD 幼児と差はないが、象徴遊び行動のレパートリーにおいては、TD 幼児と徐々に差が生じていくという知見が加えられたと言える。

分析の第二の側面は象徴遊び行動の観点別分析であった。本研究では象徴遊び行動を物の使用の観点及び物と人との関連性の観点から分類し、生起頻度を算出した。物の使用の観点においては、「ミニチュアを使用した象徴遊び」及び「見立てを含む象徴遊び」行動について象徴遊び行動リストに含まれる行動を対象に生起頻度を算出した。その結果、どちらの指標においても、群や月齢の主効果および群×月齢の交互作用は認められなかった。本研究では両群ともに2歳半移行の幼児を対象としているが、Harris & Kavanaugh (1993) は、TD 幼児は2歳には物の見立てを理解していると述べているように、本研究で対象とした年齢においては「見立て」のスキルを獲得した後の年齢であるため月齢による変化が認められなかったと考えられる。22か月のASD 幼児を対象とした先行研究 (Campbell, et al., 2016) ではASD 幼児は実際の物の用途を超えた見立て行動が少ないことが指摘されていたが、2歳半以降の言語発達及び知的発達に遅れを伴わないASD 幼児を対象とした本研究からは「ミニチュアを使用した象徴遊び」及び「見立てを含む象徴遊び」の生起頻度においてTD 群と差が認められないという知見が加えられた。

「物と人との関係性の観点」からは、「自己に向けた象徴遊び」「受動的他者を設定する象徴遊び」「能動的他者を設定する象徴遊び」の生起頻度を算出した。これらの指標には群及び月齢の主効果、群×月齢の主効果は認められず、ASD 児は人形を使用した象徴遊び行動が少ないことを指摘した先行研究 (Ungerer & Sigman, 1981) とは異なる結果となった。TD 群においてはTime3にて6名の幼児が能動的他者を設定した象徴遊びを行っており、今後人形を行為の主体とした象徴遊びが増えると、ASD 幼児との違いが顕在化する可能性も考えられる。

分析の第三の側面は象徴遊びのテーマの生起頻度とレパトリー数であった。象徴遊びのテーマの生起頻度とレパトリー数については、群の主効果や群と月齢の交互作用は認められなかった。TD 群は生活年齢の上昇に伴いテーマのレパトリーが増加するが、ASD 群はその変化が乏しいという仮説は支持されなかった。この背景として、本研究で使用された玩具の設定が挙げられる。Time3におけるテーマ別の生起人数を見ると、ASD 幼児が「食事」が8名、「移動」が1名であり、TD 幼児は「食事」が9名、「移動」が3名、「公園」が2名、見立てた建物で遊ぶなどの「その他」が3名であった。いずれも「食事」をテーマとする児が最も多かった。本研究ではままごとセット、積み木、磁石の玩具、マップのイラストのあるレジャーシート、人形2体を使用した。この中でも、ままごとセットは慣習的な道具使用を導き出しやすかったため、「食事」以外のレパトリーに広がりやすかったことが要因のひとつに挙げられる。今後、より広くテーマのレパトリーの観察を行うために、ままごとセットの他にも慣習的な道具使用を導きやすい玩具

(例：風呂のセットや病院のセット) の設定が必要であると考えられる。また、TD 幼児においては、「移動」や「公園」「その他(例：家で遊ぶ)」などのテーマが Time3 において生起しており、今後テーマのレパトリーが増えていく段階であると推測できる。

ASD 幼児は自発的な象徴遊びの開始や生産に困難があると指摘されていることから

(Harris, 1993), より年齢の高い児を対象とした場合には群間差が生じる可能性も考えられる。

分析の第四の側面は象徴遊び行動の連鎖であった。象徴遊びの連鎖の指標は、象徴遊び行動の平均行動連鎖数および最大行動連鎖数であった。いずれの指標も、群と月齢の交互作用が有意であり、TD 群は月齢の上昇に伴い平均・最大行動連鎖数が増加するのに対し、ASD 群は月齢の上昇に伴う変化が認められなかった。このことより、TD 群は生活年齢の上昇に伴い象徴遊び行動の連鎖数が増大するが、ASD 群はその変化が乏しいという仮説は支持された。TD 群は月齢の上昇に伴い、象徴遊び行動のレパトリー数も増えており、表象できる行動のレパトリーが増え、象徴遊びの行動の連鎖も長くなったと考えられる。また、観察時に 4 歳台であった TD 幼児の中にはテーマが変化した際(例：「食事」から「公園」など)にも、途切れずにつながりを持って遊ぶ児が観察された(例：同じ人形を使用して「調理をしていた人形が、お弁当を食べに公園に行く」など)。このようなテーマを超えた連鎖が観察されたことも、象徴遊び行動の連鎖が増加した一因であると考えられる。象徴遊び行動を連鎖させるためには、出来事の一場面のみを切り取らず、つながりも含めて理解しそれを象徴化することや、遊びの連鎖の展開を発想することが必要になると考えられる。一方、ASD 群において Time3 と Time1 で象徴遊び行動を生起させている幼児 9 名のうち、Time3 の最大行動連鎖数が Time1 よりも減少した児は 6 名 (ASD-A 児, ASD-C 児, ASD-D 児, ASD-E 児, ASD-F 児, ASD-I 児) であった。これらの児の SRS-2 における ASD の程度は軽度から重度まで様々であった。パターン化された遊びを行うことが知られている ASD 幼児 (Ungerer & Sigman, 1981) は、本研究においても、象徴遊び行動のレパトリーに継時的変化が認められず、限られた象徴遊びのレパトリーで遊ぶことはできても、そこからさらに発展させることが困難であったと考えられる。知的障害を伴う 6 歳 6 か月～15 歳 8 か月の ASD 児と、ASD 児と言語発達年齢を統制した学習困難児、TD 児を対象とし、遊びの連鎖を比較した先行研究 (Lewis & Boucher, 1995) ではミニカー遊び等、象徴遊びに該当しない遊びも含めた場合の連鎖に群間の差はないことを示している。本研究においては、積み木を積む、磁石の玩具を付けるといった象徴遊び以外の遊びは分析対象としておらず、両群の象徴遊びの連鎖の発達過程に違いが認められた。Williams et al. (2001) や本研究では象徴遊び以外の物の操作の生起頻度は

ASD 群と TD 群において群間差が無いことを示している。そのため、ミニカー遊び等も分析に含まれた Lewis & Boucher (1995) の研究とは異なり、象徴遊びのみを遊びの連鎖の分析対象とした本研究では、パターン化した遊びを行う傾向があり、一連の出来事の象徴化に困難がある ASD 幼児の特徴が顕在化しやすかったと考えられる。

また、象徴遊びを連鎖させていく過程の背景には、ワーキングメモリーやプランニングといった実行機能の発達との関連があることが指摘されている (McCune, 2008)。ASD 幼児は実行機能の困難が指摘されており (Ozonoff, & McEvoy, 1994)、象徴遊び行動の連鎖が少なかったことは、実行機能の弱さも背景要因であることが推測される。また、ASD 幼児の象徴遊びの特徴について中枢性統合 (central coherence) の弱さとの関連性も指摘されており (Lam, & Yeung, 2012; Morgan, Maybery, & Durkin, 2003)、日常場面において、出来事を理解する時にひとつの場面や行為に焦点をあて理解できても、出来事の流れなどに視野を広げて全体を理解することが難しい可能性がある。そのため、象徴遊び場面において、流れのある出来事の表象や再現が難しかったと考えられる。一方 TD 幼児は、観察後半の 4 歳前後に実行機能や出来事全体を理解し象徴する力が伸びていく段階であると考えられる。このような背景により、生活年齢が上がるにつれて、ASD 群と TD 群の発達過程の違いが顕在化したと考えられる。

上記の結果を整理すると、知的発達及び言語発達に遅れのない ASD 幼児を対象とした本研究においては、象徴遊び行動の生起頻度には発達過程の違いは認められず、象徴遊びの観点別分析 (物の使用の観点及び物と人との関係性の観点) においても発達過程の違いは認められなかった。象徴遊びのレパトリー数については発達過程の違いが認められ、ASD 幼児は象徴遊び行動のレパトリーの広がりには制約があることが示唆された。また、先行研究において十分な検討が行われていなかった象徴遊びの連鎖に焦点においても、両群に発達過程の違いが認められ、ASD 群は象徴遊びの行動の連鎖数の増加に制約を持つことが明らかとなった。本研究においては、知的発達に遅れのない ASD 幼児を対象とし、言語発達を統制した上で象徴遊びの比較を行った。しかし、知的発達・言語発達ともに遅れのない ASD 幼児であっても、象徴遊び行動のレパトリー数、象徴遊び行動の連鎖における発達過程の違いが生じてくることが明らかになった。このような差が生じた背景として、先述したような実行機能の発達や、出来事表象の理解等の認知機能が関連していると考えられる。本研究では、これら認知的側面の評価は行っておらず、象徴遊びと認知機能の関連について今後検討していく必要がある。また、TD 群については、月齢の高い児においてテーマとテーマをつなげた象徴遊びが観察されており、今後実行機能の発達も加わり、テーマ間の連鎖を含む大きな流れを表象して遊ぶ児が増えていく段階であると考え

られる。より構造化された象徴遊び行動の連鎖を詳細に検討する場合には、対象年齢を4歳以降に引き上げる必要があると考えられる。また、本研究では、ASD 幼児と TD 幼児を同条件で比較するため、道具や遊び時間を設定したが、ASD 幼児の中には、5分間の観察場面においても象徴遊びよりも物の操作に注意が向く児がいた。本研究では幼児の自由遊びの観察を行っており、自由遊び場面においては、設定された玩具セットにおける幼児の自発的な遊びが評価された。ASD 児は有しているスキルを使いにくいという指摘があり (Sigman & Ungerer, 1981) , 象徴遊びのスキルはもっていても、観察場面においては自発的な遊びが観察されなかった可能性がある。自然な遊び場面ではなく、模倣を通して ASD 児の象徴遊びのスキルを評価した研究もあるが (Ingersoll & Schreibman, 2006) , 自発的な遊びは対人的相互交渉や学習の基盤を作る (Tunnicliffe & Gkouskou, 2019) 。日常場面の遊び場面においては、幼児の自発的な行動や発話に、養育者がフィードバックを与えたり、遊びの提案をしたりすることで遊びが発展していく。このような他者との相互交渉場面を通して、出来事の流れを理解したり、出来事同士をつなげたりする力が伸びていくことが想定される。そのことから、象徴遊びのスキルの有無のみでなく、幼児が自発的に行った象徴遊びを評価することも重要であろう。今後は、構造化された遊び場面と幼児の自発的な遊び場面における ASD 幼児の行動の違いについての検討も必要である。また、玩具によって幼児の遊び方が限定されてしまう可能性もあるため、より自由度の高い遊び場面の設定による検討も今後の課題となるであろう。

第3章 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の獲得語彙及び物語り発話に関する検討

第3章においては、象徴遊びとの関連が指摘されている言語発達について、語彙の獲得から語連鎖、ナラティブへの移行期である言語発達段階に焦点をあて、ASD群とTD群の発達過程の違いを明らかにすることを目的とした。ASD幼児の獲得語彙に焦点をあてた研究においては、知的な遅れを伴う児が対象とされており、知的発達に遅れのないASD幼児を対象に意味的なカテゴリー別にTD幼児と獲得語彙について比較をした研究はなされていない。また、ASD児のFNの特徴は指摘されているが、FNへの移行期における発達過程についてTD幼児との比較はなされていない。そこで、第3章では、ASD幼児とTD幼児の意味的なカテゴリー別の獲得語彙の検討(第1節)、および、「お話し作り課題」における物語り発話の発達過程の検討を行う(第2節)。

1節 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の獲得語彙について

1. 問題と目的

藤上・大伴(2009)は、知的な遅れを伴うASD児と知的障害児を比較した検討を行い、ASD児は会話指向的な語彙や対人指向的な語彙が知的障害児よりも少ないことを明らかにした。語彙の意味的特徴に着目した検討は、発達の遅れや知的障害のあるASD児を対象とした検討は行われているが、明らかな発達の遅れのないASD幼児とTD幼児との比較については、十分な知見が得られていない。そこで本研究では、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙(JCDI)と語彙質問紙を用いて、ASD群とTD群の獲得語彙を意味カテゴリー別に比較することを目的とした。

2. 方法

(1) 研究参加児

第2章の研究参加児と同じ10名とした。Time1およびTime3にデータ収集を行った。

(2) 養育者への語彙質問紙

語彙の評価として、JCDI「語と文法」版を使用した。JCDIはTime1において、養育者に記入を依頼した。また、JCDI「語と文法」版は16～30か月の幼児を対象とした質問紙であるため、Time3においてはJCDIに記載された語彙が全て獲得されている可能性がある。そこで、Time3においては国立国語研究所の教育語彙の基本的研究の語彙リスト(2008)を参考にし、意味的により抽象度の高い心的動詞14語(例：考える、思う)、

非心的動詞 58 語（例：崩す，追いつく），心的形容詞 19 語（例：嬉しい，寂しい）、全 91 語からなる語彙質問紙を作成し、Time3 において養育者に記入を依頼した。

（3）データの分析方法

Time 1 の JCDI、Time3 の語彙質問紙について、TD 群と ASD 群の比較を行うために Mann-Whitney U 検定を行った。

3. 結果

（1）JCDI

両群の Time1 における領域別および合計の JCDI の得点を求めた（表 3-1）。ただし、対象の幼児には 3 歳代の児もおり、幼児語を話さなくなっていることが考えられるため、語彙領域のうち「幼児語」と「幼児語 2」を分析から除いた。ASD 群の「おでかけ」領域の獲得語彙数は TD 群より有意に少ないことが示された（ $U=19.00, p<.05$ ）。

表 3-1 CDI 領域別の得点と合計得点の中央値と四分位範囲

領域	ASD		TD		
	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲	
動物の名前 (43)	38.5	(12.25)	40.5	(9.25)	
乗り物 (14)	13.0	(4.00)	13.0	(1.00)	
おもちゃ (16)	13.5	(5.00)	16.0	(2.25)	
食べ物と飲み物 (68)	60.5	(12.5)	64.0	(10.00)	
衣類 (28)	15.5	(7.75)	19.5	(9.25)	
体の部位 (27)	25.5	(9.00)	26.0	(7.25)	
家具と部屋 (33)	20.5	(7.75)	23.0	(19.25)	
小さな家庭用品 (50)	38.5	(12.75)	42.0	(22.75)	
戸外のもの (31)	23.5	(6.50)	26.5	(13.25)	
おでかけ (22)	11.5	(4.25)	14.0	(8.25)	ASD < TD*
人々 (29)	19.0	(11.25)	22.5	(9.25)	
日課とあいさつ (25)	24.5	(2.75)	25.0	(0.00)	
動作語 (103)	91.5	(35.25)	101.5	(31.25)	
時間 (12)	8.0	(3.50)	10.5	(5.25)	
様子・性質 (59)	47.0	(26.25)	59.5	(27.25)	
代名詞 (22)	9.5	(9.50)	14.0	(11.25)	
質問 (10)	5.0	(2.50)	6.5	(6.00)	
位置と場所 (26)	13.5	(10.00)	17.0	(16.25)	
数量 (17)	15.0	(4.25)	16.0	(6.25)	
接続語 (6)	0.5	(3.00)	2.0	(3.50)	
会話語 (14)	9.0	(4.25)	11.5	(7.00)	
その他 (9)	8.0	(2.25)	9.0	(2.00)	
合計 (730)	510.0	(156.50)	575.0	(207.50)	

* $p < .05$

(2) 語彙質問紙

両群の Time3 における語彙質問紙（非心的動詞・心的動詞・心的形容詞）の合計数と中央値を求めたところ（表 3-2）、非心的動詞において ASD 群は TD 群よりも有意に少ないことが示された（ $U=18.50, p<.05$ ）。

表 3-2 ASD 群と TD 群の語彙質問紙の語彙数の中央値と四分位範囲

		非心的動詞 (58)	心的動詞 (14)	動詞合計 (72)	心的形容詞 (19)	語彙合計 (91)
ASD 群	中央値	51.0	12.0	62.0	17.0	78.0
	四分位範囲	(7.25)	(4.25)	(11.25)	(2.25)	(13.25)
TD 群	中央値	57.0	13.5	69.5	18.0	87.5
	四分位範囲	(4.25)	(2.50)	(6.50)	(2.75)	(9.50)

4. 考察

本研究では言語発達初期の ASD 幼児と TD 幼児の言語発達について、Time1 での JCDI と Time3 での語彙質問紙を通して、意味的内容に焦点をあてて検討した。Time1 の JCDI では下位の意味的カテゴリー「おでかけ」において ASD 幼児の方が TD 幼児よりも獲得語彙が少ないことが示された。また Time3 の語彙質問紙では、非心的動詞の獲得語彙数が ASD 幼児の方が TD 幼児よりも有意に少ないことが示された。JCDI の「おでかけ」の語彙は、「海・映画・お店・会社・公園・ピクニック・デパート」等、場所を表す名詞で構成されている。ASD 幼児が TD 幼児よりもこの意味的カテゴリーで獲得語彙が少なかった理由として、ASD の特性である「限定された興味関心」の影響が考えられる。ASD 幼児は自身の行動の範囲や興味の範囲などの語彙に限定されるため、家庭の外の事物についての語彙が少なかった可能性が挙げられる。

Time3 の語彙質問紙において、非心的動詞のみについて群間差が認められた点については、非心的動詞は 58 語、心的動詞は 14 語で構成されており、非心的動詞のリストに親密度の低い動詞がより多く含まれていたためであると推測される。なお、JCDI の「動作語」、および、語彙質問紙の「非心的動詞」と「心的動詞」を合わせた「動詞全体」は、いずれも 10%水準で ASD 幼児は TD 幼児よりも獲得語彙が少ない傾向があった。このことから ASD 幼児は動詞の獲得が遅れる傾向があることが示唆される。初期の語彙の獲得においては、母親と幼児の共同注意の中で語彙のインプットが行われると考えられている。動作を表す語彙は、物の名称を表す語彙よりも ASD 幼児が指示対象に向けた話者との注意を共有しにくいことが要因のひとつであると考えられる。また、遊びや日常生活場

面での行動の広がりがないことも、動作語の獲得の少なさと関連すると考えられる。過去の研究では、ASD 児は TD 幼児に比べ語彙の獲得が遅れるが獲得される意味的カテゴリの構成は同一であることが示されてきた (e.g., Charman et al, 2003)。明らかな発達の遅れのない ASD 児を対象とした本研究では、全体的な獲得語彙数については差が認められないものの、特定の意味的カテゴリおよび品詞において獲得語彙が TD 幼児よりも少ないことが示唆された。

2 節 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の「お話し作り」課題における語連鎖及び物語り発話に関する縦断的検討

1. 問題と目的

幼児期の言語発達においては、語彙の獲得から語の連鎖、文法性を示す格助詞等の獲得を経て、複数の文の連鎖に至る。幼児は 4 歳ごろには、接続表現が多様化し (大伴, 2000), 5 歳では事象の連続性や因果関係を表す接続詞, 接続助詞を用いて, 発話同士を結び付けることが多くなり, まとまりのある発話を連鎖させていく。このような構造面の変化を基盤として, 出来事の連続性や因果関係などの論理的な関係性が明示されるナラティブへと発達していく。空想の出来事を語る FN は, 4 歳ごろから時間軸に沿って話をするようになり (Pettersen & McCunbe, 1983), CA が高くなると因果関係や登場人物の内的状態について言及したり, プランをもって話をしたりするようになる (e.g. Benson, 1993)。FN を産出するためには, 登場人物や行為を明確にし, 語彙を選択して文法的構造に基づき計画性をもって表現することが求められる。また, FN の産出には, 単に語彙や文法等の記号的側面のみでなく, 登場人物の心情について推測することや他者に分かりやすいように話を組み立てる配慮といった語用論的な側面が含まれる。そのため, 語用論に困難をもつとされる ASD 児者における FN の特徴について検討した研究は多い (e.g. Diehua, Bennetto & Young, 2006)。ASD 児の語りの特徴としては, 助詞の誤用が多い (夏目・廣瀬, 2017) といった統語面, 物語りの因果関係を構築することの困難 (e.g. Losh & Capps, 2003) といった構成面, 心的状態への言及の少なさ (e.g. 李・田中, 2011) といった登場人物への言及に関する面についての指摘がなされており, その背景には, 他者と話題や出来事を共有することの困難 (Goldman, 2008), 感情理解の制約 (Losh & Capps, 2003) があると指摘されている。ASD 児を対象とした検討は学齢期やそれ以降を対象とした研究 (e.g. 李・田中, 2013) が中心である。FN ナラティブの文連鎖の出現から, 一発話内で重文・複文構造で, 発話内容を連鎖させていく段階, さらに発

話同士を関連する内容で連鎖させる段階があると考えられるが、その移行期において ASD 幼児と定型発達（以下 TD）幼児との間に何らかの違いがあるのかどうかについては明らかになっていない。そこで本研究では、発話内容の連鎖に焦点をあて、3歳以降の ASD 幼児と TD 幼児を対象とし、縦断的に発達過程の違いについて検討することを目的とした。なお本研究において、「発話内容の連鎖」とは、一発話内の重文・複文における発話内容の連鎖及び、関連する発話の連鎖の両方を含む。

また、従来 FN の研究では、人形劇や文字のない配列画を子どもに見せながら話を聞かせた後に話の内容を語り直してもらうナラティブ再生課題（Losh & Gordon, 2014）や、マンガや紙芝居のような連続絵を子どもに見せて語ってもらう課題（夏目・廣瀬, 2017；斎藤, 2002）が用いられてきた。しかし、ナラティブ再生課題では一度聞いた話の記憶や配列画等の支えにより、子どもの言語力が過大に評価される可能性がある。また、連続図版の使用では、物語の構築が図版の視覚情報により制限され、FN を支える自由な発想が発現しにくいという制約も生じうる。そこで、本研究においては、幼児に物語の導入部分のみを提示し、その後の展開は幼児自身が考えて物語をつくる「お話し作り課題」を設定し検討を行った。幼児の自発的なストーリーの産出を分析することによって、単にストーリーの産出のみではなく、幼児が日常場面をどのように客観化し捉えているのかといった質的な側面について論じることができると考える。

2. 方法

（1）研究参加児

第2章の参加児と同じであった。Time2 よりデータ収集を行い、Time3 に加え、Time3 より 8±1 か月後に3回目のデータ収集を行った（Time4）。Time2 から Time4 のいずれかの時点において発話データが得られなかった児（ASD-B, ASD-E, ASD-G, TD-A, TD-F, TD-I）は対象から除き、表 3-3 に示した各群 7 名を分析の対象とした。両群の CA に有意差は認められなかった。

表 3-3 両群の Time4 における CA

ASD 群	Time4 CA	TD 群	Time4 CA
ASD-A	52	TD-B	57
ASD-C	56	TD-C	56
ASD-D	53	TD-D	61
ASD-F	59	TD-E	59
ASD-H	59	TD-G	56
ASD-I	53	TD-H	52
ASD-J	63	TD-J	49
平均	56.1	平均	55.7
標準偏差	3.57	標準偏差	4.07

(2) 「お話し作り課題」の設定

「お話し作り課題」では、トラブル場面で終わるように作られたストーリーの導入部分を2種類用意した(表 3-4)。幼児のパーソナルナラティブを対象とした先行研究(仲野・長崎, 2017)は、通常性からの逸脱であるハプニングを含むことで、子どもの自発的な語りを引き出しやすいと指摘し、トラブル場面を活用したパーソナルナラティブの分析を行っている。このことから、本研究においても、物語の導入部分をトラブル場面で終わるように設定した。人形や車のミニチュア等を使用し、実験実施者が人形を操作しながら参加児にストーリーの導入部分を聞かせ、話の続きを作るよう求めた。幼児の発話が止まった際には、5秒間の間隔をあげ、「その後は。」と実験者が話の続きを促した。幼児が人形の操作のみを行った場合は「男の子(もしくは女の子)は何をしているの。」と発話を促した。これらの促しは各課題3回までとした。幼児から話の終了を示す発話があった時は課題を終了した。幼児の発話はビデオカメラで録画し、トランスクリプトを作成した。「お話し作り課題」は Time2, Time3, Time4 の3回実施した。

表 3-4 「お話しづくり」課題の導入部分

提示した 道具	ストーリー
ストリー リーブル・ ケーキ 1 屋・八百 屋のミニ チュア	今日はお女の子のお誕生日です。女の子のお母さんは女の子にケーキを作ってくれました。女の子は「ヤッター。」と喜んでいます。ところがその時、窓からカラスが入ってきて、ケーキを取ってしまいました。これではパーティーが台無しです。女の子は泣いてしまいました。そこに、女の子のお兄ちゃんがやって来ました。女の子のお兄ちゃんはパーティーの準備をもう1回してくれるんだって。(ミニチュアのお店を並べながら)ここにケーキ屋さんや野菜と果物売っている八百屋さんがあるよ。この後どんなお話になるか、〇〇くん(幼児の名前)が考えて、お話しして教えてください。
ストリー 車・遊園 地のミニ チュア 2	今日の日曜日です。男の子とお父さんとお母さんは遊園地に行くことになっています。待ちに待った遊園地に行く日です。「ヤッター」と男の子は喜んでます。男の子とお父さんとお母さんは車に乗って遊園地に向かってます。ところが、その途中で、車が壊れて動かなくなってしまいました。これでは車で遊園地に行けません。でも男の子とお父さんとお母さんはどうしても遊園地に行きたいんだって。この後どんなお話になるか、〇〇くん(幼児の名前)が考えて、お話しして教えてください。

(3) データ分析の方法

(a) 物語り発話の自発性の側面

本研究は、先行研究よりも低年齢の幼児を対象としているため、幼児の発話が止まった際には、大人は幼児に「その後は。」等の発話の促しを行った。そのため、物語り発話の自発性の指標として、幼児の自発的発話と大人の促し後に表出した発話とに分け、幼児の発話に含まれる自立語の数を算出した。2つのストーリーのトランスクリプトに基づいて、幼児の自発的発話に含まれる自立語の数の平均、幼児の発話が止まったため実験実施者が促しを行った数(各課題3回まで、最大6回)、実験実施者の促し後に表出した発話に含まれる自立語の数の平均を算出した。

b) 物語り発話の構造的側面

① 発話数・自立語の生起頻度と種類数・JMLU

「お話し作り課題」のトランスクリプトに基づいて、2つのストーリーに含まれる発話の数と自立語の総生起頻度と種類数を求めた。発話数は、休止で明示される発話の区切りにおいて、統語構造の面から後続の発話と区別されるひとまとまりを一発話としてカウン

トした。名詞のみ等の不完全な発話であっても一発話としたが、擬音語や間投詞（例：「よいしょ。」）のみの表出の場合はカウントしなかった。自立語については、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、疑問詞、代名詞を対象とした。発話には繰り返しや、発話の言い直し等も出現するが、Brown (1973)の方法を参考にし、a)一つの発話における単語や句、節の繰り返し（例：「ケーキ、ケーキを買った。」）や、b)自己修正発話（「お母さん、あれ、お父さんは引っ張る車を運転した。」）はもともと完全な形の語や句、節を一度だけ含め頻度と種類数を求めた。また、統語発達の指標として、一発話中に含まれる自立語数の平均である自立語平均発話長（JMLU）を算出した。なお、先述した「お話し作り課題」の自発性の側面の分析においては、幼児の自発的発話と実験実施者の促し後に表出した発話とを分けて分析を行ったが、構造的側面においては統語面の発達に焦点を当てた分析を行うため、両者を区別せずに分析した。

② 接続表現

本研究が対象とする参加児は3歳半から5歳前半であり、複語文で発話をする段階から、接続表現の幅が広がり、文が長くなっていく段階にある。そこで、2つのストーリーに含まれる接続詞と接続助詞の生起頻度と種類数を算出した。

c) 物語り発話の内容的側面

① ストーリーのエピソードの分析

物語り発話の内容を分析するために、ストーリーに含まれるエピソードを分析した。重文・複文を話す幼児においては、一発話の中に複数のエピソードが含まれていると考えられる。そのため、エピソードの分析は、述部を核とするまとまりを単位として分析を行った。述部を核とするまとまりとは、「どうする（動詞）」、「どんなだ（形容詞及び形容動詞）」、「何だ（名詞と助動詞「だ）」のいずれかに該当するものとし、同じ動詞や形容詞であっても、主語や目的語が異なる場合は別のエピソードとした。例えば、「お店に行って、ケーキ、りんご買って、梨も買うん。で食べる。」といった場合、エピソード数は「お店に行って」「りんご買って」「梨も買うん」「食べる」の4となる。主語や目的語を伴わない動詞（例：「食べる」）はエピソードとみなすが、この場合の「ケーキ」のように、述部を含まない名詞のみの句はエピソードに該当しないこととした。また、表3-5に示すように、先行するエピソードの不必要な繰り返し（繰り返し）、意味不明な内容（意味不明）、幼児自身のことを含むストーリーとは無関連な内容（無関連）はエピソードとは見なさず発話連鎖の内容の分析からは除外した（表3-5）。一方、「繰り返し」「意味不明」「無関連」に該当する述部のまとまりの生起頻度を求め、これらの減少をス

トリーの内容における巧緻化の指標とした。なお、エピソードの分析はストーリーごとに行い、生起頻度は合わせて算出した。

表 3-5 エピソードに含まれない述部のまとめ

	定義	発話例
繰り返し	①先行する動詞や形容詞の不必要な繰り返し ②先行する動詞や形容詞の不必要な類義語の繰り返し	①直す、運転する、遊ぶ、 <u>直して</u> 、終わり」の下線部 ②「修理して、 <u>直した</u> 。」の下線部
意味不明	意味や意図が不明な発話	「運転手、壊れないよって」
無関連	物語の内容ではない無関連な内容の発話	「〇〇くんは観覧車乗ったことないんだよな」 (幼児自身の経験を述べている)

②エピソードの連鎖

発話内容の連鎖の指標はエピソードの連鎖とした。エピソードの連鎖はエピソード同士のつながりを指す。エピソードの生起頻度の分析と同様に述部を核としたまとめを分析対象とし、仲野・長崎（2017）を参考に、2つの連続したエピソードを継時的なつながりを示す「順序」（例：「買って／帰った／食べた」）、類似した内容の連鎖である「並列」（例：「りんご買って／梨も買った」）、継時性に加えて因果関係を明示する「因果」（「ケーキあげたら／元気になった」）の3つに分類し、ストーリーごとに生起頻度を求めた。「順序」、「並列」、「因果」定義を表 3-6 に示す。なお、先述したストーリーの構造的側面の分析における接続表現の使用もエピソードの連鎖の指標となりうるが、例えば接続助詞「て」は継時的なつながりを示す場合や、類似した内容の連鎖を示す場合がある。また、「帰った。食べた。」といった接続表現が無い場合においても、継時的つながりとしてエピソードが連鎖することもある。このことから、エピソードの連鎖の分析は接続詞や接続助詞の種類のみならず、述部のまとめを対象として行った。

表 3-6 エピソードの連鎖の定義

	定義	発話例
順序	2つの異なるトピックの単純な連続	「お店に行って／買って／帰った」 「遊園地行く／帰る」
並列	類似した内容の連続	「りんご買って／梨も買った」 「ジェットコースター乗る／観覧車乗る」
因果	時間的な連続性に加え、「ので」や「だから」といった因果関係を表す接続表現を含む連続	「車が直ったから／遊園地に行ける」 「ケーキあげたら／元気になった」

(4) 信頼性

エピソードの生起頻度，エピソードから除外した「繰り返し」「意味不明」「無関連」の分類について各時点4名（参加児全体の28%）について大学生一名が発話のトランスクリプトより別途評定した。評定の一致率の平均は92.2%（トランスクリプトごとの一致率の範囲：88.3～100%）であった。エピソードの連鎖（「順序」「並列」「因果」）の分類においても同様に，各時点4名について大学生一名がトランスクリプトより評定した。評定の一致率の平均は，98.8%（85.7～100%）であった。一致しなかった箇所においては，協議の上どちらかに一致させた。

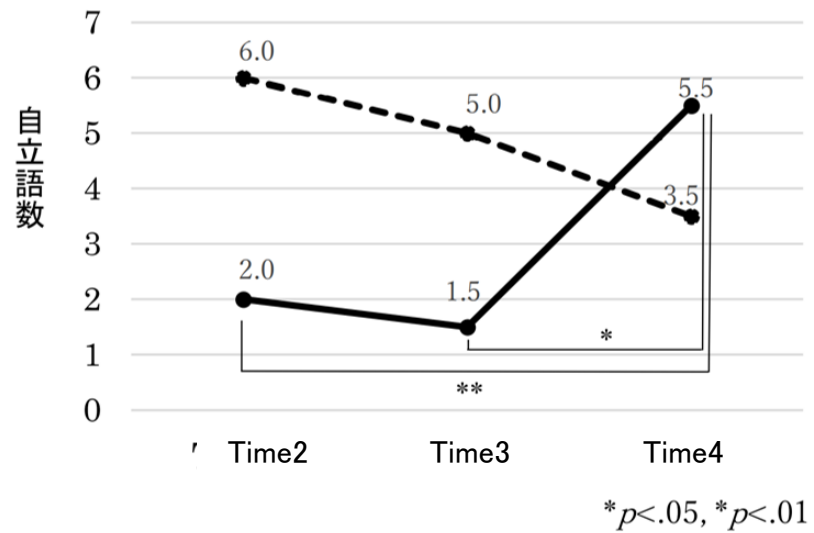
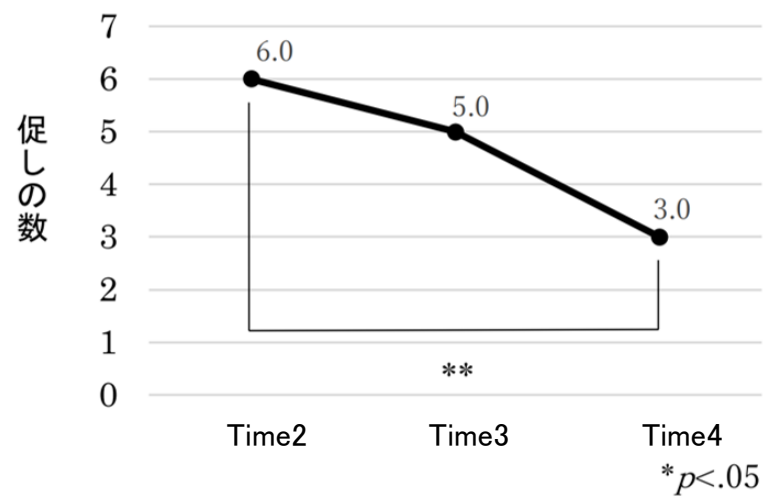
(5) データの分析方法

ASD群7名，TD群7名の計14名のデータであること，指標によっては一桁のデータを含むことから，群ごとに中央値を求め，ノンパラメトリック検定を用いた。各指標について，Time2からTime4における継時的変化を明らかにするために，群ごとにFriedman検定を行った。多重比較にはScheffeを使用した。また，各時点における群間の差を明らかにするためにマンホイットニーU検定を行った。いずれかの時点で生起人数が2名に満たなかった接続詞の生起頻度及び種類数，エピソードに含まれない「繰り返し」「意味不明」「無関連」，エピソードのつながりの一部である「並列」と「因果」においては，統計的分析は行わなかった。

3. 結果

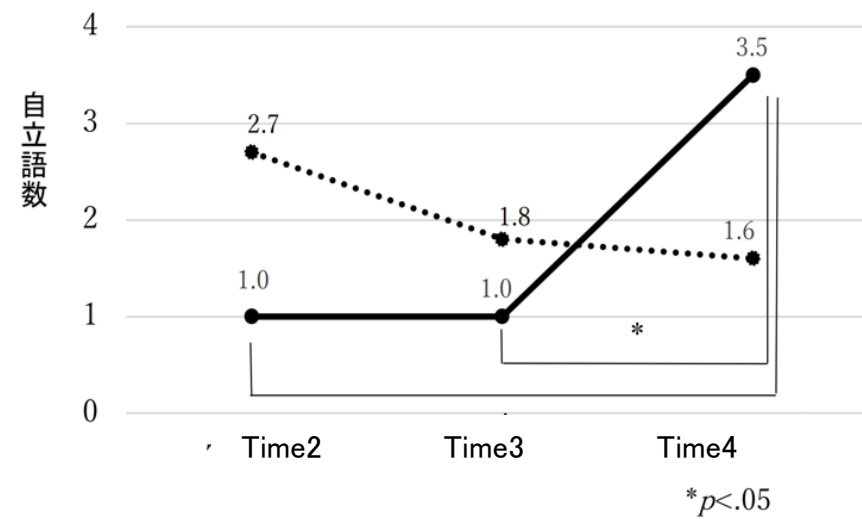
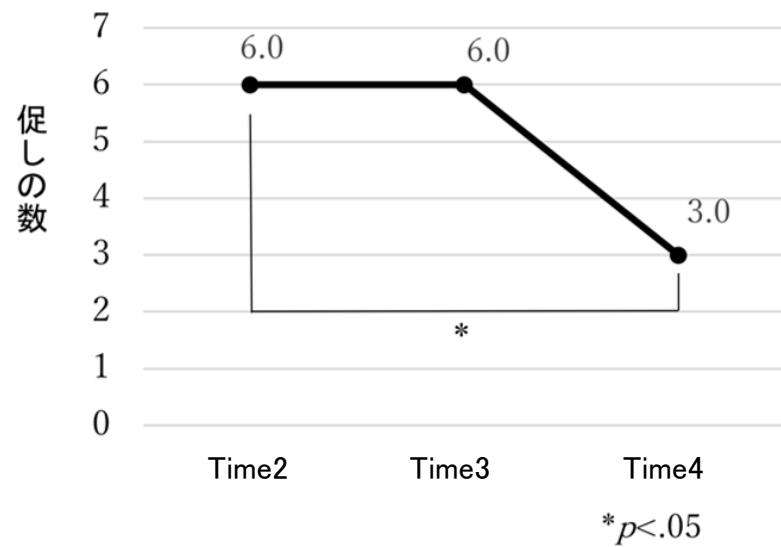
(1) 物語り発話の自発性の側面

「お話し作り課題」の自発性に関するASD群の結果を図3-1，TD群の結果を図3-2に示す。幼児の自発的発話に含まれる自立語の数の平均（ASD $\chi^2=11.38, p<.01, W=0.81$ ；TD $\chi^2=8.64, p<.05, W=0.46$ ），大人による促しの数（ASD $\chi^2=10.00, p<.01, W=0.71$ ；TD $\chi^2=7.41, p<.05, W=0.52$ ）においては，両群ともに有意な継時的変化が認められた。多重比較の結果，幼児の自発的発話に含まれる自立語の数については，どちらの群も，Time4はTime3（ASD $\chi^2=7.69, p<.05, W=0.54$ ；TD $\chi^2=6.48, p<.05, W=0.46$ ）とTime1（ASD $\chi^2=9.30, p<.01, W=0.66$ ；TD $\chi^2=6.48, p<.05, W=0.46$ ）よりも有意に多いことが認められた。また，促しの数はどちらの群もTime4はTime2よりも有意に少なかった（ASD $\chi^2=10.00, p<.01, W=0.71$ ；TD $\chi^2=6.61, p<.05, W=0.47$ ）また，いずれの時点においても群間に差はなかった。



- 自発的発話に含まれる自立語数の平均
- 促し後に表出した発話に含まれる自立語の数の平均

図 3-1 ASD 群の物語り発話における自発性の指標（中央値）の継時的変化
（左：大人の促しの数，：自立語数の平均）



- 自発的発話に含まれる自立語数の平均
- 促し後に表出した発話に含まれる自立語の数の平均

図 3-2 TD 群の物語り発話における自発性の指標（中央値）の継時的変化
 （左：大人の促しの数， 右：自立語数の平均）

(2) 物語り発話の構造的側面

a) 発話数・自立語の生起頻度と種類数・JMLU

構造的側面の分析においては、幼児の自発的発話及び促し後の発話のどちらも分析に含める。発話数、自立語の生起頻度と種類数は、両群ともに、有意な継時的変化は認められなかった(表 3-7)。また、いずれの時点でも群間差も認められなかった。JMLU については、ASD 群は有意な継時的変化が認められ ($\chi^2=8.00, p<.05, W=0.57$)、多重比較の結果 Time4 では Time3 よりも JMLU が有意に高いことが示された ($\chi^2=7.14, p<.05, W=0.51$)。TD 群においても、有意な継時的変化が認められ ($\chi^2=6.00, p<.05, W=0.42$)、多重比較の結果 Time4 は Time2 よりも JMLU が高い傾向があった ($\chi^2=5.78, p<.10, W=0.41$)。JMLU はいずれの時点においても群間差は認められなかった。

b) 接続表現

ASD 群において Time2 と Time3 では接続詞は出現しなかったが、Time4 では、2名の児が接続詞を表出した(表 3-8)。Time4 における個人ごとの生起頻度の範囲は 0 - 2、種類数の範囲は 0 - 2 であった。TD 群においては、Time2 では 2名、Time3 では 1名、Time4 では 2名が接続詞を表出し、Time2 における生起頻度の範囲は 0 - 2、Time3 では 0 - 1、Time4 では 0 - 3 であった。接続詞は、生起数自体が少なかったが、TD 群の一部では順序を表す接続詞「そして」、「それから」が Time1 から使用されていた。ASD 群においては Time4 にて「そして」、「それで」を表出する児がいた。また、TD 群においては、Time2 から因果関係を表す接続詞「そしたら」が使用され、Time4 においては、「そしたら」に加えて「だから」を表出する児がいた。

接続助詞の生起頻度と種類数を表 3-9 に示す。ASD 群は接続助詞の生起頻度において有意な継時的変化があり ($\chi^2=7.14, p<.05, W=0.51$)、多重比較の結果 Time4 は Time3 よりも多い傾向があった ($\chi^2=5.35, p<.10, W=0.38$)。TD 群は接続助詞の生起頻度と種類数のいずれにおいても継時的変化が認められ(生起頻度 $\chi^2=11.27, p<.05, W=0.80$; 種類数 $\chi^2=12.08, p<.05, W=0.86$)、多重比較の結果、Time4 は Time2 よりも接続助詞の生起頻度と種類数が多いことが示された(生起頻度 $\chi^2=11.00, p<.05, W=0.78$; 種類数 $\chi^2=11.50, p<.05, W=0.82$)。接続助詞の生起頻度と種類数に群間差は認められなかった。両群ともに Time3 までに「て」を用いる児がほとんどであった。また、Time3、4 においては、因果関係を示す「～から」や「～ので」を使用する児もいた。

表 3-7 発話数・自立語の生起頻度と種類数・JMLU の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

		Time2	Time3	Time4	時点間	群間差
発話数	ASD	7.0 (4 - 11 ; 4.0)	8.0 (5 - 11 ; 3.0)	8.0 (5 - 11 ; 3.5)	<i>n.s</i>	<i>n.s</i>
	TD	6.0 (1 - 10 ; 3.0)	8.0 (2 - 12 ; 2.5)	6.0 (3 - 12 ; 4.0)	<i>n.s</i>	
自立語の 生起頻度	ASD	20.0 (7 - 28 ; 9.0)	12.0 (5 - 25 ; 6.0)	25.0 (12 - 37 ; 13.0)	<i>n.s</i>	<i>n.s</i>
	TD	10.0 (1 - 35 ; 11.0)	11.0 (6 - 30 ; 11.0)	17.0 (7 - 74 ; 22.5)	<i>n.s</i>	
自立語の 種類数	ASD	13.0 (5 - 21 ; 7.0)	10.0 (5 - 20 ; 4.0)	20.0 (11 - 27 ; 12.5)	<i>n.s</i>	<i>n.s</i>
	TD	10.0 (1 - 22 ; 8.5)	10.0 (6 - 24 ; 6.5)	14.0 (7 - 51 ; 18.0)	<i>n.s</i>	
JMLU	ASD	2.6 (1.7 - 3.0 ; 0.5)	1.6 (1.0 - 2.5 ; 0.6)	3.1 (1.4 - 6.4 ; 2.9)	Time3<Time4*	<i>n.s</i>
	TD	1.6 (1.0 - 3.5 ; 1.0)	2.2 (1.3 - 3.0 ; 0.9)	4.0 (1.1 - 7.6 ; 3.9)	Time2<Time4 †	

* $p < .05$, † $p < .10$

表 3-8 接続表現が出現した時期と種類（カッコ内は使用人数）

		Time2	Time3	Time4
ASD	接続詞	—	—	それで(2), そうして(1)
	接続助詞	て(4), たら(1), から(1)	て(4), たら(1)	て(4), たら(2), から(1)
TD	接続詞	それから(1), そうして(1) そしたら(1)	そしたら(1)	それで(2), そしたら(1), そうして(2), だから(1)
	接続助詞	て(2)	て(4), たら(1), から(1)	て(7), たら(3), から(2), ので(1), と(1)

表 3-9 接続助詞の生起頻度と種類数の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

		Time2	Time3	Time4	時点間	群間差
生起頻度	ASD	1.0 (0 - 3 ; 2.0)	1.0 (0 - 6 ; 1.0)	3.0 (0 - 6 ; 2.5)	Time3<Time4 †	<i>n.s</i>
	TD	0.0 (0 - 1 ; 0.5)	1.0 (0 - 5 ; 2.0)	5.0 (1 - 17 ; 5.5)	Time2<Time4*	
種類数	ASD	0.0 (0 - 2 ; 1.0)	0.0 (0 - 2 ; 1.0)	1.0 (0 - 2 ; 0.5)	<i>n.s</i>	<i>n.s</i>
	TD	0.0 (0 - 1 ; 0.0)	1.0 (0 - 2 ; 1.0)	2.0 (0 - 5 ; 1.0)	Time2<Time4*	

* $p<.05$, † $p<.10$

(3) 物語り発話の内容的側面

a) エピソードの生起頻度

エピソードの生起頻度を表 3-10 に示す。エピソードの生起頻度はいずれの群においても有意な継時的変化が認められ (ASD $\chi^2=11.30, p<.01, W=0.80$; TD $\chi^2=6.72, p<.05, W=0.48$) , Time4 は Time2 よりも有意にエピソードの生起頻度が多かった (ASD $\chi^2=11.07, p<.01, W=0.79$; TD $\chi^2=6.48, p<.05, W=0.46$) 。群間の比較においては, Time1 で ASD 群は TD 群よりも有意に少なかった ($z=2.086, p<.05, r=.79$) 。

また, エピソードに含まれない「繰り返し」は ASD 群では Time2 で 6 名, Time3 で 4 名, Time4 で 2 名生起した。TD 群では Time2 で 2 名, Time3 で 3 名, Time4 で 1 名生起した。

「意味不明」は ASD 群では Time2 で 2 名, Time3 と Time4 では 1 名生起した。TD 群では Time2 で 1 名, Time3 と Time4 では生起した児はいなかった。

「無関連」は ASD 群では Time2 で 5 名, Time3 で 1 名, Time4 で 1 名生起した。TD 群では Time2 と Time4 で 1 名生起した。

b) エピソードの連鎖

エピソードの連鎖の結果を表 3-11 に示す。両群ともいずれの時点においても, 最も多い連鎖は「順序」であり, ASD 群 TD 群ともに, 継時的変化が認められ (ASD $\chi^2=12.07, p<.01, W=0.86$; TD $\chi^2=7.18, p<.05, W=0.51$) , 多重比較の結果, どちらの群においても, Time4 は Time2 よりも多かった (ASD $\chi^2=11.57, p<.01, W=0.82$; TD $\chi^2=6.68, p<.05, W=0.47$) 。ASD 群では, Time3 が Time2 よりも有意傾向で多かった ($\chi^2=5.35, p<.10, W=0.38$) 。また群間の比較においては, Time2 において ASD 群は TD 群よりも「順序」の生起頻度が有意に少なかった ($z=2.171, p<.05, r=.82$) 。

「並列」は, ASD 群では Time2 で 2 名, Time3 で 1 名, Time4 で 1 名, TD 群では Time2 で 2 名, Time4 で 2 名生起していた。「因果」は ASD 群では Time3, 4 で 1 名ずつ, TD 群では Time2, 3 で 1 名ずつ, Time4 で 3 名生起した。

表 3-10 「エピソード」の生起頻度の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

	Time2	Time3	Time4	時点間	群間差
ASD	4.0 (1 - 5 ; 2.0)	5.0 (4 - 11 ; 1.5)	8.0 (4 - 10 ; 1.0)	Time2<Time3**	ASD<TD*
TD	5.0 (2 - 10 ; 3.0)	7.0 (2 - 13 ; 6.0)	10.0 (6 - 30 ; 8.0)	Time2<Time3*	(Time2)

* $p<.05$, ** $p<.01$

表 3-11 エピソードの連鎖「順序」の生起頻度の中央値（カッコ内は範囲；四分位範囲）

	Time2	Time3	Time4	時点間	群間差
ASD	1.0 (0 - 2 ; 1.0)	3.0 (2 - 8 ; 2.0)	6.0 (3 - 8 ; 2.5)	Time2<Time4**	ASD<TD*
TD	3.0 (1 - 8 ; 2.5)	4.0 (0 - 11 ; 6.0)	8.0 (4 - 22 ; 6.5)	Time2<Time4*	(Time2)

* $p<.05$, ** $p<.01$

4. 考 察

本研究では、ASD 幼児の「お話し作り課題」における自発性の側面、自立語や接続表現の生起頻度や種類数といった構造的側面、ストーリーに含まれるエピソードの生起頻度や連鎖といった内容的側面について TD 幼児と縦断的に比較検討した。

分析の第一の側面は発話の自発性である。両群ともに大人が幼児の発話を促すことが減少し、自発的発話に含まれる自立語の数が増えていく過程が見られた。「お話し作り課題」における自発性においては群間に差はなく、発達過程は類似していると言える。

分析の第二の側面は表出されたストーリーの構造的側面である。構造的側面のひとつである JMLU については、両群ともに有意な継時的変化が認められ、ASD 群では、Time4 は Time3 よりも有意に高く、TD 群では Time4 は Time2 よりも高い傾向があった。接続助詞の生起頻度についても両群ともに有意な継時的変化があり、ASD 群は Time4 が Time3 よりも多い傾向があり、TD 群では、Time4 において Time2 よりも有意に多かった。接続助詞によって1つの文の中で重文・複文が構成されるため、宮田・大伴（2020）でも論じられているように、接続助詞の獲得は JMLU の上昇の一因であると考えられる。構造的側面の特徴を指摘した先行研究（夏目・廣田，2017）よりも低年齢の ASD 幼児を対象とした本研究においては、構造的側面についてはいずれの時点においても群間差は認められなかった。言語発達状況を統制した ASD 児と TD 児は、FN における構造的側面に差は認められないという指摘（Diehua, Bennetto, & Young, 2006）があるが、本研究の結果からは、より低年齢の ASD 幼児を対象とした検討においても同様の結果であるとい

う知見が加えられ、「お話し作り課題」における幼児の発話の文構造の発達過程は両群で類似していることが示唆された。

分析の第三の側面は表出されたストーリーの内容的側面である。重文・複文を話す幼児においては、一発話の中に複数のエピソードが含まれていると考えられる。そのため、内容的側面の分析は、述部を核とするまとまりを単位とし、述部を核としたまとまりをエピソード数として算出をした。また、発話内容の連鎖はエピソードの連鎖を指標とした。エピソードの生起頻度および、エピソードの連鎖のひとつである「順序」の生起頻度は両群とも年齢の上昇に伴い増加していくことが示された。エピソードの増加は、幼児の生活経験の広がりに加えて、出来事を客観的に捉え、それを象徴化する機能が発達したことが背景にあると考えられる。また、内田(1982)は物語を産出する際、「プラン機能」の働きによって出来事の展開を組織化すると述べられている。そのことからエピソードを連鎖させるためには、先行する発話を記憶しつつ、時系列に沿った内容を想起し、一貫して話しを進めるというワーキングメモリーを含む実行機能が必要であると考えられるが、生活年齢の上昇に伴い、これらの認知機能が発達したことで両群ともにエピソードの連鎖が増えたと推測される。群間の比較では Time2 において、ASD 群は、エピソードの生起頻度が TD 群よりも有意に少ないこと、エピソードの連鎖のひとつである「順序」が TD 幼児よりも少ないことが明らかにされた。一方で、Time3 と Time4 では群間差は認められなかった。先述の通り、Time2 から Time3 にかけて、ASD 幼児は「お話し作り課題」における自発性の側面や構造的側面の発達には有意な変化は見られなかった。Time1 の時点においては、ASD 群は 7 名中 5 名がストーリーとは「無関連」な発話を生起させており、ASD 幼児は目に入った物から連想されることを述べるなど(例：ストーリー2の車のミニチュアを見て「車と電車がぶつかったんだよ」とTVのニュースで見たことを話す)、課題への注意の維持が困難な事例があった。Time3, Time4 では、年齢の上昇により注意集中のスパンが伸びたと想定され、ストーリーとは無関連な発話が減り、エピソードの生起頻度やエピソードの連鎖のひとつである「順序」の生起頻度が増えたと推察される。

これまでの研究においては、ASD 児はストーリーの因果関係を構築することの難しさが指摘されていたが(Losh & Gordon, 2014 ; 李・田中, 2011) , 本研究においては、群間の差は認められなかった。先行研究(大伴・若葉, 1994)においては接続表現の多様化と子どもの因果関係への言及との関連が指摘されているが、本研究においては、接続助詞の種類数において群間差は認められなかった。しかし、TD 群の接続助詞の種類数は Time3 では Time1 よりも有意に多かった一方で、ASD 群は接続助詞の種類数に有意な変化は認められなかった。TD 幼児は接続表現が増えている段階であると推測され、今後群間差が

生じる可能性がある。TD 群は Time3 において「だから」、「ので」、「から」等の接続表現を用いてエピソード同士を因果関係で連鎖させていた。今後因果関係への言及が増えていく段階であると考えられるが、本研究でデータ収集を行なった時点においては、「因果」の生起頻度自体が少なく統計的分析は行わなかった。「因果」の生起には、行為と結果を結びつけることや、行為と登場人物の感情を結びつけることが必要であり、他者理解や状況理解の苦手さを特徴とする ASD 児 (Happe, 1994) においては表出が困難であることが推測される。そのため、年齢の上昇に伴い TD 児が因果関係に言及することが多くなると、群間に差が生じる可能性が考えられる。因果関係への言及が生起する段階までの過程についても検討する必要がある。

本研究では、子どもにストーリーの導入部分を聞かせ、続きを子どもに語ってもらう課題を実施し、幼児が自発的に生成した物語り発話の分析を行った。しかし、実際の日常場面では、子どもは興味を持っている内容や遊びの流れの中で自発的にストーリーを語り、大人がそれに応答していくことにより展開されていく。自然場面における自発的発話と課題場面における自発的発話を分析した本研究とは手続きに違いがあることから、今後はより自然な状況における語りを検討することが課題である。

第4章 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の象徴遊びの発達と言語発達との関連について

第4章においては、第2章及び第3章で得られた象徴遊びの指標と言語発達の指標の関連についての検討を行った。第1節では、象徴遊び行動の生起頻度やレパートリー数と獲得語彙数との関連について明らかにすること、第2節においては、象徴遊び行動の連鎖と発話内容の連鎖との関連を明らかにすること、第3節においては象徴遊び場面における幼児の自発的な発話について ASD 群と TD 群の違いを明らかにすることを目的とした。

第1節 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児の象徴遊び行動と獲得語彙の関連について

1. 問題と目的

象徴遊びと言語はどちらも表象機能が関連していると考えられることから、両者の関連について研究がなされている。McCune (2008) は象徴遊びの発達と言語発達についての認知的構造の共通性について述べ、ふり遊びの出現時期と一語文の出現時期といった両者の出現時期の対応について論じている。

象徴遊びと言語発達の関連については、言語発達に遅れのある児を対象とした検討も行われている。Terell ら (1984) は発語の発達レベルを合わせた言語発達遅滞児と定型発達児の象徴遊びを Symbolic Play Test (SPT) (Lowe, & Costello, 1988) を使用し比較した。言語発達遅滞児の方が SPT の成績が高い結果となったことから、象徴遊びと言語発達には直接的な結びつきがないと論じている。また、藤野・種村 (1999) は、言語発達遅滞児を対象とし、「受動的他者を設定する象徴遊び」の出現時期と一語文期の出現について検討し、「受動的他者を設定する象徴遊び」が一語文期の前提条件となっていると述べた。また、4歳～7歳の ASD 児を対象とした小山 (2001) も同様に、象徴遊びの出現時期と言語の発達について論じており、遊びのパートナーからの人形を用いた働きかけを受け止めるようになった事例においては、2語発話以上の言語段階に達しており、会話が成立し始めたことを報告している。このように先行研究においては、ふり遊びの出現時期と一語文の出現時期といったおおまかな出現時期について分析している研究が多く、象徴遊び行動の生起頻度やレパートリー数に焦点をあてた検討はなされていない。また、知的発達に遅れのない ASD 幼児を対象とした研究も十分になされていない。そこで、本研究においては、象徴遊び行動の生起頻度とレパートリー数と獲得語彙の豊富さとの関連について

検討することを目的とする。初期の象徴遊びと言語発達については、象徴遊びの発達が言語発達に先行することや前提条件となることが指摘されている（e.g. 藤野・種村，1999）。そのため、本研究においては、Time1 時点における象徴遊びの指標と JCDI の合計得点、Time3 時点における象徴遊びの指標と語彙質問紙の獲得語彙数の相関を求め、象徴遊びと獲得語彙の関連を検討することに加え、Time1 における象徴遊びの指標と Time3 における獲得語彙の指標間の相関を求め、象徴遊びの発達が約 1 年後の獲得語彙数と関連するかを検討する。なお、象徴遊びの指標となるデータは Time2 においても収集しているが、獲得語彙を検討する上で言語発達全般の状況も関連していると考えられたため、象徴遊びの各指標、獲得語彙数、全般的な言語発達の指標である LC 年齢の 3 つデータを全て収集した Time1 および Time3 を分析の対象とした。

McCune（2008）は獲得語彙数が増加する背景として、具体的状況下から脱却し、対象化、客観化するスキルの進展を挙げている。そのことから獲得語彙の増加と、行為を対象化し象徴化する象徴遊びとは類似した構造をもつと考えられる。そのため、本研究の仮説は、①ASD 群においても TD 群においても、Time1、Time3 の両時点において象徴遊び行動の頻度とレパトリー数が多い児ほど獲得語彙数が多い、②Time1 の象徴遊びにおいて象徴遊び行動の頻度とレパトリー数が多い児ほど Time3 の獲得語彙数が多い、とした。

2. 方法

（1）研究参加児

研究参加児は第 2 章と同じ ASD 幼児 10 名と TD 幼児 10 名とした。

（2）分析対象のデータ

a) 象徴遊びの指標

象徴遊びの指標は Time1 および Time3 における、象徴遊び行動の生起頻度とレパトリー数、象徴遊び行動の観点別分類における指標（物の使用の観点：「ミニチュアを使用した象徴遊び」「見立てを含む象徴遊び」、物と人との関係性の観点：「自己に向けた象徴遊び」「受動的他者を設定する象徴遊び」「能動的他者を設定する象徴遊び」）とした。

b) 獲得語彙の指標

Time1 において、データ収集を行った JCDI「語と文法」の語彙領域のうち「幼児語」と「幼児語 2」を除いた合計得点を指標の 1 つとした。また、Time3 にデータ収集を行った語彙質問紙においては、動詞の獲得語彙数（最大 72）と総獲得語彙数（最大 91）を指

標とした。第3章1節において、Time3の非心的動詞の獲得語彙数に群間の差が認められたことから、動詞の獲得語彙数においても検討することとした。

c) 全般的な言語発達の指標

全般的な言語発達の指標はTime1およびTime3におけるLCスケールの言語表出、言語理解、コミュニケーション、総合のLC年齢とした。

(3) データの分析方法

①Time1の象徴遊びの各指標とJCDIの合計得点、言語表出・言語理解・コミュニケーション・総合の各LC年齢、②Time3の象徴遊びの各指標とTime3の動詞の獲得語彙数、総獲得語彙数、各LC年齢、③Time1の象徴遊びの各指標とTime3の動詞の獲得語彙数、総獲得語彙数、各LC年齢についてSpearmanの順位相関係数を求めた。

3. 結果

(1) ASD群

a) Time1における指標間の関連

象徴遊びの各指標、JCDIの合計得点、各LC年齢との間に有意な相関は認められなかった。

b) Time3における指標間の関連

象徴遊びの各指標と語彙質問紙の動詞の獲得語彙数、総獲得語彙数、各LC年齢の間に有意な相関は認められなかった。

c) Time1の象徴遊びの各指標とTime3の獲得語彙数との関連

Time1の象徴遊びの各指標とTime3の動詞及び総獲得語彙数、LC年齢の間には有意な相関は認められなかった。

(2) TD群

a) Time1における指標間の関連

象徴遊びの各指標とJCDIの合計得点との関連においては、象徴遊び行動の生起頻度及びレパトリー数とJCDIの合計得点との間に有意な正の相関が認められた(象徴遊び行動の生起頻度 $r=.66, p<.05$; 象徴遊び行動のレパトリー数 $r=.76, p<.01$) (表4-1)。また、象徴遊びの各指標と各LC年齢との関連においては、言語表出LC年齢と能動的他者

を設定した象徴遊び行動の生起頻度との間に有意な正の相関が認められた ($r=.65$, $p<.05$)。なお、JCDI の合計得点と各 LC 年齢との間には有意な相関は認められなかった。

b) Time3 における指標間の関連

象徴遊び遊びの各指標と語彙質問紙の動詞の獲得語彙数及び総獲得語彙数との間に有意な相関は認められなかった (表 4-2)。象徴遊びの各指標と各 LC 年齢の間においては、コミュニケーションの LC 年齢と象徴遊び行動の生起頻度及びレパトリー数, 受動的他者を設定する象徴遊びの生起頻度とそれぞれ有意な正の相関が認められた (象徴遊び行動の生起頻度 $r=.64$, $p<.05$; 象徴遊び行動のレパトリー数 $r=.71$, $p<.05$; 能動的他者を設定する象徴遊びの生起頻度 $r=.67$, $p<.05$)。また, 動詞の獲得語彙数は言語理解の LC 年齢及び総合の LC 年齢と有意な正の相関があった (言語理解の LC 年齢 $r=.86$, $p<.01$; 総合の LC 年齢 $r=.68$, $p<.05$)。また, 総獲得語彙数も同様に言語理解の LC 年齢及び総合の LC 年齢と有意な正の相関があった (言語理解の LC 年齢 $r=.85$, $p<.01$; 総合の LC 年齢 $r=.65$, $p<.05$)。

c) Time1 の象徴遊びの各指標と Time3 の獲得語彙数との関連

Time1 における象徴遊び行動のレパトリー数と Time3 の語彙質問紙における動詞の獲得語彙数及び総獲得語彙数との間に有意な正の相関が認められた (動詞の獲得語彙数 $r=.69$, $p<.05$; 総獲得語彙数 $r=.71$, $p<.05$) (表 4-3)。Time1 の各 LC 年齢と Time3 の動詞及び総合の獲得語彙数との間には有意な相関はなかった。

表 4-1 Time1 における指標間の相関係数 (TD 幼児)

	獲得語彙		LC 年齢			
	JCDI 合計数	言語表出	言語理解	コミュニケーション	総合	
象徴遊び	象徴遊び行動の生起頻度	.661*	.394	.150	.414	.471
	象徴遊び行動のレパートリー数	.765**	.309	.225	-.082	.246
	ミニチュアを使用した象徴遊び	.036	.271	-.018	-.205	-.076
	見立てを含む象徴遊び	.381	.130	.230	.350	.374
	自己に向けた象徴遊び	.527	.203	.118	.275	.317
	受動的他者を設定する象徴遊び	.485	.416	.275	.353	.317
	能動的他者を設定する象徴遊び	.470	.659*	.441	.293	.498
獲得語彙	JCDI の合計数	-	.449	.553	.336	.579

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-2 Time3 における各指標の相関 (TD 群)

	獲得語彙		LC 年齢				
	動詞の獲得語彙数	総獲得語彙数	言語表出	言語理解	コミュニケーション	総合	
象徴遊び	象徴遊び行動の生起頻度	-.209	-.252	.356	-.123	.646*	.231
	象徴遊び行動のレパートリー数	.147	.131	.618	.384	.716*	.606
	ミニチュアを使用した象徴遊び	.442	.435	.197	.179	-.122	.183
	見立てを含む象徴遊び	-.043	-.043	.309	.142	.549	.325
	自己に向けた象徴遊び	-.191	-.233	.221	-.073	.376	.176
	受動的他者を設定する象徴遊び	.158	.122	.624	.273	.675*	.529
	能動的他者を設定する象徴遊び	-.125	-.134	.364	.028	.566	.275
語彙獲得	動詞の獲得語彙数	-	.971	.570	.865**	.175	.689*
	総獲得語彙数	-	-	.500	.850**	.086	.656*

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-3 Time1 における象徴遊びの指標と Time3 における獲得語彙の指標間の相関 (TD 群)

		語彙獲得 (Time3)	
		動詞の獲得 語彙数	総獲得 語彙数
象徴遊び行動の生起頻度		.545	.524
象徴遊び行動のレパートリー数		.690*	.719*
象徴 遊び (Time1)	ミニチュアを使用した象徴遊び	.009	-.003
	見立てを含む象徴遊び	.286	.292
	自己に向けた象徴遊び	.333	.363
	受動的他者を設定する象徴遊び	.198	.249
	能動的他者を設定する象徴遊び	.372	.386

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考 察

象徴遊びの各指標と獲得語彙数、LC年齢との関連において ASD 群と TD 群で異なる結果が得られた。TD 群においては、Time1 の時点において、象徴遊び行動の生起頻度及びレパトリー数と JCDI の合計得点との間に有意な正の相関が認められた。また、Time1 における象徴遊び行動のレパトリー数は Time3 における語彙質問紙の動詞の獲得語彙数および総獲得語彙数との間に有意な正の相関が認められた。象徴遊び行動の生起頻度が多いことは表象能力を獲得し、容易に使用することができることを示すと考えられる。また、象徴遊び行動のレパトリー数が多いことは、象徴化、客観化できる対象や動作が豊富であることを示すと考えられる。McCune (2008) は一語文期の語彙増加の背景として、具体的状況下から脱却し、対象化、客観化するスキルが進展することを挙げている。象徴遊びの生起頻度とレパトリー数が多いことはこのような一語文期の語彙増加の背景に挙げられる能力と共通する構造をもっていると考えられる。このことより、Time1 における象徴遊び行動の生起頻度及びレパトリー数と JCDI の語彙合計数との間に有意な相関があったと考えられる。また、象徴遊び行動のレパトリーの豊富さは、象徴化できる動作や行為の多様性が高いことを示している。Time1 における象徴遊び行動のレパトリー数と Time3 における動詞の獲得語彙数との間に正の相関が認められたことは、このような動作や行為を象徴化する能力が両者に共通してあることが背景にあると考えられる。一方で、Time3 においては、象徴遊び行動の指標と獲得語彙の指標とは関連せず、象徴遊び行動の各指標は言語発達の指標である LC スケールのコミュニケーションの LC 年齢、獲得語彙の指標は言語表出、言語理解、総合の各 LC 年齢と有意な正の相関が認められた。象徴遊びと語彙の獲得には、共通する基盤として表象機能との関連があることが考えられる。そのため、表象機能の発達が著しい時期である発達初期の段階においては、両者は関連するが、表象機能の発達が著しい時期を過ぎると、言語獲得は語彙に限定しない言語発達全般の能力と関連する可能性も示唆された。

ASD 群においては、TD 群と異なり、Time1、Time3 の各時点において遊びの指標と獲得語彙の指標との間に有意な相関は認められなかった。また、Time1 の象徴遊びと Time3 の獲得語彙の指標間においても有意な相関は認められなかった。TD 群においては象徴遊びの指標と獲得語彙の指標が関連するのに対し、ASD 群においては両者の関連が認められなかったこと背景として、象徴遊びの指標が幼児の自発的な象徴遊び場面の観察から得られたことや興味関心の違いが挙げられる。本研究においては、象徴遊びは 5 分間の自由遊び場面で観察された幼児の自発的な象徴遊び行動を観察対象としている。第 2 章の検討では、ASD 群の象徴遊びの特徴として象徴遊び行動のレパトリーの広がり制約がある

ことが認められた。TD 群においては、象徴遊び場面において自発的に広く日常生活経験を象徴化することにより、自身が表象できる様々な運動シエマが象徴遊び行動のレパトリー数として現れたと考えられる。一方、ASD 児は有しているスキルを使いにくいという指摘があるように (Sigman & Ungerer, 1981), 表象できる運動シエマを有していても、興味関心の限定等の特性から、遊び場面において自発的な表出が見られなかったという可能性が考えられる。その結果、象徴化の能力を有していても象徴遊び行動の指標である象徴遊び行動の生起頻度やレパトリー数といった値として現れにくく、獲得語彙の指標との関連が認められなかった可能性がある。

これらのことを考慮すると、ASD 群において象徴遊びと獲得語彙の指標に関連が認められなかったという結果は、両者の間に関連性がないと捉えるべきではなく、ASD 幼児の象徴遊びにおける自発性の特徴が反映しているとも考えられる。

一方で、ASD 幼児が象徴遊びと獲得語彙の指標との関連が見られなかったことのもうひとつの背景として、語彙の獲得の方略に違いがあることも考えられる。TD 幼児は他者との相互交渉の中で共同注意を基盤として語彙を獲得するとともに (Tomasello & Todd, 1983), 初期の語彙の獲得は子どもの日常生活経験や他者認識の発達も反映されている (渡瀬, 2004)。知的発達の遅れの伴う ASD 児の言語特性を検討した研究においては、ASD 児は興味関心の高い語彙の獲得が早い可能性が指摘されており (藤上・大伴, 2009), 興味関心の限定といった ASD 幼児の特徴が語彙の獲得に反映すると考えられる。また、ASD 児においては、コマーシャルのセリフを反復的に使用する遅延性エコラリアや、語彙を定型句としてとらえること (Prizant, 1983) も指摘されている。このような知見から ASD 幼児は言語入力を語彙知識として内化させる過程に TD 幼児との違いがあると推測される。また、本研究において獲得語彙は子どもが対象の語彙を表出したことがあるかどうかを養育者に問う質問紙を用いて評価を行った。チェックリストで示される語彙のレパトリーは子どもの言語表出行動に基づいて養育者が回答を行う。多様なコミュニケーション場面で要求、叙述、誘い等の幅広い語用論的機能の発話がある TD 児に比べて、語用論的機能の狭い ASD 児においては、語彙知識の中で、対人場面で表出される語彙に偏りがある可能性がある。多様な語彙を対象とし、絵の呼称や選択するといった語彙レパトリーの評価を用いて語彙知識を測定することによって、象徴遊びと語彙の関連性についてさらに検討を重ねていく必要がある。

第2節 自閉スペクトラム症幼児および定型発達幼児における象徴遊び行動の連鎖と物語り発話との関連

1. 問題と目的

語りと象徴遊びの関連について、先行研究では、2つの観点から論じられている。第一に、多語文の使用や接続詞の使用といった構造的側面である。McCune (2008) は、階層的なふり（例：玩具の食べ物をポットに入れ、かき混ぜ、母親に食べさせる）の出現時期に、多語文が出現すると述べている。また Westby (2000) は、幼児が遊びを連鎖させていくにつれて接続詞の使用が増えること指摘している。これら統語的な発達は、単に言語の記号的側面の発達を示すのみでなく、先行する発話とその後の発話の内容をつなぎながら一文を構成するといったワーキングメモリーやプランニングの発達が背景にあることが指摘されている。このような認知的基盤は象徴遊びの連鎖における認知的基盤と共通性をもつと述べられている。また物語り発話との関連において、Westby (2008) は幼児が流れのある遊びを行うのに伴い、計画性のある語りを発達させていくと指摘し、象徴遊びの連鎖と物語り発話との関連性について論じている。小山 (2012) は象徴遊びの場で現実経験と結びついた予測やプランニングといった認知発達が遊びの中で促進され、心の理論の発達や言語発達につながっていることを指摘した。一方で、Nicolopoulou (2007) は、物語り発話 (story telling) と役割を持ったふり遊びは認知的基盤が異なると指摘している。物語を語る際には、一貫性のある物語りのプロットを計画することが必要だが、ふり遊びにおいては、一貫性を持ったプロットを計画する前に幼児はキャラクターを演じ始めると論じている。

ASD 児を対象として象徴遊びの発達と言語発達との関連について検討した研究においては、象徴遊びの出現時期と言語の出現時期の関連について論じられており (e.g. 小山, 2001), 象徴遊びの連鎖の長さと言話の発達との関連についての知見は乏しい。そこで、本研究においては、第2章で得られた Time3 の時点における象徴遊びの連鎖の指標と、第3章で得られた Time3 及び Time4 時点における物語り発話の指標との関連について検討を行う。第2章では、象徴遊びの連鎖は Time3 に該当する時期に増加しており、群内での個人差が大きい時点であったため、Time3 を分析の対象とした。物語り発話については Time3 及び Time4 を分析の対象とし、Time3 の象徴遊びの連鎖の指標と言話との指標間の関連について Spearman 相関係数を求めた。また、第1節と同様に象徴遊びは言語発達を予測するという知見から (e.g. 藤野・種村, 1999), Time3 における象徴遊

びの連鎖の指標と Time4 における物語り発話の指標との間においても相関係数を算出した。

また、象徴遊びの連鎖の指標においては、象徴遊び行動の平均行動連鎖数、最大行動連鎖数に加えて、テーマの生起頻度とレパートリー数も分析の対象とした、Time3 において、「食事」で作ったお弁当を持って「公園」に行くといったように、テーマ間をまたいで象徴遊び行動を連鎖させている児がいた。このことから象徴遊びの連鎖とテーマの生起頻度やレパートリーについては関連があることが推測されるため、分析の対象として加えた。本研究の仮説は、両群ともに、象徴遊びのテーマの生起頻度やレパートリー数、象徴遊び行動の連鎖は、①物語り発話の JMLU や接続助詞の生起頻度や種類数との関連があること、②象徴遊びの生起頻度やレパートリー数は物語り発話の発話内容の連鎖と関連がある、の 2 点とした。

2. 方法

(1) 研究参加児

研究参加児は第 3 章 2 節と同じ、ASD 幼児 7 名、TD 幼児 7 名とした。

(2) 分析の対象

a) 象徴遊びの連鎖の指標

第 2 章で得られた象徴遊びのデータの内、Time3 における「テーマの生起頻度」「テーマの種類数」「平均行動連鎖数」「最大行動連鎖数」とした。

b) 物語り発話の指標

発話内容の連鎖の指標は、第 3 章 2 節で得られた「お話しづくり課題」における物語り発話のデータを対象とする。「お話しづくり課題」においては、Time3、Time4 の時点で得られたデータを分析の対象とした。分析を行う指標は、物語り発話の自発性の指標

(「促しの数」「促し後の発話に含まれる自立語の数」「自発的に開始した発話中の自立語の数」)、構造的側面(発話数・自立語の生起頻度と種類数・接続助詞の生起頻度と種類数、JMLU)、内容的側面(エピソードの生起頻度・エピソードの連鎖の一つである「順序」の生起頻度・エピソードに含まれない述部のまとまりの一つである「繰り返し」の生起頻度)とした。内容的側面においては、エピソードに含まれない述部のまとまりである「意味不明」「無関連」の生起頻度やエピソードの連鎖の種類である「並列」と「因果」も含まれるが、どちらも生起した児が少なかったため分析対象外とした。

c) 全般的言語発達の指標

発話の連鎖は言語発達状況も関連すると考えられる。そのため、Time3 の時点における LC スケールの LC 年齢（言語表出・言語理解・コミュニケーション・総合）を分析の対象とした。

（3）分析方法

①Time3 時点における象徴遊びの各指標，物語り発話の各指標，各 LC 年齢，②Time3 の象徴遊びの各指標，各 LC 年齢，Time4 の物語り発話の各指標について，Spearman の順位相関係数を求めた。また，③物語り発話において発話数や自立語数等の構造的側面と内容的側面との間に相関があるかを明らかにするために，Time3 および Time4 における物語り発話の各指標の内の相関係数についても同様に算出した。

3. 結果

（1）ASD 群

a) Time3 における指標間の関連について

象徴遊びのテーマの生起頻度と物語り発話のエピソードの生起頻度の間に有意な負の相関が認められた ($r = -.75, p < .05$) (表 4-4)。また，象徴遊び行動の平均および最大行動連鎖数は物語り発話における発話数（平均行動連鎖数： $r = .82, p < .01$ ；最大行動連鎖数 $r = .88, p < .01$ ）と繰り返し数（平均行動連鎖数： $r = .84, p < .01$ ；最大行動連鎖数 $r = .90, p < .01$ ）とそれぞれ有意な負の相関が認められた。各 LC 年齢と物語り発話との間に有意な相関は認められなかった。

b) Time3 における象徴遊びの指標と Time4 における物語り発話の指標間の関連について

Time3 における象徴遊びの平均行動連鎖数と Time4 の物語り発話における接続助詞の種類数との間に有意な正の相関が認められた ($r = .76, p < .05$) (表 4-5)。また，テーマの生起頻度とエピソードの連鎖である「順序」の生起頻度の間においても有意な正の相関が認められた ($r = .80, p < .05$)。また，Time3 の言語理解と総合の LC 年齢は Time4 物語り発話の「繰り返し」の生起頻度と有意な負の相関が認められた（言語理解 LC 年齢 $r = -.84, p < .05$ ；総合 LC 年齢 $r = -.84, p < .05$ ）

c) 物語り発話内における指標間の関連について

Time3 時点における物語り発話の指標である発話数、自立語数、自立語の種類数とエピソードの生起頻度、エピソードに含まれない発話のひとつである「繰り返し」の生起頻度及びエピソードの連鎖である「順序」の生起頻度について、Spearman の順位相関係数を求めた（表 4-6）。その結果、発話数及び自立語数の多さと「繰り返し」との間に有意な正の相関があること（発話数 $r=.85, p<.05$ ；自立語数 $r=.76, p<.01$ ），自立語数と自立語種類数はエピソードの生起頻度と有意な正の相関があること（自立語数 $r=.88, p<.01$ ；自立語の種類数 $r=.81, p<.05$ ）が認められた。また、自立語数と自立語の種類数はエピソードの連鎖「順序」の生起頻度とも有意な正の相関があることが認められた（自立語数 $r=.76, p<.05$ ；自立語の種類数 $r=.77, p<.05$ ）。

Time4 についても同様にこれらの指標間について相関係数を求めたが、有意な相関は認められなかった。

表 4-4 Time3 における象徴遊びの各指標と物語り発話の各指標における相関係数 (ASD 群)

		テーマの 生起頻度	テーマのレパ ートリー数	象徴遊び行動 の平均連鎖数	象徴遊び行動の 最大連鎖数
自発性の側面	大人の促しの数	-.030	.106	-.500	-.375
	促し後の発話に含まれる自立語の数	-.571	-.623	-.273	-.294
	自発的に開始した発話中の自立語の数	-.411	-.623	.121	.0202
構造的側面	発話数	-.361	-.311	-.821**	-.882**
	自立語数	-.630	-.612	-.537	-.577
	自立語種類数	-.354	-.612	-.298	-.537
	JMLU	-.354	-.612	.059	-.059
	接続助詞の生起頻度	-.725	-.683	-.700	-.700
	接続助詞の種類数	-.725	-.683	-.700	-.700
発話内容の連鎖の側面	エピソードの生起数	-.756*	-.635	-.434	-.434
	繰り返し	-.423	-.641	-.845**	-.908**
	エピソードの順序の生起頻度	-.621	-.623	-.456	-.537

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-5 Time3 における象徴遊びの各指標と Time4 における物語り発話の各指標における相関係数 (ASD 群)

		Time3				
		テーマの生 起頻度	テーマのレパ ートリー数	象徴遊び行動の平 均連鎖数	象徴遊び行動 の最大連鎖数	
Time4	自発性の側面	大人の促しの数	-.429	.000	-.186	.186
		促し後の発話に含まれる自立語の数	-.268	.103	-.542	-.301
		自発的に開始した発話中の自立語の数	.268	.309	.361	.060
	構造的側面	発話数	.227	.427	-.250	-.041
		自立語数	.361	.623	.091	-.091
		自立語種類数	.397	.411	.060	-.060
		JMLU	.149	.206	.211	-.070
		接続助詞の生起頻度	.060	.311	.456	.395
		接続助詞の種類数	.109	.113	.766*	.633
	発話内容の連 鎖の側面	エピソードの生起数	.531	.623	.304	.111
		繰り返し	.330	.427	.093	.052
		エピソードの順序の生起頻度	.805*	.617	.331	.231

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-6 Time3における物語り発話の指標内の相関係数（ASD 群）

	エピソードの 生起頻度	繰り返し	順序
発話	.679	.857*	.666
自立語数	.889**	.767**	.763*
自立語種類数	.815*	.673*	.781*

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-7 Time4における物語り発話の指標内の相関係数（ASD 群）

	エピソードの 生起頻度	繰り返し	順序
発話	.362	.568	.311
自立語数	.027	.343	.082
自立語種類数	-.156	.132	-.200

* $p < .05$, ** $p < .01$

(2) TD 群

a) Time3 における指標間の関連について

象徴遊びの指標であるテーマの種類数は物語り発話における自発性の側面である「自発的に開始した幼児の発話に含まれる自立語の数」と有意な正の相関があった ($r=.84$, $p<.05$) (表 4-8)。また、象徴遊び行動の平均行動連鎖数および最大行動連鎖数は物語り発話の JMLU と有意な正の相関が認められた (平均行動連鎖数 $r=.77$, $p<.05$; 最大行動連鎖数 $r=.80$, $p<.05$)。全般的な言語発達との関連においては、言語表出と総合の LC 年齢はそれぞれテーマ数と有意な正の相関が認められた (言語表出 LC 年齢 $r=.84$, $p<.05$; 言語理解 LC 年齢 $r=.87$, $p<.05$) また、言語理解の LC 年齢は接続詞の生起頻度 ($r=.77$, $p<.05$) と種類数 ($r=.81$, $p<.05$) , エピソードの生起頻度 ($r=.75$, $p<.05$) , エピソードの連鎖の一つである「順序」の生起頻度 ($r=.75$, $p<.05$) とそれぞれ有意な正の相関が認められた。

b) Time3 における象徴遊びの指標と Time4 における物語り発話の指標間の関連について Time3 の象徴遊びにおけるテーマの生起頻度、テーマのレパートリー数、平均行動連鎖数は Time4 の物語り発話の自発性の側面である「促しの数」と有意な負の相関があった (テーマの生起頻度 $r=-.77$, $p<.05$; テーマの種類数 $r=-.78$, $p<.05$; 平均行動連鎖数 $r=-.85$, $p<.05$) (表 4-9)。また平均行動連鎖数は物語り発話の自発性の指標である「促し後の発話に含まれる自立語の数」との間に有意な負の相関が認められた ($r=-.77$, $p<.05$)。全般的な言語発達の指標との関連については、Time3 の言語表出、言語理解、コミュニケーション、総合の LC 年齢と Time4 の物語り発話における大人の促しの数と有意な負の相関が認められた (言語表出 LC 年齢 $r=-.87$, $p<.05$; 言語理解 LC 年齢 $r=-.79$, $p<.05$; コミュニケーション LC 年齢 $r=-.90$, $p<.01$; 総合 LC 年齢 $r=-.85$, $p<.05$)。

c) 物語り発話内における指標間の関連について

Time3 時点における物語り発話の指標である発話数、自立語数、自立語の種類数とエピソードの生起頻度、エピソードに含まれない発話のひとつである「繰り返し」の生起頻度、エピソードの連鎖である「順序」の生起頻度について、Spearman の順位相関係数を求めた (表 4-10)。その結果、Time3 においては発話数と「繰り返し」に有意な負の相関が認められた ($r=-.81$, $p<.05$)。Time4 においては、指標間に有意な相関は認められなかった (表 4-11)。

表 4-8 Time3 における象徴遊びの各指標と物語り発話の各指標における相関係数 (TD 群)

		テーマの生起 頻度	テーマのレパ ートリー数	象徴遊び行動の 平均連鎖数	象徴遊び行動の 最大連鎖数
自発性の側面	大人の促しの数	-.526	-.721*	-.579	-.224
	促し後の発話に含まれる自立語の 数	.036	-.115	.607	.700
	自発的に開始した発話中の自立語 の数	.742	.840*	.333	.112
構造的側面	発話数	.400	.560	.333	.205
	自立語数	.587	.655	.392	.324
	自立語種類数	.657	.720	.414	.372
	JMLU	.351	.116	.774*	.800*
	接続助詞の生起頻度	.336	.303	.205	.179
	接続助詞の種類数	.495	.458	.231	.136
発話内容の連鎖 の側面	エピソードの生起数	.463	.467	.270	.281
	繰り返し	.153	.451	.298	-.120
	無関連	.463	.467	.270	.281
	意味不明	-.526	-.721	-.579	-.224
	エピソードの順序の生起頻度	.036	-.115	.607	.882

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-9 Time3 における象徴遊びの各指標と Time4 における物語り発話の各指標における相関係数 (TD 群)

		テーマの 生起頻度	テーマのレパ ートリー数	象徴遊び行動の平均 連鎖数	象徴遊び行動の 最大連鎖数
自発性の側面	大人の促しの数	-.775*	-.785*	-.854*	-.678
	促し後の発話に含まれる自立語の 数	-.481	-.778*	-.504	-.272
	自発的に開始した発話中の自立語 の数	.527	.506	.504	.318
構造的側面	発話数	-.500	-.291	-.126	-.109
	自立語数	.201	.192	.178	.054
	自立語種類数	.101	.136	.144	-.009
	JMLU	.642	.578	.250	.018
	接続助詞の生起頻度	.317	.353	.200	.045
	接続助詞の種類数	.515	.458	.347	.291
発話内容の連 鎖の側面	エピソードの生起数	-.076	.080	.074	-.112
	繰り返し	-.206	-.240	-.356	-.314
	エピソードの順序の生起頻度	-.182	-.020	.018	-.141

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-10 Time3 における物語り発話の指標内の相関係数 (TD 群)

	エピソードの 生起頻度	繰り返し	順序
発話	-.269	-.819*	-.269
自立語数	.162	-.418	.162
自立語種類数	.635	.682	.635

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-11 Time4 における物語り発話の指標内の相関係数 (TD 群)

	エピソードの 生起頻度	繰り返し	順序
発話	-.188	.317	-.095
自立語数	-.299	.134	-.254
自立語種類数	.673	-.134	.613

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考 察

第4章2節においては象徴遊びの連鎖と物語り発話との関連を明らかにするために、①Time3時点における象徴遊びのテーマの生起頻度およびレパートリー数、象徴遊び行動の平均及び最大行動連鎖数と、物語り発話の各指標間の相関係数、および、②Time3時点における象徴遊びのテーマの生起頻度およびレパートリー数、象徴遊び行動の平均及び最大行動連鎖数と、Time4における物語り発話の各指標間の相関係数を求めた。その結果、ASD群とTD群の結果に差異があることが認められた。

TD群においては以下の2点が示唆された：①Time3時点で象徴遊び行動を長く連鎖させる児ほど、物語り発話において一発話の長さが長い、②象徴遊び場面において、様々なテーマを生起させる児や象徴遊び行動を連鎖させることが多い児ほど、同時点における物語り発話において自発的に物語を生成する。また、後の物語り発話でも自発的に物語を生成する。Westby (2002) は幼児が遊びを連鎖させていくにつれて接続詞を使い、計画性のある語りを発達させていくと述べ、象徴遊びの連鎖と語りの関連性について述べているが、本研究においてもTime3の時点においては象徴遊びの連鎖と物語り発話のJMLUとの間に正の相関が認められた。McCune (2008) は、単一の行為が結合し系列化されたプランのある象徴遊びとMLUの関連について論じ、その背景にある要因として表象的な結合ができる能力を挙げており、本研究は、同様の結果を示したと言える。一方で、Time3の象徴遊びの連鎖とTime4のJMLUとの間に有意な相関は認められなかった。宮田・大伴(2020)はTD幼児を対象にMLU_wと文法発達指標との関連について検討を行い、MLU_w2.0以降は文法指標との関連が失われていったと報告している。本研究においては、TD児の物語り発話におけるJMLUの中央値はTime3においては2.2、Time4においては4.0であり、Time4においてはJMLUが増加している。Time4においては一発話あたりの自立語数が長くなり、宮田・大伴(2020)が示すように言語発達の指標としての敏感性が失われていったため、象徴遊びの連鎖との関連性が低下していったと考えられる。

また、象徴遊び行動の連鎖と物語り発話における発話内容の連鎖の側面である、エピソードの生起頻度や「順序」の生起頻度との間には有意な関連がないことは、仮説とは異なる結果であった。Nicolopoulou (2007) は役割をもったふり遊びにおいて、幼児はプロットを計画する前に遊び始めるが、物語り発話は一貫性をのあるプロットを構成してから発話をするという認知的基盤の違いを指摘している。本研究においては、Nicolopoulou (2007) よりも前の段階の象徴遊びと物語り発話について検討を行ったが、物語り発話におけるエピソードの生起頻度や連鎖といった観点においては同様の結果が得られたと言える。一方で、象徴遊び行動の連鎖は、物語り発話における「自発的に開始した幼児の発話

に含まれる自立語の数」と正の相関があり、「大人の促しの数」と負の相関があった。

「大人の促しの数」は物語り発話において、幼児の発話が止まった際に、大人が次の物語の生成を促した数であり、「大人の促しの数」の少なさは物語り発話において自発性が高いことを示す。このように象徴遊び行動の連鎖は物語り発話において自発的に物語を生成する自発性の側面との関連があった。象徴遊びのテーマの生起頻度や種類数、象徴遊びの行動連鎖数は、自由遊び場面において、幼児が自発的に出来事を象徴化し、行為を連鎖させる実行機能と関連すると考えられる。物語り発話においても自発的に物語を生成することの背景には、日常生活場面の出来事を取り入れて象徴化する力や、実行機能の発達に関連していると考えられる。このようにどちらも同様の認知的な基盤を有することから象徴遊びの連鎖は物語り発話の自発性の側面と関連があったと考えられる。

ASD 群においては、以下の4点が示唆された：①Time3において象徴遊びのテーマを多く生起させる幼児ほどエピソードの生起頻度が少ない、②Time3において象徴遊びを長く連鎖させる児ほど、物語り発話において発話数が少なく、エピソードからの逸脱を示す「繰り返し」の生起頻度が少ない、③Time3時点において象徴遊び行動を長く連鎖させる児ほど後の物語り発話において接続助詞を豊富に使う、④Time3時点で象徴遊びの際にテーマを多く生起させる児ほど、後の物語り発話において発話内容を連鎖させる。

ASD 群の Time3 の時点における象徴遊びのテーマの生起頻度や行動連鎖数は、仮説に反し、物語り発話の発話数やエピソードの生起頻度と負の相関が認められた。Time3 時点では、ASD 群は物語り発話において、発話の多い児ほど、「繰り返し」の生起頻度も多く、エピソードからの逸脱が見られた。このように Time3 時点においては、物語り発話における発話の多さは発話内容の精緻化と関連しないことが示された。このようなことから、ASD 群においては象徴遊びのテーマ数や連鎖数と、物語り発話の指標との間に負の相関があったと考えられる。Time4 においては「繰り返し」が少ない発話になっていった。このことにより、想定された通り、Time3 におけるテーマの生起頻度や象徴遊び行動の連鎖と、Time4 における物語り発話の接続助詞や「順序」の生起頻度と相関が認められるようになったと考えられる。TD 群は発話が多い児ほど物語り発話においてエピソードの生起頻度やエピソードの連鎖である「順序」の生起頻度が多かった。このような ASD 幼児と TD 幼児の初期の物語り発話における質的な違いが、両群の象徴遊びの連鎖と物語り発話との関連の仕方に差異を生じた背景にあると考えられる。これまでの ASD 児を対象とし、象徴遊びと言語発達との関連については検討した研究においては、象徴遊び行動と言語の出現時期に焦点を当て、両者の関連について論じている研究が多かった (e.g. 小山, 2001)。自発的な象徴遊び場面において、象徴遊びのテーマの生起頻度やレパートリー

数、行動連鎖数に焦点を当て量的に評価をした本研究においては、Time3 時点における象徴遊び行動の指標が、約 8 か月後の物語り発話における発話内容の連鎖を予測することが示唆された。

両群において、Time3 の象徴遊びの各指標と Time4 における発話連鎖の各指標との関連の仕方について群間に違いがあった。TD 群は象徴遊びの各指標と物語り発話の自発性の側面との相関があり、ASD 群は象徴遊びの指標と物語り発話のエピソードの生起頻度と連鎖といった発話内容の連鎖との相関が認められた。ASD 群において、象徴遊び行動の連鎖が物語り発話の自発性の指標との間に関連がなかった理由として、2 つの指標の評価の仕方の違いが挙げられる。象徴遊びの指標は、課題場面ではなく、自由遊び場面における幼児の自発的な遊びを観察し評価を行った。物語り発話においては「お話し作り課題」といった課題場面における物語り発話の評価した。ASD 児は有しているスキルを使用しにくいという報告がある (Sigman & Ungerer, 1981)。このような評価方法の違いが影響したことにより、象徴遊び行動の連鎖と物語り発話の自発性の側面との間に関連がなかったと考えられる。

また、Time3 のテーマの生起頻度と Time4 の物語り発話のエピソードの生起頻度やエピソードの「連鎖」といった発話内容に関する指標は ASD 群のみにおいて正の相関があった。この違いの背景には象徴遊びにおける「テーマの生起頻度」の群間の質的な違いがあると考えられる。第 2 章の検討の結果、ASD 群は TD 群と比べて、象徴遊び行動の連鎖数の増加に制約をもつことが明らかになった。TD 群においては、Time3 において、同一のテーマ内で象徴遊びを長く連鎖させる児がいたことから、テーマの生起頻度の多さが必ずしも象徴遊びの連鎖の長さとは結びつくわけではない。一方で、ASD 群においては象徴遊び行動の連鎖が TD 群よりも短いために、象徴遊びを多く行う幼児ほどテーマの生起頻度が多いと考えられる。このような質的な違いが、Time3 における象徴遊びのテーマの生起頻度と Time4 におけるエピソードの生起頻度や連鎖との関連の仕方に群間の違いがあったと考えられる。

本研究の結果をまとめると、①両群で関連する時期に違いはあるが、象徴遊び行動の連鎖は、JMLU や、一発話内で関連する発話をつなぎ、内容を連鎖させる役割をもつ接続助詞の種類数との関連がある、②ASD 群においては、テーマを多く生起させる児は、後の物語り発話におけるエピソードの連鎖数が多い、③TD 群においては、象徴遊びのテーマの生起頻度やレパートリー数、象徴遊び行動の連鎖は、物語り発話における自発性の側面との関連があることが挙げられた。本研究においては、FN 以前の発達段階に焦点を当てて分析を行った。FN を検討した研究よりも低年齢の児を対象としているため、幼児の発話

自体が少ない時期であった。今後は発話データを増やすためにより参加児を増やし検討を行う必要がある。

第3節 象徴遊び場面における自閉スペクトラム症児と定型発達幼児の自発的発話に関する事例的検討

1. 問題と目的

第4章1節においては、養育者への質問紙調査による獲得語彙を対象とし、第2節においては「お話し作り」課題における物語り発話を対象とし、それぞれ象徴遊びの各指標との関連について検討した。第3節においては、象徴遊び場面における幼児の自発的な言語使用に焦点を当て、両群の象徴遊びの発達と自発的な言語使用についてより事例的に比較検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 対象児

第2章の象徴遊び場面の観察では、幼児のひとり遊び場面を対象としたため、発話を伴わずに遊ぶ児もいた。そのため、本研究では、Time1, Time2, Time3の全ての時点を合わせた発話がある児を対象とした。ASD群は該当する児がASD-A児, ASD-E児, ASD-F児の3名であったため、TD群も発話が多い児から3名(TD-C児, TD-E児, TD-F児)抽出し分析の対象とした。参加児のプロフィール及びASD群のSRS-2のT得点を表4-12, 表4-13に示す。

表 4-12 参加児のプロフィール

対象児	Time 1 CA	Time 1 DA	Time1 LC 年齢 表出	Time1 LC 年齢 理解	Time1 LC 年齢 コミュ ニケー ション	Time1 LC 年齢 総合	Time 2 1 CA	Time3 CA	Time3 LC 年齢 表出	Time3 LC 年齢 理解	Time3 LC 年齢 コミュ ニケー ション	Time3 LC 年齢 総合
ASD-A	30	30	28	32	25	28	37	44	48	45	38	44
ASD-E	35	32	29	36	31	32	41	47	41	45	40	42
ASD-F	40	44	35	40	40	38	46	51	56	61	63	59
TD-E	39	-	33	33	34	44	51	52	61	50	55	55
TD-G	36	-	39	38	37	42	49	59	59	53	58	58
TD-H	33	-	36	29	32	39	44	41	45	48	44	44

表 4-13 ASD 群 3名の SRS-2 の T 得点

参加児	Time1 SRS-2 SCI の T 得点	Time1 SRS-2 RRB の T 得点	Time 1 SRS-2 総合の T 得点	ASD の程度
ASD-A	78	74	79	重度
ASD-E	79	69	78	重度
ASD-F	56	71	60	軽度

(2) 象徴遊びの指標

象徴遊びの指標は象徴遊び行動の生起頻度とレパートリー数，テーマの生起頻度とレパートリー数，平均及び最大行動連鎖数であった。各指標の定義は第2章と同一であった。

(3) 発話の指標

a) 発話の構造的側面

5分間の遊び場面で得られた発話を対象に，発話数，自立語数，自立語種類数を算出した。各指標の定義は第3章と同一であった。

b) 発話内容の連続性の側面

発話及び述部ユニットを単位に，発話内容の連続性の分析を行った。連続している発話について述部ユニットごとにそのつながり方「順序」「並列」「因果」の生起頻度を算出した。「順序」「並列」「因果」の定義は第3章節と同一であった。なお，連続している発話は，一つの発話の終了後，30秒以内に開始された発話同士を示す。「順序」「並列」「因果」について生起頻度を算出した。

c) 発話の機能的側面

幼児の発話を，①「自身の遊びや行動の説明」，②人形のセリフや物語のナレーションといった「プレイトーク」，③物の場所や名称を尋ねる，又は物の名称を言う「設定」，④「遊びと関連のない発話」の4つに分類し，生起頻度を算出した（表4-14）。

表 4-14 発話の機能的分類の定義

分類	定義	例
遊びや行動の説明	自身の遊びや行動の説明	ミニチュアのフライパンを振りながら「お料理します」
プレイトーク	人形のセリフやナレーション	・人形を動かしながら「おはよう」 ・「その時男の子が言いました」
設定	物の場所を尋ねる 物の名称を言う	・「トラックはどこ」 ・地図を指差しながら「工事現場」
遊びと関連のない発話	遊びとは無関連な内容の発話	・「魚べい行く？」（昼食について母に尋ねる） ・「今お外白？」（外が暗くなっていないか母に尋ねる）

(4) 分析方法

群ごと、参加児ごとに各指標の生起頻度についてグラフ化した。

3. 結果

(1) 遊び場面における発話の構造的側面

TD 群においては象徴遊びの生起頻度とレパトリーが増加し、遊び場面において表出される語彙も増加した (図 4-2)。一方 ASD 群には個人差が見られた (図 4-1)。ASD-A 児は SRS-2 における総合 T 得点は 79 であり ASD の程度は重度の範囲 (76 以上) である児で、象徴遊び行動の生起頻度とレパトリー数は時間経過とともに増加し、発話数や自立語数、自立語の種類数にも増加が見られた。ASD-E 児も SRS-2 における T 得点は 78 であり ASD の程度は重度の範囲である児で、象徴遊び行動の生起頻度とレパトリー数は時間経過と共に増加をした。一方で、遊び場面における発話数や自立語数、自立語の種類数は増加が見られず、象徴遊び行動の生起頻度やレパトリー数の増加に伴う変化は認められなかった。ASD - F 児は SRS-2 における ASD の程度は 60 と軽度の範囲 (60-65) であるが、RRB (興味関心の限定や反復的行動) の T 得点は 71 と高い児であった。ASD-F 児は Time2 においては象徴遊びでなく、積み木を積むといった物の操作をする遊びを行ったが、Time1、Time2 では発話数が多かった。



図 4-1 ASD 群の象徴遊び行動及び遊び場面における使用語彙の変化

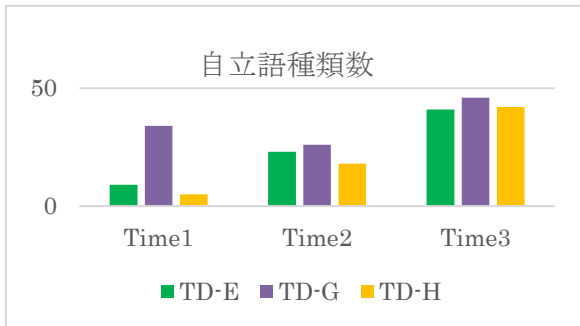
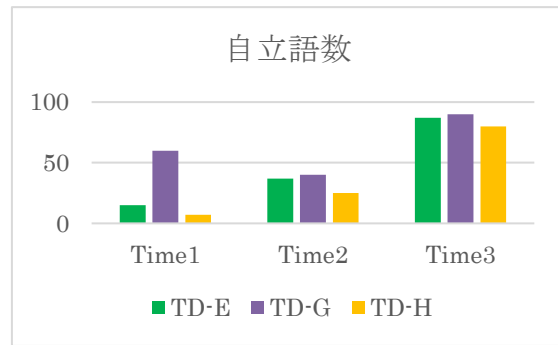
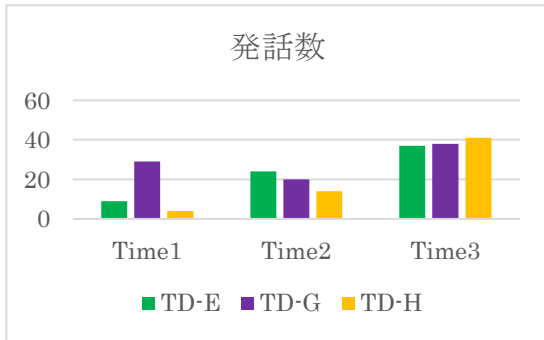
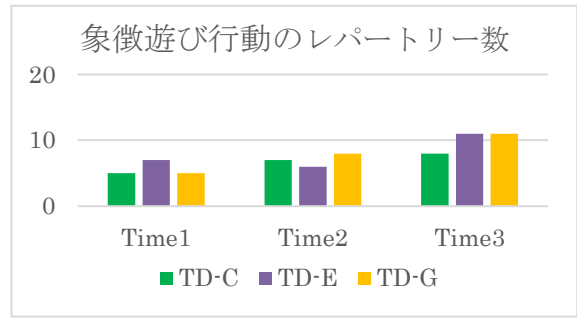
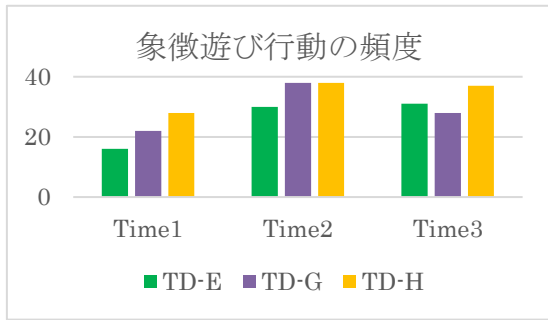


図 4-2 TD 群の象徴遊び行動及び遊び場面における使用語彙の変化

(2) 象徴遊び行動テーマ数と遊び場面における発話内容の連続性

TD 群においては象徴遊びの連鎖が最も多い Time3 の時点において、発話を時間的な順序性で連鎖する「順序」の生起頻度が最も多かった(図 4-4)。遊びの行動に発話が伴うことで、発話内容が連鎖していく様子が観察された。また、「並列」や「因果」で発話内容を連鎖させる児も観察された(表 4-15)。

ASD 群では象徴遊び場面において、発話内容を連鎖させずに、単発の発話内容となることが多かった(図 4-3)。ASD-A 児と ASD-F 児は象徴遊びの連鎖が少なく、また増加も認められず、遊び場面における発話の連鎖においても Time3 で「並列」での連鎖が見られる程度であった。ASD-E 児は象徴遊びの連鎖数が時間経過と共に増加をしており、遊び場面の発話の連鎖「順序」の生起頻度も ASD 群 3 名の中で最も多いが、時間的経過と共に遊びの連鎖が増加しても、発話の連鎖「順序」は時間的経過に伴う増加が見られなかった。

表 4-15 発話内容の連鎖の例

ASD-A 児	順序	- (生起なし)
	並列	「白菜冷蔵庫にしまいます。これもしまいます。バナナもしまいます。ネギもしまいます。トマトもしまいます。」 (Time3)
	因果	-
ASD-E 児	順序	「できた。座って、食べる。」 (Time1)
	並列	-
	因果	-
ASD-F 児	順序	-
	並列	「いっぱいはいる。これもはいった。」 (Time3)
	因果	-
TD-E 児	順序	「ままにご飯つくる。蓋しめて。パスタができるよ」 (Time2)
	並列	「とうもろこしさあ、スープ入れたよ。とうもろこしさあ、パスタに入れてさ。明太子もいれてさあ。」 (Time2)
	因果	「ここに袋あるから、入れられる。」 (Time3)
TD-G 児	順序	「ジェットコースターに乗って、探しに行こう。」 (Time1)
	並列	「お母さんこれ焼いて。僕はこれ焼いてる。」 (Time2)
	因果	「喉渴いたっていうから、オレンジを焼くよ」 (Time3)
TD-H 児	順序	「食べたら、公園であそぼう」 (Time3)
	並列	「おやつは公園の後に。お昼寝も公園の後」 (Time3)
	因果	-

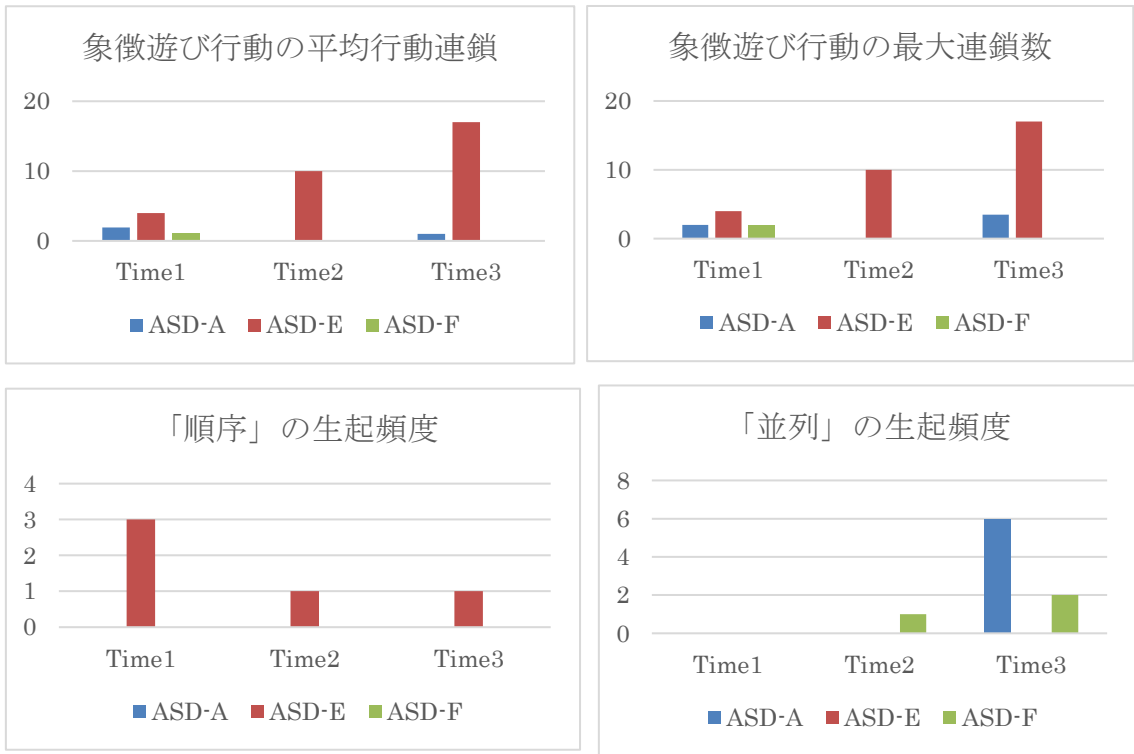


図 4-3 ASD 群における象徴遊びのテーマ及び連鎖の指標と遊び場面における発話内容の連鎖

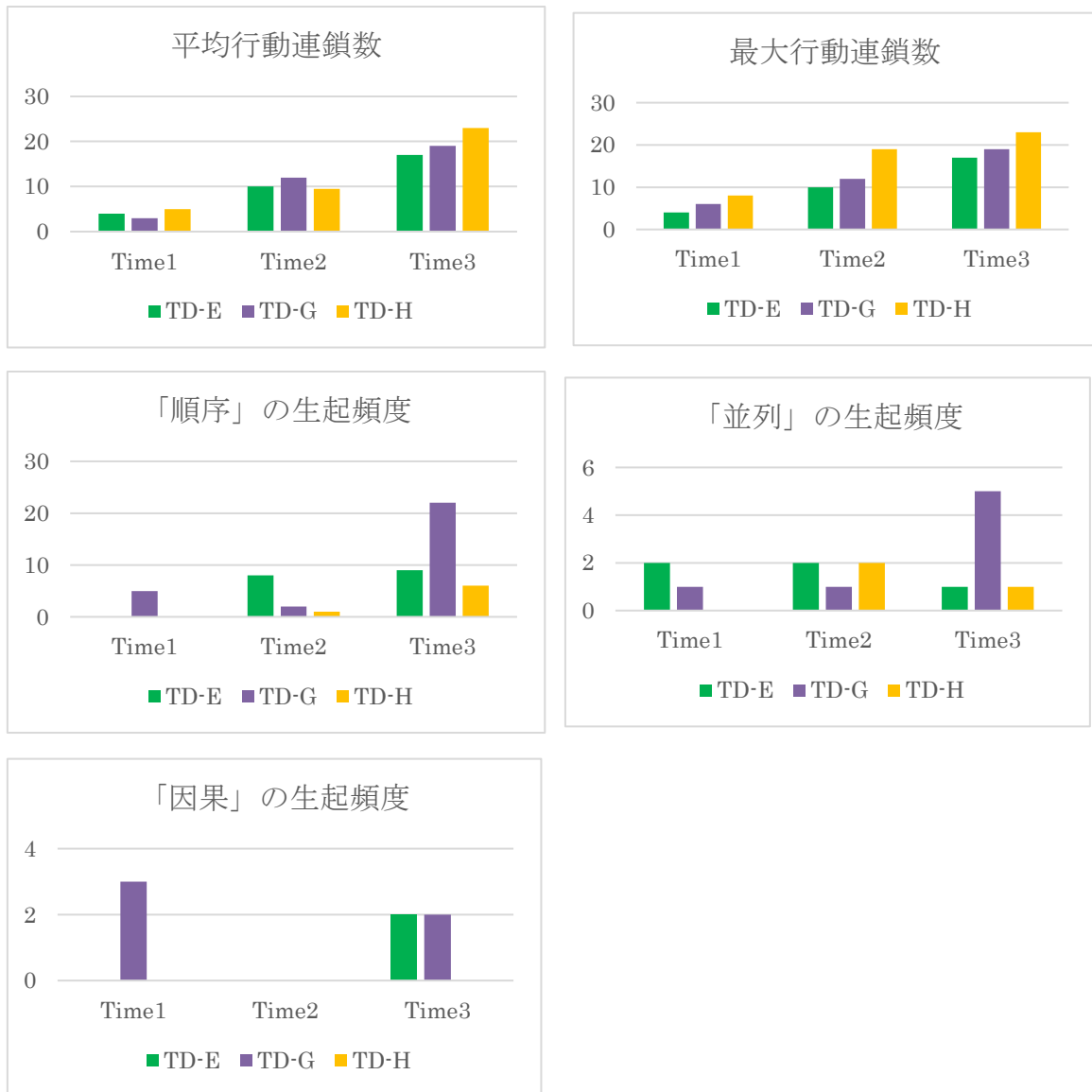


図 4-4 TD 群における象徴遊びのテーマ及び連鎖の指標と遊び場面における発話内容の連鎖

(3) 遊び場面における発話の機能的側面

①「自身の遊びや行動の説明」、②人形のセリフや物語のナレーションといった「プレイトーク」、③物の場所や名称を尋ねる、又は物の名称を言う「設定」、④「遊びと関連のない発話」の4つに分類し、生起頻度を算出した。

TD群は、「自身の遊びや行動の説明」が最も多かった(図4-6)。また、Time3においては2名の児が「プレイトーク」を生起させるなど、物語り発話様の発話が見られた。

ASD群においても、「自身の遊びや行動の説明」が最も多かったが、TD群よりも「設定」や「遊びと関連の無い発話」の発話に占める割合が多かった(図4-5)。

ASD-A児は時間経過と共に発話数自体は増加していたが、発話内容は「自身の遊びや行動の説明」よりも、単に物の名称を言う(例:地図に書かれた電車を見て、「電車」と言う)「設定」や「遊びと関連の無い発話」が多くを占めていた。ASD-E児はTime1と2において発話数が多かったが、「自身の遊びや行動の説明」の他に「設定」や「遊びと関連の無い発話」も含まれていた。

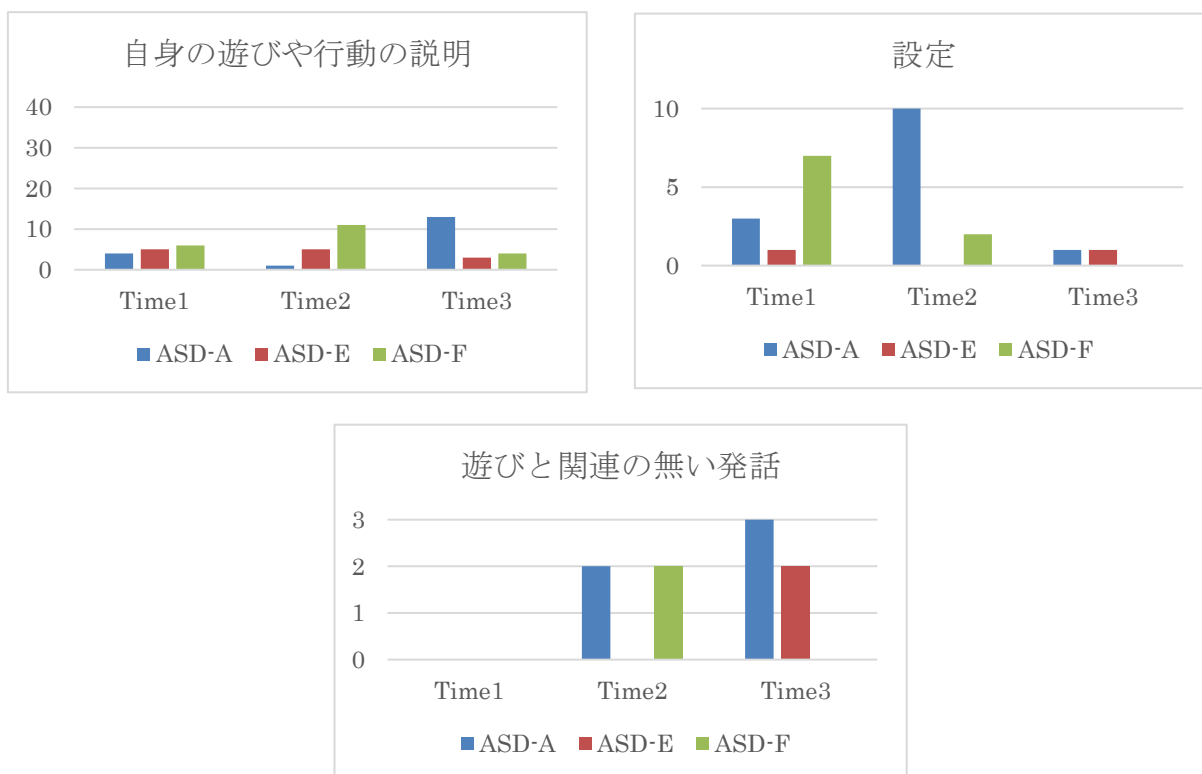


図 4-5 ASD 群の遊び場面における発話の機能的分類

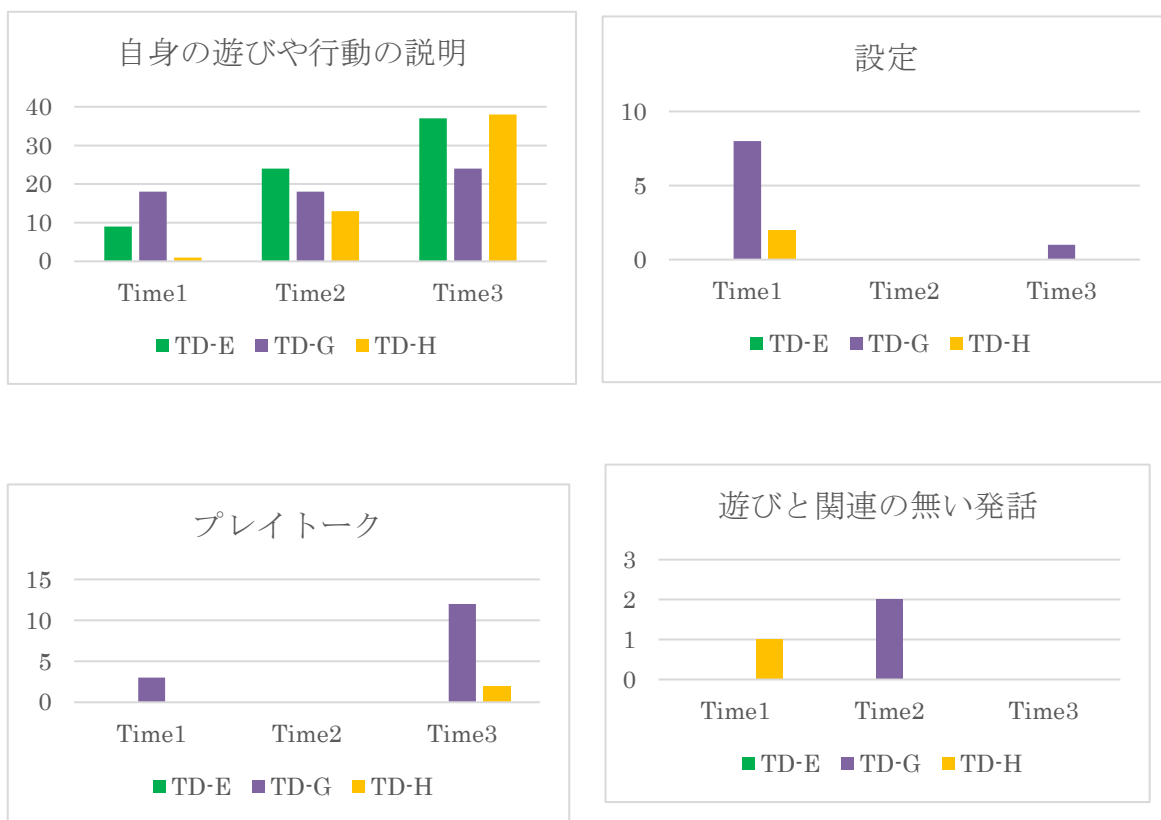


図 4-6 TD 群の遊び場面における発話の機能的分類

4. 考 察

第3節では、象徴遊び場面における幼児の自発的な発話について、ASD群とTD群に質的な違いが認められるかを明らかにするために事例的な検討を行った。

TD児3名においては時間経過と共に、象徴遊び行動の生起頻度やレパトリー数、連鎖数の増加に伴って発話数が増え、発話同士を「順序」でつなぐ児が増えていった。また、発話の機能的分類においては、自身の遊びや行動について説明をする児が最も多かった。Time3においては3名中2名が物語り発話様の「プレイトーク」に分類される発話を伴いながら遊びを行っていた。象徴遊びの場で現実経験と結びついた予測やプランニングといった認知発達が促進されると小山（2012）が述べているように、TD児においては、幼児の自発的な象徴遊びの中で、行動を連鎖させ、発話を伴わせることでつながりのある発話が増えていく過程が見られた。

一方でASD群においては、象徴遊び行動と語彙数との関連について個人差が大きいこと、遊び場面では発話内容の連鎖が少ないことが事例から明らかにされた。また発話の機能的分類においても、ASD幼児は辞書的に玩具の名称を言うといった「設定」や「遊びとは関連のない発話」をする傾向があることが示され、ASD幼児の遊び場面において、遊びの内容自体に言及する割合が少ないことが示唆された。

第3章2節にて検討を行った「お話し作り課題」場面における物語り発話の発達過程は、発達初期の段階でASD幼児はエピソードの生起頻度や連鎖がTD幼児と比べて少ないが、徐々に差がなくなる過程が認められた。一方、3節で検討した自由遊び場面における自発的な発話においてはASD幼児とTD幼児の間に上記で述べたような質的な違いが認められた。実際の象徴遊びは養育者を含む他者との相互交渉場面で行われるが、遊びの中で養育者が幼児の行動や発話に対してフィードバックを与えたり、遊びや発話を高次化させたりする足場かけを行っている。象徴遊び場面におけるASD群とTD群の自発的な発話の質的な違いは、相互交渉の観点からみると、後の象徴遊びやプランニングの発達に影響を与えることも考えられる。今後は養育等の相互交渉や、他児との共同で行う象徴遊びに焦点をあてた検討も必要であろう。

第5章 総合考察

本章では、まず、4章までの結果のまとめと考察（第1節）を行い、その後に本論から得られた知見から、象徴遊びのアセスメントや介入法について考察を行う（第2節）。最後に本論文の課題と今後の展望について述べる（第3節）。

第1節 結果のまとめと考察

本論文の目的は知的発達・言語発達ともに遅れのない初回評価時2歳半～3歳半のASD幼児とTD幼児を対象とし、以下のことを明らかにすることであった。

- (1) 象徴遊びのレパートリーの広がりや連鎖の発達過程を明らかにすること
- (2) 幼児の語彙の獲得や物語り発話の発達過程を明らかにすること
- (3) 象徴遊び行動のレパートリーや連鎖の発達と、獲得語彙や物語り発話といった言語発達との関連を明らかにすること

象徴遊びの発達過程においては、TD群は象徴遊び行動のレパートリー数や象徴遊び行動の連鎖が年齢とともに増加していくが、ASD群は増加に制約があり、徐々に違いが顕在化する過程が認められた。その背景として、ASD幼児は日常場面の出来事を他者の視点から捉え象徴化するといった能力や、出来事のスク립トを結合させて一連の大きな流れを作る力に制約があることが挙げられる。

獲得語彙については、ASD群とTD群は語彙獲得の総量に差は無いが、一部の意味的カテゴリーにおいて獲得語彙が少ないことが示され、背景として「限定された興味関心」や共同注意の困難さといったASDの特徴がある可能性を指摘した。

物語り発話の発達過程においては、観察初期の3歳台のASD幼児は内容的な広がりを示すエピソードの生起頻度や、エピソードの連鎖である「順序」の生起頻度がTD幼児よりも少ないことが示されたが、時間経過とともに群間の差がなくなり、発達過程は類似していることが明らかにされた。

象徴遊びと言語発達の関連について、象徴遊びの連鎖と物語り発話の関連については、ASD群とTD群で関連する時期は異なるが、両群ともに、象徴遊びの連鎖と物語り発話の連鎖との間に関連が認められた。

象徴遊び行動の頻度やレパートリー数と獲得語彙数においては、TD群は、象徴遊び行動が豊富な児ほど獲得語彙が豊富であるが、ASD群は象徴遊び行動と獲得語彙の間に関連

が認められなかった。この結果の背景として、自発的な遊びを評価した象徴遊びと出現の有無を質問紙にて評価した獲得語彙では評価方法が異なるため、関連が認められなかった可能性が挙げられる。

第2章の象徴遊びの連鎖の発達過程においては、両群の違いの背景として ASD 幼児は日常場面の出来事を他者の視点から捉え象徴化するという能力や、出来事のスク립トを結合させて一連の大きな流れを作る力に制約があるという特性が関連していることを挙げた。一方で、自発的な象徴遊び場面において、ASD 幼児が持っている象徴遊びのスキルを表出しなかったという可能性もある。持っているスキルを自発的に表出することが困難である (Ungerer & Sigman, 1981) という ASD 幼児の自発的な特性や、象徴遊びよりも物の操作に注意が向くという興味関心の限定といった特性も、象徴遊びにおける群間の発達過程の違いに寄与したと考えられる。このようなことから、自発的な象徴遊びと養育者が出現の有無をチェックした獲得語彙において関連が認められなかったと考えられる。大人の指示で象徴遊びを行うといった課題場面における評価や、模倣により象徴遊びを促す評価を行った場合、両者に関連が認められる可能性がある。

本研究の第4章3節においては、象徴遊び場面における幼児の自発的な発話に焦点をあて、事例的に ASD 群と TD 群の比較を行った。TD 群は年齢の上昇に伴い、自分の遊びや行動に関する発話を連鎖させて表出したり、人形にセリフを言わせたりナレーションをするといった物語り発話様の表出が増えた。一方 ASD 群は、遊び場面において、辞書的に物の名称を言うことや、遊びに関連の無い発話が多く、遊び場面における自発的な発話に TD 群との質的な違いがある可能性が示唆された。このような象徴遊び場面における発話の質的な違いは、相互交渉場面において、養育者から受けるフィードバックの違いをもたらす可能性がある。自発的な遊び場面において、遊びの内容に関する発話や人形のセリフ等の物語り発話のような表出がある幼児の場合、相互交渉のパートナーは自然と幼児の発話に対して幼児の提示したスク립トにフィードバックを行いながら拡張したり、スク립トのつながりを促すような発話や遊びの提示を行ったりする足場かけを行っていると考えられる。一方、ASD 幼児は、象徴遊びにおいて出来事を一場面で切り取らず全体の大きな流れとして把握することや、出来事同士をつなげ遊びの流れを作る力の制約により、象徴遊びの連鎖自体の発達に制約があることが示された。また、遊び場面における自発的な発話においては、遊びの内容ではなく、物の名称を言うのみであったり、遊びとは関連の無い話をしたりすることが多いことが明らかにされた。このような違いにより、ASD 幼児においては、遊び場面において TD 幼児よりも相互交渉の相手からの言語的なフィードバック

が得られにくいことが推測される。本研究からは、相互交渉を行う側の大人は言語入力や出来事のつながりの提示といった工夫を行うことの必要性が示された。

第2節 象徴遊びを用いた発達支援

象徴遊びは、言語発達や社会性の発達との関連が指摘されてきていることから、ASD 幼児を対象とした発達支援の場においても、アセスメントや介入法として象徴遊びが活用されてきている。本論文から得た知見について、既存の発達支援と合わせて考察する。

1. 象徴遊びのアセスメント

現存する象徴遊びを評価するアセスメントの一つに Lowe & Costello (1988) の Symbolic Play Test (SPT) がある。SPT は半構造化された場面において象徴遊びのスキルを評価する検査である。4つの玩具セットを用意し、いくつかの観察項目（例：人形をベットに寝かせる）を通過しているかどうかについてチェックし評価を行う。また日本語版自閉症診断観察検査 第2版 (ADOS-2) (黒田・稲田, 2015) においても観察項目のひとつに象徴遊びの評価がある。皿、スプーン、積み木、毛糸、人形等が用意された自由遊び場面においてミニチュアを使用した遊びや、見立て、受動的他者や能動的他者を設定した遊びが出現するかどうかをチェックする。これら2つの評価においては、物の使用の観点、物と人との関係性の観点の評価が中心である。一方、本研究で対象とした、象徴遊びの連鎖を評価することは、日常場面における一連の出来事の流れ（スクリプト）（例：料理をして、ご飯を並べて、食べて、片付ける）をどの程度理解し、象徴化する力を持っているのか、また、そのスクリプトを結合させて物語りを組み立てる力をどの程度有しているかを評価することができると考えられる。本研究においては、TD 幼児において象徴遊びの連鎖は物語り発話の指標との関連が認められた。また ASD 幼児においても、観察後期において象徴遊びの連鎖は物語り発話の指標との関連が認められた。このように象徴遊びの連鎖と物語り発話との関連も認められることから、象徴遊びの連鎖の評価は言語発達にもかかわる認知的発達の水準を知る手がかりになると考えられる。したがって、象徴遊びの連鎖の観点も含むアセスメントが求められる。

また、上記の SPT や ADOS-2 は象徴遊びの出現の有無を評価するものである。幼児の象徴遊びは日常の場では他者との相互交渉の場でも行われ、幼児の行動や発話に養育者からのフィードバックが与えられたり、養育者からの遊びの提案を共有したりすることで遊びが発展していく。本論文の第2章の結果からは、ASD 幼児は象徴遊びのスキルよりも、レパートリーの広がりや制約を有することが明らかにされた。象徴遊びのレパートリーが多い幼児ほど、他者との相互交渉によって、言語面・認知面に働きかける様々なフィード

バックが得られたり、遊びのパートナーと共に、様々な場面のスクリプトをつなぎ遊びを発展したりする。そのことが、小山（2001）が指摘するように、日常生活場面におけるスクリプトの理解やスクリプトをつなぎプランニング等の発達に繋がると考えられる。そのため、象徴遊びのスキルの出現の有無のみでなく、自発的な象徴遊び場面における象徴遊び行動のレパートリーや連鎖についても、象徴遊びのスキルと共に評価する必要があると考えられる。

また、ASD 幼児の言語発達の評価についても様々な観点から評価を行う必要がある。本論文の第3章の結果からは、ASD 幼児は獲得語彙の質問紙や課題場面における物語り発話においては、TD 幼児との差が認められなかった。一方で、象徴遊びとの関連や、遊び場面における自発的な言語使用については TD 群との質的な違いがある可能性が示唆された。上記で述べたように、幼児期においては、日常生活場面における他者との相互交渉の中で言語発達が促されていく過程がある。実際の日常場面では、子どもは興味を持っている内容や遊びの流れの中で自発的にストーリーを語り、大人がそれに応答していくことにより展開されていく。今後はより自然な状況における語りを評価する必要がある。

2. 象徴遊びを用いた介入法

ASD 児を対象とした介入、象徴遊びを介した発達支援は、応用行動分析を活用した介入、自然な文脈を活用した介入、ビデオモデリングによる介入など、様々な研究がなされている。（e.g. Ingersoll & Schreiman, 2006 ; Paterson & Arco, 2007）。Kasari ら（2012）は3～4歳児を対象に自然な文脈を活用し共同注意と象徴遊びへの介入研究を行った。介入の5年後のフォローアップデータからは、初期の遊びのスキルが5年後の言語スキルと関連があることを示している。このような介入研究では、象徴遊びの発達を促すことは単に象徴遊びのスキルの獲得を目的とすることだけでなく、関連する認知や言語・社会性の発達を促すことが目的とされている。先行研究で扱われている象徴遊びのスキルは、ミニチュアを使用した遊びや見立て遊びといった発達初期の段階の象徴遊びに焦点をあてた研究が多い。象徴遊びの連鎖は、スクリプトの理解やプランニングを促進すること、物語り発話の指標との関連性等、認知や言語の発達との関連があることが示唆されている。このことから、今後は象徴遊びの連鎖に焦点をあてた介入を行うことも必要であると考えられる。

遊びの連鎖に関連する介入研究として Paterson & Arco（2007）が挙げられる。この介入研究では9歳の児童を対象とし、ビデオモデリングを用いてスクリプトのある象徴遊びを促す介入を行ったところ、象徴遊びのスクリプトが増えたことを報告している。この研究ではスキルの維持はできたが、般化が困難であったことが課題として挙げられている。

本論文では、幼児の発話内容の連鎖は、課題場面では ASD 幼児と TD 幼児との間に差は認められないが、実際の遊び場面における発話内容の連鎖においては質的に差異がある可能性が示唆されている。Paterson & Arco (2007) の研究においては、指導場面と日常的な遊び場面との乖離があったことが、般化が困難であった可能性として考えられる。象徴遊びの連鎖が物語り発話の発達を促すことを鑑みると、象徴遊びの連鎖への介入はビデオモデリングのような課題場面ではなく、文脈に沿った介入が必要であろう。

また、日常場面における養育者との相互交渉の文脈を活用した言語発達支援法 (e.g. Mahone, & Macdonald, 2007) では、養育者に対し、言語入力の方法や共同注意を基盤とした関わり方などを教示している。このような支援法においても、語彙や語連鎖の獲得、模倣や共同注意といった乳幼児期の初期の発達に焦点をあてたものが多い。養育者への教示を対象とした介入においても、スクリプトの提示や、スクリプトのつながりを促す言語入力の方略といったより発展的な内容も含まれていくことで、初期の象徴遊び・言語発達段階から、大きな流れのある遊びや語りへの移行の足場かけとなると考えられる。

第 3 節 本研究の課題と今後の展望

本研究は初回評価時 2 歳半から 3 歳半の知的発達・言語発達に遅れのない ASD 幼児と TD 幼児を対象とし、縦断的な検討を行った。

対象児は ASD 群 10 名、TD 群 10 名と各群とし、群間の比較を行った。ASD 群においては、SRS-2 において分類された ASD 幼児の程度は個々によって様々であった。対象児が 10 名であり、ASD 幼児をひとつの群のまとまりとして分析を行ったため、自閉症の程度と象徴遊びや言語発達の発達過程との関連については検討しなかった。しかし、ASD 幼児の中での特性の強さといった個人差は象徴遊びの発達過程や言語発達に影響を与えている可能性がある。今後は ASD 幼児の個人差に着目した検討も必要であろう。

また、観察後半においては、参加児は幼児教育が始まる年齢にあたり、象徴遊びは、同年齢の他児との相互交渉に発展していく。共同で行う象徴遊びにおいては、表象しているスクリプトを他児と共有したり、他児の発信を受け止めて、出来事の流れを柔軟に変えたり、発展させたりすることが求められる。本研究においては、低年齢の幼児を対象としたことや、幼児の自発的な象徴遊びに着目したことから、相互交渉場面における象徴遊びの検討は行わなかった。今後は同年代幼児との象徴遊びにおける相互交渉の発達についても検討していく必要がある

引用文献

- American Psychiatric Association. (2013). *Desk Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-5*. American Psychiatric Publishing. 高橋三郎, 大野 裕(監訳): 染矢俊幸, 神庭重信, 尾崎紀夫, 他(訳)(2014): *DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き*. 医学書院.
- Astington, J.W., & Jenkins, J.M. (1995). Theory of mind development and social understanding. *Cognition & Emotion*, 9, 151-165.
- Baron-Cohen, S. (1987). Autism and symbolic play. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 139-148.
- Bates, E., Camaioni, L., & Volterra, V. (1975). The acquisition of performatives prior to speech. *Merrill-Palmer Quarterly*, 21, 205-226.
- Belsky, J., & Most, R.K. (1981). From exploration to play: A cross-sectional study of infant free play behavior. *Developmental Psychology*, 17, 630-639.
- Benson M.S. (1993) The structure of four and five year olds' narrative in pretend play and storytelling. *First Language*, 13 : 203-223.
- Brown, R. (1973). *A first language*. Cambridge, Mass. Harvard University Press.
- Campbell, S.B., Leezenbaum, N.B., Mahoney, A.S., Moore, E.L., & Brownell, C.A. (2016). Pretend play and social engagement in toddlers at high and low genetic risk for autism spectrum disorder. *Journal of Autism and Development Disorders*, 46, 2305-2316.
- Charman, T., Drew, A., Baird, C., and Baird, G. (2003). Measuring early language development in preschool children with autism spectrum disorder using the MacArthur Communicative Development Inventories (Infant Form). *Journal of Child Language*, 30, 213-136.
- Charman, T., Swettenham, J.S., Baron-Cohen, S., Cox, A., Baird, G., & Drew, A. (1997). Infant with autism: An investigation of empathy, pretend play, joint attention, and imitation. *Developmental Psychology*, 33, 781-789.
- Constantino, J.N., and Gruber, C.P. (2012). *social responsiveness Scale, Second Edition(SRS-2) Manual*. Western Psychological Services. 神尾陽子 (監訳・編著) (2017) :日本語版 SRS-2 対人応答性尺度. 日本文化科学社.

- Cristilli C, Capirci O, and Graziano M. (2010). Age-related changes in co-speech gesture and narrative: Evidence from French children and adults. *Speech Communication*, 52 : 565-576.
- Diehua J.J, Bennetto L and Young E.C. (2006). Story recall and narrative coherence of high functioning children with autism spectrum disorders. *Journal of Abnormal child psychology*, 34 : 87-102.
- Feagans L and Appelbaum M.I. (1986). Validation of language subtypes in learning disabled children. *Journal of Educational Psychology* : 78, 358-364.
- Fenson, L., Dale, P.S., Reznick, J.S., Thal, D., Bates, E., Hartung, P., Pethick, S., & Reilly, J.S. (1993). *MacArthur Communicative Development Inventories: Users guide and technical manual*. Singular Publishing.
- Fivush, R. (1994). Constructing narrative, emotion and self in parent-child conversation about the past. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.). *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. pp.136-157. New York: Cambridge University Press.
- Fox BJ & Wright M. (1997). Connecting school and home literacy experiences through cross-age reading. *Reading Teacher*, 15 : 535-555.
- 藤野 博. (2001). 言語発達障害児における象徴遊びと言語理解との関係について. *音声言語医学*, 42, 129-136.
- 藤野 博. (2002). 健常幼児における象徴遊びの発達: 象徴遊びテストによる調査. *音声言語医学*, 43, 21-29.
- 藤野 博・種村 純. (1999). 言語発達遅滞児における象徴遊びと言語の発達の関係. *東京学芸大学紀要, 教育科学*, 50, 121-127.
- 藤上実紀・大伴潔. (2009). 自閉症児の獲得語彙に関する研究. *東京学芸大紀要 総合教育学系*, 60, 487-497.
- Goldman S. (2008). Brief report; Narratives of personal events in children with autism and developmental language disorders; Unshared memories. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38 : 1982-1988.
- 隅田征子. (1988). ことばを支える認知機能の発達. 飯高京子・若葉陽子・長崎勤(編), *ことばの発達の障害とその指導*. (pp, 55-72), 東京: 学苑社.

- Harris P. (1993). Pretending & planning. In Baron-Cohen, S., Tager-Flusberg, H., & Cohen D. (Eds.). *Understanding other minds: perspective from autism*. (pp, 228-246), Oxford: Oxford University Press.
- Harris, P.L. (2000). *The work of the imagination*. Oxford: Blackwell.
- Happe F. (1994). *Autism: A New introduction to psychological theory*. UCL Press, London.
- Houston G. (1997). The power of story: What I have learned as writer and teacher. *Reading Teacher*, 50 : 382-395.
- Ingersoll, B., & Schreibman, L. (2006). Teaching reciprocal imitation skills to young children with autism using a naturalistic behavioral approach: effects on language, pretend play, and joint attention. *Journal of Autism and Development Disorders*, 36, 487-505.
- 岩崎淳也・畔上恭彦. (2018). 定型発達児における模倣能力と語彙獲得との関連性の検討. *国際医療福祉大学学会誌*, 23, 9-15.
- Jenkins, J.M., & Astigton, J.W. (2000). Theory of mind and social behavior: Causal models tested in longitudinal study. *Merrill-Palmer Quartely*. 46, 203-220.
- Kasari, C., Gulsrud, A., Freeman, S., Paparella, T., & Helleman, G. (2012). Longitudinal follow-up of children with autism receiving targeted intervention on joint attention and play. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 51, 487-495.
- 国立国語研究所. (2009). *教育語彙の基本的研究*. 明治書院.
- 小坂美鶴. (2016). 典型発達児のナラティブのストーリー構造と内容の発達. *音声言語医学*, 57 : 261-271.
- 黒田美保・稲田尚子. (2015). [監修・監訳]. *ADOS-2 日本語版 マニュアル*. 金子書房.
- 小山 正. (2001). 自閉性障害のある子どもの人形を用いた象徴遊びに関する研究. *岐阜大学教育学部研究報告*. 49(2), 157-161.
- 小山 正. (2012). 初期象徴遊びの発達の意義. *特殊教育研究*, 50, 363-372.
- 小山 正. (2020). 知的発達症をもつ子どもの物にかかわる行為・認識と言語発達との関連. *音声言語医学*, 61, 177-187.
- Lam, Y.G., & Yeung, S.S. (2012). Cognitive deficits and symbolic play in preschoolers with autism. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 8, 560-564.

- Lazenby, D.C., Sideridis, G.D., Huntington, N., Prante, M., Dale, P.S., Curtin, S., Henkel, L., Iverson, J.M., Carver, L., Dobkins, K., Akshoomoff, N., Tagavi, D., Nelson III, C.A., and Tager-Flusberg, E. (2016). Language differences at 12 months in infants who develop Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 46, 899-909.
- Leslie, A.M. (1987). Pretense and representation: The origins of “theory of mind”, *Psychological Review*, 94, 412-426.
- Lewis, V., & Boucher, J. (1995). Generativity in the play of young people with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 25, 105-121.
- Libby, S., Powell, S., Messer, D., & Jordan, R. (1998). Spontaneous play in children with autism: A reappraisal. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 28, 487-497.
- Lillard, A.S. (1993a). Pretend play skill and the child’s theory of mind. *Child Development*, 64, 348-371.
- Lillard, A.S. (1993b). Young children’s conceptualization of pretense: Action or mental representation state? *Child Development*, 64, 372-386.
- Lillard, A.S. (2017). Why Do the Children (Pretend) Play? *Trends in Cognitive Sciences*, 21, 826-834.
- Lowe, M., & Costello, A. (1988). *A Symbolic Play Test*, NFER-NELSON, Windsor, England,.
- Losh M & Capps L. (2003). Narrative ability in high -functioning children with autism or Asperger’s syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 33 : 239-251.
- Losh M. & Gordon P.C. (2014). Quantifying narrative ability in autism spectrum disorder : A computational linguistic analysis of narrative coherence. *Journal of Autism and Disorders*, 44, 3016-3025.
- Mahoney, G., & Macdonald, JD. (2007). *Autism and Developmental Delays in Young Children : The Responsive Teaching Curriculum for Parents and Professionals*. proed, Austin, Texas.
- McCune, L. (2008). *How Children learn to learn language*. Oxford: Oxford University Press.
- 宮田 Suzanne・大伴 潔. (2020). 平均発話長(MLU)から捉えた日本語の初期文法発達—自立語付属語 MLU を指標として. *言語聴覚研究*, 17, 87-95.

- Morgan, B., Maybery, M., & Durkin, K. (2003). Weak central coherence, poor joint attention and low verbal ability: independent deficits in early autism. *Developmental psychology*, 39, 646-656.
- Mundy, P., Sigman, M., & Kasari, C. (1990). A longitudinal study of joint attention and language development in autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 115-128.
- 仲野真史・長崎 勤. (2012). 幼児におけるナラティブの結束性の発達—ケーキ作り経験に関する報告の分析を通して—. *発達心理学研究*, 23, 66-74.
- 夏目知奈・廣田栄子. (2017). 自閉スペクトラム児のフィクショナルナラティブにおける発話特徴. *音声言語医学*, 58 : 159-170. 奥田晶史・玉井ふみ(2019). 自閉スペクトラム障害児における語彙理解・統語理解能力について：定型発達児との比較, *人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌* 19, 73-78.
- Nicolopoulou, A. (2007) The interplay of play and narrative in children's development: Theoretical Reflections and concrete examples. In *Play and Development:: Evolutionary, Sociocultural, and Functional Perspectives* (pp.247-273) Publisher: Erlbaum Editors: Artin Goncu, Suzanne Gaskins.
- Nielsen, M. & Dissanayake, C. (2000). An investigation of play, mental state terms and false belief understanding : In search of a meta-representational link. *British Journal of Developmental Psychology*, 18, 609-624.
- 奥村裕子・小林哲生. (2019). 日本語レイト・トーカーにおける表出語彙のカテゴリー構成の検討. *音声言語医学*, 60, 205-213.
- 小椋たみ子・綿巻徹. (2004). 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」. 京都国際社会福祉センター.
- 太田一貴・林 崎慧. (2000). 遊びの発達と評価. *INREAL 研究*, 10, 83-100.
- 大伴 潔(2000). 健常児と言語発達遅滞児における接続表現の発達—連続絵課題を通して— . *特殊教育研究施設研究年報*, 1-8.
- 大伴潔・林安紀子・橋本創一・池田一成・菅野敦. (2008). 言語・コミュニケーション発達スケール. 学苑社
- 大伴 潔・若葉陽子. (1994). 健常 5 歳時における言語能力に関する検討. *東京学芸大学特殊研究施設報告*, 43 : 9-16.
- Orr, E., & Geva, R. (2015). Symbolic play and language development. *Infant Behavior & Development*, 38, 147-161.

- Ozonoff, S., & McEvoy, R.E. (1994). A longitudinal study of executive function and theory of mind development in autism. *Developmental psychology*, 6, 415-431.
- Paterson, C., & Arco, L. (2007). Using video modeling for generalizing toy play in children with autism. *Behavior Modification*, 31, 660-681.
- Peterson C & McCabe A. (1983). *Three ways of looking at a child's narrative*.
Developmental psycholinguistics, Plenum Press, New York.
- Rescorla, L., & Safyer, P. (2013). Lexical composition in children with autism spectrum disorder (ASD). *Journal of Child Language*, 40, 47-68.
- 李 熙馥・田中真理. (2011). 自閉スペクトラム障害児におけるナラティブ研究の動向と意義. *特殊教育学研究*, 49 : 377-386.
- 李 熙馥・田中真理. (2013). 自閉スペクトラム障害児におけるナラティブの特性：フィクションナルナラティブの構成と行為の側面に焦点を当てて. *発達心理学研究*, 24 : 527-538.
- Roth, F.P, & Clark, D.M. (1987). Symbolic play and social participation abilities of language-impaired and normally developing children. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 52, 17-29.
- 斉藤佐和子. (2002). 健常幼児の談話における構文能力と説明能力—状況絵を用いて—. *音声言語医学*, 43 : 308 - 315..
- Sigman, M., & Ungere, J. (1981). Sensorimotor skills and language comprehension in autistic children. *Journal of abnormal child psychology*, 9, 149-165.
- 杉本直子. (2004). 幼児の心の理解におけるふり遊びの役割：物の見立てに注目して. *乳幼児教育学研究*, 13, 61-68.
- Tager-Flusberg H & Sullivan K. (1995). Attributing mental states to story characters: A comparison on narratives produced by autistic and mentally retarded individuals. *Applied Psycholinguistics*, 16 ; 241-256.
- Terrel, B.y., Schwartz, R.G., Prelock, P.A, & Messick, C.K. (1984). Symbolic play in normal and language impaired children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 27, 424-429.
- Tomasello, M., Todd, J. (1983). Joint attention and early lexical acquisition style. *First Language*, 4, 197-212.

- Trawick-Smith, J. (1990). The effects of realistic versus non-realistic play materials on young children's symbolic transformation of objects. *Journal of Research in Childhood Education*, 5, 27–36.
- Tunncliffe, S.E., & Gkouskou, E. (2019). Science in action in spontaneous preschool play : an essential foundation for future understanding. *Early Child Development and Care*, 190, 54–63.
- Ungerer, J., & Sigman, M. (1981). Symbolic play and language comprehension in autistic children. *American Academy of Child Psychiatry*, 20, 318-337.
- 内田伸子. (1982). 幼児はいかに物語を創るか? 教育心理学研究, 30, 211–221.
- 綿巻徹・小椋たみ子. (2004). 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」. 京都国際社会福祉センター
- 渡瀬弘子. (2004). 自閉症スペクトラムの子どもの遊びと言語の発達. 小山 正・神土陽子 (編). 自閉症スペクトラムの子どもの言語・象徴機能の発達. pp88-110. ナカニシヤ出版, 京都.
- Westby, C. E. (2000). A scale for assessing developmental of children's play. In Gitlin-Weiner, K., Sandgrund, A., & Schaefer, C. (Eds.), *Play diagnosis and assessment*. pp. 15-35. New York: Wiley.
- Williams, E., Reddy, V., & Costall, A. (2001). Taking a closer look at functional play in children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 31, 67-77.
- Wolf, D. P., Rygh, J., & Altshuler, J. (1984). Agency and experience: Actions and states in play narratives. In I. Bretherton (Ed.), *Symbolic play: The Development of Social Understanding*. pp. 195-218). Cambridge, New York: Academic Press.
- 吉岡豊. (2018). 自閉スペクトラム症児における表出語彙, 品詞割合と語彙年齢との関係. 発達障害支援システム学研究, 18, 89-95.
- Youngblade, L.M., & Dunn, J. (1995). Individual differences in young children's pretend play with mother and sibling : Links to relationships and understanding of other people's feelings and beliefs. *Child Development*, 66, 1472-1492.
- 吉澤千夏・大瀧ミドリ. (2008). 1歳児のままごと遊びにおける「食べる」「飲む」に関わる母子の表出スロット. 文京学院大学人間学部研究紀要, 10, 21-36.